

松の操美人の生理

侠骨今に馨く賊胆猶お腥し

三遊亭圓朝

青空文庫

一席申し上げます。お耳慣れました西洋人情話の外題を、松の
みさびしん操美人のいきうめ生理とあらためまして：これは池の端の福地先生が口
 うつしに教えて下さったお話で、フランス仏蘭西のおとこだて侠客がせつぷ節婦を助け
 るという趣向、原書は *Buried* 《ベリッド》 a 《エ》 *Life* 《ライフ》
 という書名だそうで、酔った時はちと云い悪い外題でございま
 すが、生きながら女をどちゆう土中に埋め、うず生理めに致しましたを土中
 から掘出しまするなほ仏蘭西の話を、日本になほ翻して、地名も人名も、
 日本の事に致しましただけで、ぜん前以てお断りを申さんでは解りま

せんから、申し上げますが、アレキサンドルを石井山三郎いしいさん ろうというおとこだて侠客にして、此の石井山三郎は、相州浦賀郡東浦賀あらいまちの新井町にかいせんとんや船問屋で名主役を勤めた人で、事実有りました人で、明和の頃名高い人で、此の人の身の上に能く似て居りますから、此の人に擬え、又カウランという美人をお蘭らんと名づけ、ヴリウという賊がございますが、是は粥河圖書かゆかわずしよという宝暦八年に改易かいえきに成りました金森兵部かなもりひょうぶしやうゆう小輔様の重役で千二百石を取った立派なお方だが、身持が悪くて、悪事を働きました事を聞きましたから、これを圖書の身の上にいたし、又マクスにチャーレという、彼方あちらに悪人がござりますからマクスを眞葛まくずしゆうげん周玄おなんどやくという医者にして、チャーレを千島禮三ちしまれいぞうという金森家の御納戸役

にいたし、パリ巴里の都が江戸の世界、カライの港が相州浦賀で、倫ロンドン敦が上総かずさの天神山てんじんやま、鉄道は朝船あさふね夕船ゆうふねに成っておりますだけ、お話はすべて原書あちらの儘まにしてお聞きに入れますから、宜しく其方そちらでお聞分けを願います。金森家の瓦解に成りましてから、多く家来も有りましたが皆散りく／＼になりまして、嫡子いづものかみ出雲守、末の子まで、南部大膳大夫なんぶだいぜんだいふ様へお預けに成りました。粥河圖書は年としごろ齡二十六七で、色の白じんぴんい人品よの好ひとい仁で、尤も大祿を取った方は自然品格が違います。大分貯だいぶえも有りました、白金台町しろかねだいまちへ地面を有もちまして、庭なども結構にして、有ゆ福うふくに暮して居りました。眞葛周玄と云う医者いしやを連れて、丁度十月十二日池上のお籠こもりで、唯今以て盛りまするが、昔から実に大

した講こうじゅう中ちゆうがありまして、法華宗は講中の気が揃いまして、首しゆに珠数じゆずをかけ団扇うちわだいこ太鼓たいこを持って出なければなりません様に成つて居ります。彌河もとは素もとより遊山ゆざん半分信心ほんぶんしんは附つけたりですから、眞葛まのくわの外ちゆうじに長治ちやうじという下男げなんを連れて、それに芳よしちやう町やっこの奴こかねの小兼こかねという芸者げいしや、この奴やつこというのは男らしいという綽名あだなで、この小兼こかねは厭いや味やみの無い誠まことにさっぱりとした女おんなで、芸げいが善よくつて器量きりやうも好ようございます。それに客愛想きやくあいしやうも好よいから当時の流行妓はやりっこで家うちには少しの貯たくわえも有るといふ位くらい、もう一人はその頃の狂歌師きやうかし談洲樓だんしゅうろう焉馬えんばの弟子でしで馬作うまさくという男おとこ、併しかし狂歌きやうかは猿丸さるまる太夫たいふのお尻いんどという赤あかツ下手べただが一いち中節ちゆうせふしを少し呻うなるので、それで客きやくの幫間たいこを持つて世よを渡るといふ男おとこ、唯此ただこゝの男おとこの顔かほを見ると何なにとなく面白おもしろくなると

いう可愛らしい男で、皆様が鼯肩にして供に連れて歩くという、此の五人連で好^い天気^きでぶら〜と出掛^いけました。

馬^{わたくし}「私は初めて来たので、尤もお宗^{しゅうし}旨^しで無いからだ^いが何うも素敵^いで」

ときよろ〜する。両側は一面に枝柿^{えだがき}を売^いる家^{いえ}が並んで、其の並びには飴菓子屋汁粉屋飯屋などが居て、常には左のみ賑かではございせんが、一年の活計^{くわし}を二日^にで取るとい^いう位^ひな苛^{ひど}い商^{しやう}いだが、実に盛んな事^{こと}で、お参りの衆は皆首に珠数を掛けて太鼓を叩^{たた}きます。

馬「斯う何だか珠数と太鼓が無いと極^きりが悪いよう^{よう}で、もし珠数と太鼓を買おうじゃアありませんか、珠数というのを」

圖「馬鹿ア云え、此の連中にそんな物が入るもんか、入らんぜ」

馬「それでも何だか無いと形なりが極りませんから、兼ちゃんお待ちよ珠数を買うから：おい婆さん」

婆「はいく」

馬「あの珠数は幾らだ」

婆「はいく其方そちらはなんで三分二朱でございます」

馬「高いね、もう些ちつと安直なのは無いかね、安いので宜しい、

今日一日の掛流しだから、安いのが好いい、安いのは無いかい、其方その方つちの方は幾らだ」

婆「此方こちらのは白檀ですから一両二分で」

馬「ひやア篋べらぼう棒ぼうに高いく、もつと安いのは無いか、此方こつちのは」

婆「これは紫檀したんですから二分で宜うございます」

馬「まだ高いく、おいほんの間に合せにするのだから」

婆「そんなら梅と桜に遊ばせ」

馬「それは安いかい」

婆「六百文でございます」

馬「妙々梅と桜で六百出しや気儘か、宜しい：皆みなさん様先へ入らつ

しやい：じやア婆これさん此金で」

婆「生あいにく憎お釣がございませぬ、お気の毒様で、何うかお端はした銭が

ございますなら」

馬「じやア斯うしよう、お参りをして来るからそれ迄に取替えて

置いてお呉れ」

婆「はいかしこまりました」

と婆ばあは金を受取り珠数を渡します。馬作は珠数を首に掛け、

馬「そんなら婆さんきつと屹度頼んだぜ、さア此こいつ奴が有りやア大威張だ、時に兼ちゃん何うです大変な賑いですねえ、今日のお賽銭は何どのくらい上りましょう、羨うらやましいね私もお祖そしさま師様に成りてえ、もしあんな別嬪なぞに拝まれてね」

兼「馬鹿アお云いな勿体ない」

馬「さア来た〜」

と本堂に上り柏手をポン〜。

馬「いや柏手じやア無かつた粗そ、つ忽かしくツて宜い、南無妙法蓮華經な〜南なア無んめ妙ウ法蓮華經ちよつともし一寸様子が好いじやアあり

ませんか別嬪ばかりずうつとき、色気の有る物にやア仏様でも敵
 いませんね、女がお参りに来なくつちやアいけません、何うも鼻
 筋の通つた口元の締つた所は左團次に似て、顚あごの斯う：髪際はえぎわや
 眼とこの所は故人高助たかすけにその儘で、面おもざしは團十郎にすつぱりで、
 あゝありやア先刻遇さつきあつた」

兼「何を云つてるのだえ騒々しいねえ」

馬「何さお祖師様のお顔の事さ」

兼「お祖師様のお顔に先刻遇さつきつたかえ」

馬「いえ何さ：扱忠さてちゆうじ二もお蔭様で一度にふツ切りまして漸く歩

けるように成りましたから、お礼に一ちよつと寸是非上らなくツちやア

ならんと申しましたが、生憎あいにく今日はお約束がございました、そ

れわたくしが言ことづ伝つてを頼まれて参りました宜しく申し上げて呉れと申
しました」

圖「これく馬作何を云うのだ」

馬「いえさ、私わたくしの友達がお祖師様の御利益ごりやくで横根を吹っ切りまし
たから、其のお礼のことづかりを云つてる処で」

皆々「アハ、ハ、ハ」

二

これから元名村もとなむらの所へ来ると丹波屋たんばやという茶漬屋があります
が、此処ここも客が一杯で彼あれから右へ切れて、川崎へ掛る石橋の所、

つまごいむら
 妻恋村へ出ようとする角に葭簀張よしずっぱりが有つて、其の頃は流行はやりま
 した麦藁細工で角兵衛獅子こしらを拵え、又竹さしに指した柿などが弁慶に挿さ
 してあります。床しやうぎ凡には一寸煙草盆ちよつとがあつて、店の方には
こしに捻鉄松風ねじかねまつかぜに狸の糞たぬきくそなどという駄菓子たすきが並べてございます。
 唯今茶を汲んで居る娘は年が十八九で、眼元めもとが締り、色くつきり
 と白くして豊しもぶくれ頬ほの愛敬あいきやうのある、少しも白粉おしろい気の無い実じつに透す
きとお通とほる様な、是が本当の美人と申すので、此の娘が今櫻たすきがけ掛かけで
 働いて居ります、余あんなり美しいから人が立停たちどつて見て居る様子。
 馬うま「もし旦那ちよつと一寸御覧ごらんなさい、素晴らしい別嬪べっぴんで、御覧ごらんなさいあ
 の何うも前掛まへかけなどが垢染あかぢみて居るが何うも別嬪べっぴんで」

圖「成程是は美人だ」

馬「木地で化粧なしで綺麗だから、何うも得て何処か悪い所の有るもんだが、こりやア疵気なしの尤い玉で」

周玄は中々の助平だから先刻から途々女を見て悦んで居る所へ、

馬「先生何うです彼の娘は見事じやアありませんか」

周「は、ア成る、いやこれは美人、こりやア恐入った代物だ、

もし彼の床几に腰を掛けてる客ね、茶は呑みたく無いが、あの娘

を見たい計りで腰を掛けて居ますわ、実に古今無類の嬋妍窈

窕たる物、正に是れ沈魚落雁閉月羞花の粧いだ」

馬「は、当帰大黃芍薬桂枝かね、薬の名のような賞め方だ

からおかしい、何しろ一寸休んで近くで拝見などは何うでげし

よう」

皆々「それがよかろう」

馬「はい御免」

娘「入らっしゃいますし」

先から居る客「こりやア大きにお邪魔を致しやした、どれ出掛け
ましよう」

娘「まア御ごゆつく緩りと遊ばしましたし左様なら有難う」

馬「旦那御ごごろう覧じろ今の三人連づれは顔附でも知れるが皆みんなな助平連れんで、
此家ここの娘を見たばかりでもう煙草入を忘れて往いきましたぜ」

圖「そりやア困るだろう、返して遣んな」

馬「返せたツて此の人込の中で知れやアしません、へゝゝゝこり

やアお祖師様わたくしから私への授かり物で、有難い、いえさ、向むこうでもこの人込の中だから気が付きやア仕ません、忘れて居ますわ」と懐の中へ入れる。

圖「止せといえばよ、手前お祖師様の罰ばちが当るぜ、止しなよ」と云う所へ前の客はきよろ／＼まなこ眼で遣つて来まして、

客「只今此処こゝへ煙草入を忘れましたが後あとで気が付きましたので、もし此処にやア落ちていませんでしたか」

馬作は不性ふしょうがしよう無承に懐から煙草入を出しまして、

馬「はい今追懸おつかけて返して上げようと思つて居たが、是ですか」客「へいこれでございます、有難うございました、いえも詰らん煙草入ですが途中で煙草が無いと困りますから、左様なら有難う

「ございます」

とずいと往つてしまふ。馬作は後あとで口を明むこういて向を眺めて、

馬「あゝあれだ、取りに來きようが余あんまり早い取りに來ようだ」

圖「狡ずるい事をするとなつまり損をするぜ」

馬「損をするつてえ且わたくし那是迄私は何にでも損をした事はございま

せん、そりやアもう、からツきし酔つてお座敷を勤めてもね、物

を忘れた事はありません、そりやアもう其そこ処らに有る物を何でも

拾つて袂へ入れてね、お肴でも何でも構やア仕ません、それだか

ら家うちへ帰るとね何時いつでも手拭の八本位袂から出るので、そりやア

実に慥たしかなもので：いや待てよ：あゝ珠数じゆずの釣つりを取るのを忘れた」

圖「はゝゝゝそれ見ろ、直すぐに罰ばちが當つた」

馬「いや忌いめえましい、時に兼かねちゃんは何うしたろう、まだ来ねえ、だが旦那あの妓こぐれえ買かい喰ぐいの好きな妓こはありませんぜ、先刻さつきも大きな樽柿づかと蒸ふかし芋を両方の手に持って、歩きながらこう両方の喰く競いくべを為しながら：あゝ来たゝ：兼かねちゃん此処こゝだゝ、あんまり遅いから待つて居たので」

兼「おや左様そう、今頼たのまれた物を買かつてる中遅うちくなつたの」

馬「頼たのまれ物だと、なんだ串柿くわかね、おい姉ねえさんお茶をおくれ」

茶碗ちawanも沢山たんとはございませんから、お客の帰る傍そばから其の茶碗ちawanを洗あつてしとやかに茶を汲くんで出す。

娘「貴方あなたお茶をお上り遊あばせ」

と出すのを見ると元小兼もとせの主しゆう方かたの娘むすめで、本多長門守様の御

家来岩瀬某なにかしと申し、二百石を頂戴した立派な所のお嬢様で何う零おちふれ落ちふれてこんな葭簀張よしずっぱりに渋茶を売つて居るか、小兼はじつと娘の顔を見詰めた切り、暫くは口もきけません。

兼「お嬢様まア何うなすつた」

娘「兼や誠に面目次第も無い、お母様つかさまと私と一昨年からこんな業わざをして」

兼「ほんにまアねえ、私わたくしも御存じの母が亡くなりまして其の亡くなる前にも、何うぞして入らつしやる所が知れ無いかと申して、何うか尋ねて御恩に成つたお礼を申してと、もう此方こなたに斯うやつて入らつしやる事が知れ、ば、及ばずながら疾とうにお力にも成つて上げましたものを、もう此方こなたに入らつしやるとは知りませんも

んですから……本当にまあ好く……馬作さん何だつて勿体ない、お嬢様にお茶など戴いて好い気になつて、彼方へお出でよう」

馬「だつて茶店の姉さんに此方から茶を汲んで出す奴が有るものか」

兼「こりやア私の御主人様だよう」

娘「お母様兼が参りましたよ、一寸お逢い遊ばせ」

破れた二枚屏風の中に年齢五十五六の老母、三年越し喘息に悩みこんく咳をしながら、

母「兼や誠に暫く」

兼「御新造様誠に御無沙汰致しました」

母「まだお前が十五六の時分に逢った切りで、それから三年振で今日逢うと、一寸ちよつと見ては話も出来ない位見忘れる様に大きく成ったのう、人の噂に大層働きの好よい芸者になつたとは聞いたが、お前は一体親孝行で母を大事にしたが、旦那様もお前は感心だ、あゝいう芸者などには似合わぬ者とお誉ほめなすつたが、是も孝行の徳だ、私は又斯こんな姿になるまで零落おちぶれしました」

兼「もう唯今お嬢様にも左様そう申すので、何どうかして何処どこに入らつしやるか知れ無い訳もあるまいと尋ねましても何どうしても知れませんが、慥たしか何時いつぞや三田みたに入らつしやる様子を聞きましたか」

母「三田の三角の所の詰らない所に引込んで、それから此方へ便
つて来て、誠に私も三年越し喘息で、今にも死ぬかと思うが死な
れもし無いで、早く死んだら娘にも却つて楽をさせる様に成ると
思つて居るばかりで、此の節此方へ来て麦藁細工を夜なべに内職
して、夜寝る眼も寝ずに娘が大事にしてくれるから、それ故私も
斯うやつて命を繋いで居るばかりで、お前に遇つても何一つ遣る
事も出来ないで」

兼「何う致しまして飛んだ事を、私ももう何です、有難い事に皆
様が鼻屑にして下さつて、明日ももうお約束でいけません、明
後日は屹度此方へお尋ね申します、お力に成るといふ訳にも参り
ますまいが、母の遺言もございますし、何うぞ気を落さずに気を

確しつりとなすつて居て下さいまし、これは誠に少しばかりですが

と合がつ切き袋ぶくろから小粒を二つばかり出しまして、

兼「これはほんの私わたくしの心ばかり何うか何ぞ召めし上あがり物ものでも」

母「そんな心配しないでよも好よい、私はお前に何ぞ上げようと思つて居るに却かえつて貰もらつては」

兼「いゝえほんの心ばかりで、生あいに憎にく今日は持合せがなんですから又出直して参ります、本当に能よくねえ斯とこんな所にお住いで」

馬「兼ちゃんお出掛に成りましたよ、行ゆくよ」

兼「先へお出でよ、直すぐに行いくから」

名残り惜しいから何かぐずぐずして「何いれ又」と小兼は出掛けます。娘も見送りながら葭よし簀ず張はりを出ようとすると、川崎道から

参りましたのは相州東浦賀の名主役石井山三郎で、連れて参つた男は西浦賀の江戸屋半治えどやはんじ、ちよつと競肌いなせな男で、これは芳町よしちようの小兼と疾とうより深い中で、今は其の叔父の銚子屋へ預けの身上、互に逢いたいと一心に思つて居るところ、

兼「おや半ちゃん、おや旦那誠にお久し振、何うしなすつたかちよつと一寸御機嫌伺に上りたいと思つても船が嫌いなもんですから、此処こゝでまアお目に懸るとは本当に思い掛けない訳で」

山「実に此処こゝで遇あうとはなア、兼公、半公もお前めえに逢いてえだろうが出られねえ首尾で、今日は漸く暇を貰つて出て来たが、直ぐお前めえの所ところへも往いけねえというのは何分世間はばかを憚はる訳で」

兼「まア何でも好いい、嬉しいねえ、此処で旦那にお目に懸るとは

本当に馬作さん御利益でごりやく」

馬「さて旦那誠に暫く、もし早速だが聞いてお呉んなせえ、兼ちやんはお宗旨では無かつたのを此の節半ちやんに逢わして下さいッて、それから信心でね、今日もお参りに往いくから一緒に往いこうとッて兼ちやんのお供で」

山「そりやア好いいがお客が先へ往いつた様子だ、早く往いきねえ」

馬「なアに彼あれは二三度遇あつた客で、なにさ一向訳の分らん奴で、途中で落合すぐつてはッ直すぐさまお供という様な訳ですから、此処で旦那にお目に懸すぐれば直すぐに馬の乗替のりけえお客の乗替のりけえてえ奴で、実に此処でお目に懸すぐるたア有ありがて難がえね、もし今もね兼ちやんがお祖師様を拜むのを傍で聞いてましたが、あの混雑する中で半ちやんにノ

「半ちゃんに〜というのが能く聞えるのでこれは何うしても是非両方からお賽銭を取るのです、旦那今日はずうつと川崎泊りでしょう、今夜は藤屋へ泊って半ちゃんに逢わして遣つて下さい」

と馬作はのべつに喋つて居ります。山三郎は其の話を聞きながし、心ともなく今小兼の出て来た葎簀張よしずっぱりの中を見ますると十八九の綺麗な娘、思わず驚きまして、

山「美しい娘だのう」

兼「旦那あれは私の旧もとの御主人様ですから、お願いで、何うぞ休んで沢山お茶代を置いてツて下さい」

と半治と二人を家の中へ突込む様にして、馬作を連れて出て往つて仕舞いました。

山「能く慣れない事が出来ませぬ」

娘「はい誠に慣れませんで、お客様へ前後して間違つていけません」

といううち屏風の内でごんごん咳入りまして、今にも死ぬかと思う程に苦しく見える喘息で、娘はお客様にも構わず飛んで往きまして、撫でたり胸を押えたり介抱する様子を、山三郎は見て居りましたが、孝心面おもてに現われてなかく浮気みえや外見みえでする介抱でございませぬ。

山「成程此の介抱は容易に出来ない介抱だ、感心な娘だのう半治、客にも構わず夢中になつて母親を一生懸命に看病するが、あれはなかく出来るもので無い」

と頻りに感心して見て居ります。

四

山三郎は娘の老母を看病する体ていを感心して見て居りましたが、咳も少し止った様子。

山「姉さん治おさまったかえ」

娘「はい有難うございます、もう少し立ちますと治おさまります、もう悔びつくり致しました」

山「さぞお母つかさんはせつつのううございますよう」

母「誠に失礼でございますが、お客様を置きまして介抱いたしま

すが、もう咳込んで参りますと今にも息が止るかと思ひますくらいでございます、寒くなりますと昼夜に四五度ぐらい咳込みますから」

山「さぞお困りで有ろう、併し感心な娘御で、お前さんは好い子を持つてお仕合せで」

母「はい、もう此の娘の手一つ計りでございます、是から又寒くなりますと、夜分寝ずに咳きますので誠に堪えかねます、寧そ一ト思いに死んだら此の娘も助かると思ひますけれども、死ぬにも死なれませんしねえ貴方」

山「そんな弱い気を出してはいけません、何か外に別段親類も何も無いのかね」

母「はい」

山「唯お前さんと此のお娘さん切かね、私は田舎者で相州東浦賀の者で、小兼に聞けば能く分りますが、入らざる奴と思し召すかは知りませんが、年も往かん娘御が彼の介抱をなさる様子、実に孝心で、私は始めてお目に懸ったが、中々親孝行という事は出来ないもので、心底しんそこから感心しました、真実の処を申すが、女ばかりで別に親類もなく相談する処も無くつてお困りの節は、見継いで上げますから、小兼に話して手紙の一本も遣しなされば直すぐに出て来て話相手にも成りましようから、お心置なく小兼にまで一ちよつとことづつて

寸言伝をなさるよう」

母「有難うございます、御親切様に、彼の母は私共わたくしどもへ勤めて

実銘じつめいな者で、それも亡なりましたそうですが、それでも彼が芸者とか何とかで母を養いまして、商売柄に似合わない親切者で、何うか鼻屑ひいきにしてお遣り遊ばして」

山「誠に少ないがお母つかさんに此金これで何ぞ温かい物あつたでも買って上げて」

と紙入を出して萌黄もえぎきんらん金襴の金入から取出しました、其の頃はガクで入って居りますから、何十両だか勘定の分らん程ざくりと拵つかみだ出して小菊こぎくの紙に包み、

山「少すこしばか許りですが、もう行きますからお茶代に」と出して出掛けます。

娘「これはまア沢山に有難うございます、もしお母つかさん兼がお茶

代を心付けて呉れましたから、彼の方が沢山置いてつて下さいました、大変搦んで」

母「左様かえ、お前が私を孝行にするから御祖師様の御利益で此のお錢も」

と開けて見ると中は金で十両許り、其の頃の十両ですから悔りして

母「おやまあお金だよ」

娘「ほんとにまあこんなに沢山、御親切な方ですnee、彼様に仰しやつて、浦賀の者だから手紙をよこせとまで仰しやつて有難い事ですnee、まあお母さん少し落着いたらお粥でもお上り遊ばせ、どれお夕飯の支度を為しましょう」

と娘は右の金を神棚へ上げ、その中うち暗くなるから彼方あちら此方こちら片付けるうちぽつり／＼と降出して来ました。日癖ひくせの所せ為えか、今晴れたかと思うとどうと烈しく降出して来て、込合います往来もばつたりと止りました。娘は辺あたりを片附けようと思うと縁台の上に蕨も黄金えぎきん欄らんの結構な金入が乗つて有るから、娘「おやお母つかさん大変な事を為すつた、あの先刻さつき沢山お心附を下すつた旦那様が、お金入を忘れて入らつしやいましたよ、中には余よつぽど程お金がありますさぞが嘸お困りさぞでございましょう、彼あの方の事ですから外にもお貯えはありませうが、兎うに角私わたくしがお宿迄お届け申しませう」

母「それでもお前、お宿は浦賀だと仰しやつたが」

娘「いえあの今夜は川崎の本藤もとふじへ泊るからとのお話を聞きまし
たから、小兼も慥たしかそこへ往いく様子ですし、ひよつとお差さ支つかえ
でも有るとお気の毒ですから、ちよつくり川崎まで行つて参りま
す、それに雨は降るし日は暮くれるし、もうお客も有りますまいから
心配しないで留守をして居て下さい、少しの間に往つて来ますか
ら」

と母の枕元に手当をして、両りょうづま襪はき取つて、小風呂敷に蕨黄金
欄の金入を包み、帯の間へ挿はさんで戸を開けて出ようとすると、軒
下に立つて居る武士さむらい、雨具が無いから素靴すはだしで其の頃は雪駄で
ありますから、それを腰に挿んで戸に倚より掛つて居る。

武「これはお邪魔で、なに拙者雨具を持たんで少し軒下を拝借し

て

娘「それはお困りさまで、中へ入つてお休み遊ばせ」

武「姉さんねえ此の降るのに何処どこへお出でだ」

娘「私わたくしはあの六郷の方まで参るので」

武「六郷の方ゆへ行くのなら幸いだ、拙者もこれから参るのだから

一緒ゆに行こう」

娘「私わたくしは急ぎますから」

と不気味だからそこゆに挨拶して行き過ぎますと、武士さむらいは

ピシヤ／＼供の仲ちゆうげん間まと一緒に跡を追つて来る。此方こちらは弥々いよく

変だと思ひますから早足にして、あれから堤つゝみかた方かたを離れて道みちづ

塚かへ出て、徳持村とくもちむらの靈巖寺れいがんじを横に見て西塚村にしづかむらへ出る畑中

の小高い処、此方こなたは藪やぶ 畳だゝみの屏風びんぷうの様になつて居る草原くさらのの処を
 通り掛つると、「姉ねえさん待ちな」と突いきなり然さむらい武士うしろが後うしろから襟えりがみ上がみを
 掴つかむから「あれー」と云う中うちに足首あしむねを取とつて無理むりに藪やぶ蔭かげへ担かつぎ
 込こみ「ひッひッ」というを引ひ□し、仲ちゆう間げんは此この間に帯まの間に
 挿はささんで有ありました彼のか金かね入いれを引ひ奪たくり「是こを盗とられては私わたくしが」
 といううち武さむらい士しは□□つて怪けしからん振舞まわをしようとする処へ
 通とり掛かつた一いち人にんは粥河かゆかわ圖書ずしょで、傍はたから見兼みかねて飛とんで入いり、突い
きなりさむらい然さむらい武さむらい士しの襟上えりかみ取とつて引倒ひし、又また仲ちゆう間げんをややツと云いつて放はなり
 出でした。仲ちゆう間げんは仰あおむ向むになつて見ると驚おどきました。傍かたわらに一い
ほんざし本ほん挿さの品しん格かくの好このい男おとこが佇たゞずんで居ゐるから少おし怯おれて居ゐました。
てまえ圖「何なにだ手前てまえは、何なにをする、斯か様さまなる怪けからん事ことをして何なにと心得こころえ

て居る、何だ此の女を辱めんとするのか、捨置き難い奴だが今こんに
 日は信心参りの事だから許す、行けく」
 仲「なんだ、行けとはなんだ、人をいきなり投げやアがツて、此
 の野郎叩ツくじくぞ」

と云ううち今一人の武士さむらいは引抜いて切つて掛る、無慙むざんに切ら
 れるような圖書でない。処へ眞葛周玄が駈けて来るといふ、一ちよつ
 寸と一息して後あとを申上げます。

五

西塚村で孝女お蘭が災難に遇あいます処へ、通り掛つた粥河圖書

が、悪^{わる}武^ぶ士^しを取つて投げます、片^{かた}方^くはなか／＼きかん奴^{やつ}で、大胆不敵の奴で長い刀を引抜いて切つて掛る、切られるようなる人で無いから、粥河圖書は短かな二尺三寸ばかりの刀をもつて、胸^{むね}打^{うち}にしてどーんと打込むと、彼^かの者^{もの}は切られたと思ひ、腕前^{むね}に恐れてばら／＼／＼下男諸共転がるように、田甫^{たんぽ}畦^{あぜ}道^{みち}の嫌^{きら}いなく逃延びる。所へ、少し後^{おく}れた眞葛周玄は駈付けて、周「何^どういう訳か分りませんが、まア宜^いい塩^{あんばい}梅^{ばい}に此^この娘^{むすめ}に疵^{きず}が付かないで、おや此^この娘^{むすめ}は先刻^{さつき}茶店^{ちやてん}に出て居たあの石橋^{いしはし}の際^{きわ}の、何^どうしてまアこんな処^{ところ}へ」

娘「はい有難うございます、思ひ掛なく旦那様が好^よい所へお通り掛^かりで、厭^{いと}な人が後^{あと}から附^ついて来て川崎^{かわさき}まで道連^{みちづれ}になると申しま

すから、私はわたくしぎよつとして逃げようと思ひますと、出しぬけうしろに後から抱付かれ、殺されようとする処をお助け下さつて誠に有難うございます」

周「まあ、怪我が無くつて宜よかつた併しかし何か取られはせんかえ」
娘「はい誠に濟まない事を致しました、私の店わたくしへお休みなすつたお方が忘れ物をなすつて、それをお届け申しましようと川崎の藤屋まで参ります途中で、お金の入つて有る物を只今の悪者が帯の間から持つて逃げました」

周「金入には多分に入つて居たのかえ」

娘「はい」

周「そのくらいなものはまあ宜いい、金ずくには替えられないお前

の身に怪我さえ無ければ宜しい、それは先方へ話して金高が分り
さえすれば何うにでも成る此処を通り掛つてお助け申した以上は
：何さそれは多分でも有るまいから、此処においでになる大夫が
如何様とも致して進ぜられる、何しろお家まで送つてからの事、
それからお話は家へ往つて内訳話に致しましょう、ねえ大夫それ
が宜いじゃア有りませんか」

圖「それも左様だ、それじゃア宜しき様に」

周「それは僕の胸中に心得て居りますから」

と兩人が娘の後先に附添つて茶店へ歸つて来ました。

娘「お母さん飛んだ災難に逢つて歸りました」

母「なに災難に逢つたと、どんな災難に、だから云わない事じゃ

ア無い」

娘「悪武士わるざむらいに掴つかまって私わたくしはもう殺される処を、通り掛りの旦那

様に助けられて、そして其の方は先刻せんこくお休みなすったお方で」

母「おやまア飛んだ事、貴方あなた何うも何ともお礼の申し様もごさい

ません、見苦しゆうございませすが何卒どうぞ此方へ」

周「はいくさア大夫こちら此方へ、扱さて私は先刻此処へ休んだ者で、処

が此方こなたのお嬢様が強ごう口くちに遇おうという処を斯こうやって計らずもこ

うお助け申すというも何ぞの縁で、お母つかさん私は眞葛周玄という

無骨者で、此の後は何卒ごなにとぞ別懇べんこんに、扱さて実は先刻こなた此方へお寄り申して、

小兼こかねとのお話を段々承ったが、あの小兼は大夫が長らくの間の御ご

鼻ひいき頂いただきで、それから様子を聞きましたが、どうか前は本多長門殿の

御家来だそうで」

母「はい、申すも面目ございませんが、元は岩瀬と申し、少々はお高も戴きました者でございますが、金森様の事に付いてお屋敷は不首尾となり、殿様へ種々御意見を申し上げ、諫言とかをいたしたので重役の憎みを受け、御暇になりましたが、なんの此の屋敷ばかり日は照らぬという気性で浪人致し、其の後浪宅くにおいて切腹いたし、私もそれからわたくし続いで心配が病気になつて」

周「へ、えそれははやお気の毒な訳で、就ては嬢さんをお助けなすつた大夫は、身柄は小兼にお聞きになれば分りますが、前々は今お話しあまりの金森家の重臣で、千石余をお取り遊ばしたお方で、

主家しゆうかは彼の通りの大変で、余儀なく只今は白金台町にお浪宅あではあります、お貯えが有つて、何一つ御不足の無いお身の上で、お庭なぞも手広く取つて極ごくお気楽のおくらしですが、以前と違ちがいお手少てすくなで、只今もつ以て御新造ごしんぞが無いので何うか一人欲ほしいと仰しやるので、僕も種々いろくお世話を申して、好よいのをと思うが、扱さて何うも長し短しで丁度好いと云うのが無いもので、今の身の上は町人つきあいと交際あひもする身の上だがまさか町人と縁組いをするも嫌いやだし、何か手捌てさばきも出来るような柔和な屋敷者で、遊ばせ言葉で無ければと仰しやる、そうかと云つて不器量ふきりようでもいかんし、誠に僕も殆ほとんど閉口へいこういたす、処ところが先刻此の店へ腰を掛けて御息女ごめいむすめを見られた処ところが、殊ことの外御意ほかぎよいに入いつて何うかあれをと仰しやる、尤もつともお母つかさんぐる

みお引取申しても宜しい訳で、実は小兼ちよつとに一寸其の橋渡しを頼もうと思つてゐるうち、他に客でも出来たか逃げたので、甚だ失敬だが僕が打ぶつつけにと立戻つて来る途中で、前の始末で助けて上げたは、是も全く御縁だから、何卒どうかお母さん得心すみやして速かに承諾して下さい、僕が媒なこうど介する、お聞きゝ濟ずみなれば誠に満足で、何うか平ひらに御承知を願いたい」

六

母「はい、思おぼしめ召しの段は誠に有難うございますが、何どうも只今の身の上では、貴方方の様な立派な処へ参られもしませんし、そ

れに身丈みなりこそ大きいゆうございますが、誠に子供の様でござい
ますから、世間知らずで中々もう立派なお家の御新造うちごしんぞになるなどは出
来ませんので」

周「あれさ、そんな事を仰しやっても其れはいかん、貴方のお目
から左様そうでもあろうが、其処そこがさ、それ、御相談で段々習おうよ
りは慣れるで、下世話でも能よく云う事で習つて出来ない事はない、
何でも為すれば出来ますから」

母「有難うございますが、此の事ばかりは本人が得心しませんで
は親の一存にもゆきませんから、篤とくと考えて娘とも相談の上御挨拶
致しますから、四五日何うかお待ちなすつて」

周「四五日などと云つて、承われば置忘れた人の金入とかを届け

ようとて、途みちで災難あに遇あつて、それを向むこへ掛合あつて上げようと心配しんぱして居ゐるくらいな所ところ」

母「お前何かえ、彼あれを盗ぬまれたのかえ」

娘「はい、飛とんだ事を致いたしました、担かがれて行く時とき、帯おビの間に挿は込んで居ゐりましたのを、仲ちゆう間げん体ていの者ものが手てを入れて抜出はして持つて往ゆきました、何なにうしたら宜ようございましょう」

母「え、其そのれを奪とられては」

周「それも大夫が其そのの金かねを向むこう償まつて、さのみ大おした事ことでも有ありますまいから、それを此こ方ちで整然ちやんとして、いえさ誠まことに失敬しつげだが、それは大夫の方かたで何なにの様ようにも致いたされようから、そんな事は心配しんぱなしに、相談さうだんは早はやいが宜よろしい、何でも命いのちを助たすけた恩人おんじんが頼たのむ事ことだか

ら、貴方の方でも嫌いやとは仰しやれまい、殊ことに結構な事で、此の上も無く目出度めでたい事で、何うか早々そうく結納を取交とりかわして、いえも善は急げで早い方が宜よい、早いがよろしい、妙だ、先刻菓子を包もうと糊入を買おうと思つたら、中奉書ちゆうぼうしょを出したから買つといたが、こゝに五枚残つて居る、妙だ、硯すざりばこ箱がある、早速書きましよう、えゝ目錄は何なんで、帯代が三十両、宜しい、昆布こんぶ、白髪しらかみ、扇するめ、※、柳樽やなぎだる宜しい」

と無闇に書立て、粥河圖書の眼の前で名前を書いて彼方あちらへ此方こちらへと遣取りやりとをさせました。母親は恩人だから厭とも云われず、娘は唯もじくして居る。周玄は結納を取替とりかわし無理無体に約定を極きめて、

周「兎も角明朝僕が又上ります」

と独りで承知して帰りました。扱てお話は二つになりました、

川崎の本藤にては山三郎半治小かね馬作の四人が一つの座敷で、

馬「何うも今日ほど不思議で、何だか嬉しくつて成らねえ事こと了ね

えね、もし旦那忘れもしない六年跡あとのお祭で、兼ちやんが思い切

つてずうつと手古舞てこまいになつて出た姿が 大評判おおひょうばんで、半ちやんが

その時の姿を見て 岡惚おかぼれをして、とうとう斯こうなつたが、兄さん

が固くつてお家を不首尾うちかぶつて居るうち、兼ちやんが独りで見継みついで

居るなあって、本当に女の子に可愛がられて遊んで居るなどは世

の中に余り類が有りませんぜ、え、鰻、これは結構、有難く頂戴」

山「師匠相替らず延のべつ続けたのう、どうもサ師匠の顔を見ると自ひ

とりで
然に可笑しくなるよ」

馬「私わたくしも貴方のお顔を見るとせい／＼しますよ、何うか何時いつまでもお顔を見て居てえ」

山「時に先刻さつき休んだ茶店の娘むすめの、彼あれは好い娘こだのう」

兼「好い娘こだつて貴方あれは二百石も取つた岩瀬主水様と云う私わたくしのお母ふくろが勤めたお屋敷のお嬢様で、お運が悪いので、殿様のお屋敷に騒動が出来て、旦那様は：半元服したような名は何なんてえのですかねえ：そら意見する事は」

山「諫言かんげんか」

兼「腹切はなんてえの」

山「切腹か」

兼「そうく旦様が、その半元服をなすつたもんだから、到頭
あんなに零落おちふれてしまつたんですが、それでもお嬢様があゝ遣やつ
て彼様あんなに親孝行をなさるんですよ、だがあんな扮装なりをして入らし
つても透すきとお通とおるような好い御器量で」

山「己もまだ彼の位好い女を見たことがねえ」

馬「新井町の旦那が見た事が無いと云うが、本当に彼あのくらしいの
娘むすめは少ねえ、併しか彼の娘の方でも旦那に氣のあつた筈で、十両ば
かり少ねえよとぎっくり置いたというから、定めし氣がありまし
たろう」

山「師匠じゃアあるめえし金を見て氣のある奴が有るものか、おゝ
それで氣が付いた、此家ここへ祝儀を遣らなくつちやアいかん、おい

半治包んで」

と金入を出そうと思つて、ふと懷中を搜りますと無いから、

山「オヤ金入を落したか、こーと、あ先刻彼の娘の所へ心附けた時紙入から出したが、包んで遣つた儘忘れて来た」

馬「そりやアおいねえ事をしました、余程有りましたろう」

山「なに些と計りさ、二十両も有つたらう」

馬「そりやア大変だ、私が取つて来ましょう」

山「宜いわ、失る時にやア失るから大騒ぎやつて行かなくつても宜い、彼ア云う親孝行の娘だから有りやア取つて置いて呉れる」
馬「そりやア左様ですが、親孝行でも兼ちやんの前じやア云い悪いが人間の心は変り易いから」

山「お前とは違うよ」

馬「それでも知慧附ける奴が有りますからねえ」

山「宜いよ、まだ掛守かけまもりの中に金が有るから遣つて呉れ」

と総花そうばなでずらりと行き渡ります。

山「さア今夜は早寝にして、兼公は久し振だから半治の脇へ寝かして、師匠、お前と己は此方こつちへ寝よう」

と是から襖ふすまを閉たつて障子を締め、夜具とこを二つ宛ずつ並べて敷く。

山「おい其方そつちの床は離さねえでも宜い、師匠何をして居るのだ」

馬「へい、襖からかみを閉切たてきつていきれるから斯こう枕元に立たつて立番をし

ているので、これから縁側ちやんへ整然とお湯を持って行くんだ、何う

です今夜は一ひと役やく二分宛ぶずつと極めましょう」

山「そんな慾張を云わねえで早く来て寝て仕舞いねえ」

馬「何うせ今夜は眠ねられねえね」

とぴしやりと襖からかみを閉たて切ります。

七

此方こちらは三年振で逢つて、

兼「本当にまア、何うしてまア、好よく来てお呉れだねえ」

半「己も茫ほんやり然して銚子屋に預けられて居るが、もう半年も辛抱

すれば新井町の旦那が兄さんに話をして遣るから、少しの間辛抱

しろというから、それを楽たのしみに世間に見られねえ様にして居るの

よ」

兼「私の方からは、必ず手紙で何時いつ幾日いくかに何うすると、ちやんと極めて上げるのに、稀たまに手紙の返辞の一本ぐらいよこしても宜いいじゃア無いか」

半「銚子屋のは頑固かたいからそうく出歩く訳にもゆかず、そりやア己だつても心配はして居るけれども、左様そうはいかねえ」

兼「本当に男と云うものは情じょうのない者と思つて居るが、情のある人てえものは凡およそ無いもので」

半「そりやアお前めえの厄介やくわいになつて悉皆まるで小遣まで貰つて遊んで居るんだから、些ちつとは己だつて義理も人情も知つて居るから、己が世に出るようになればお前めえにも芸者は廢やめさしてえと思つて居る」

兼「私も年は取るし、彼あれこれ是これと考えると蠟燭しんの心しんのたつ様しまいで、終しまいにやア桂庵婆けいあんばあに追遣おいつかられるように成るだろうと大抵てえく心配きまさ、愚痴をいうようだがお前まえの身みが定さだまらないではと極きまりを付けようと思つても、船でなければ行かれないし、案じてばかり、本当にお前義理が悪いよ」

馬「旦那、こりやア寝られませんぜ」

山「大変な処ところへ来たなア」

馬「御尤ごもつともで、実に恐れ入った」

山「黙つて寝た振をして居ねえ」

馬「どうも寝られませんな、斯こういう事には時々出合いますが一番寿命の毒だ、まア旦那お寝やすみなさい」

と一ひとときわ際ひっそり蕭然とする。時に隣座敷は武士体のお客、降込められて遅くなつて藤屋へ着き、是から湯にでも入ろうとする処を、廊下では二人で窃そつと覗のぞいて居る。

男「貴方そう仰しやるが、これが間違になるといけませんぜ」

田舎者「宿屋の番頭さんは物の間違にならん様にするが当あたりまえ然えで、私わしが目で見^えて証拠が有るので、なに間違ええば私わしが脊負しよつて立つ」

番「そんなら屹度きつとよ宜うございますか」

田「えゝも好ええちゆうに」

番「御免下さい」

と宿屋の番頭は障子をさらりと開けて、

番「お草臥様くたびれさまで」

武士「大きに厄介で」

番「先程は沢山お茶代を有難うございます、主人あるじは宿内しゆくないに少し寄合がござりまして只今帰りましたので碌々お礼も申し上げませんで、えー少々旦那様うかどに伺うかいますが、此所こゝに入らつしやるお方はお相宿のお方ですが、お荷物が紛失ふんじつ致いたしまして、何ういう間違ちがか貴方の床の間に有ります其のお荷物が私わしのだと仰しやるので、判はつきり然しかとは分りませんが念の為に改めて見たいとこう被仰おつしやるので、誠に失礼ではございますがお荷物の処を」

田舎「へい御免なせえ、お前様だ」

武士「何だと」

田「お前まえさま様ア丹波屋まんまで飯いアたべて居ゐたが、雨あめたんと降ふらねえうち段々だんだん人が出て来たが、まだ沢山たくやま客きやくが無なえうち己うらと此この鹿かの八はちと斯こう斜はすけえに並ならんで飯いたべて居ゐると、お前まえ様ア斯こう並ならんで酒さけえ呑のんで、お前まえ様ア先まづい出でるとき緩ゆるりと食くべろとつて会あ積じして、お前まえ様ア忘わすれもしねえ、なんとお武ぶ士し様さまでも身み柄がらのある人ひとア違ちがつたもんだ、己うらのような百ひゃく姓せいに傍そばへ参まゐつて緩ゆるりてえ挨あ拶さつして行いくたアえらいねえと噂うわさアして、お前まえさま帰かえつて仕し舞まつた後あとで見みると置おいた包つみが無なえから後あとを追お掛かけてお前まえさまア尋たずねたが、混こ雑む中なかだから知しれましねえ、漸あく後あとを追おつて参まゐりまして、此こゝ家やへ来きるとお前まえ様さま足あい洗あつて上あるところだ、他ひ人ひとの荷に物ぶつを自じ分ぶんの荷に物ぶつのようように知しらぬ顔かほをして呆あれた人ひとだア」

武「怪けしからん奴だ、慌あわてゝ詰つらん事をいうな、これ、手前てまえの荷物を失つたと云うのか、これ、能よく似た物も有る物だから氣をつけて口をきけ、他ほかのことゝは違ちがうぞ」
 田「他ほかの事とは違ちがうと、とぼけたつていけねえ、あんでも丹波屋の横の座敷で斜はすになつて飯まんまア食つて居たとき、お前めえ緩ゆるくりとつて出て往つたから、叮てえ寧ねえなお武士さむれえだと思つて居いつげが、後あとに包みが無なえから後あとを追おつかけて境やまじゆう内たす索なねたが知れ無なえから、まア此家こゝへ来るとお前めえさま足あい垢よごれたたてゝ洗あつて上ある所、荷物に木札が附ついてるから見れば知れる、相そう州しゆう三浦郡みうらごおり高沢町たかさわまち井桁いげたや屋米藏よねぞうと慥たしかに四布風呂敷よのぶろしきに白きい切きで女房が縫ぬつて、高沢井桁たかさわいげ米たよと書いてあるが証拠なだ中なか結ゆわえもある、どうも御人ごにん体ていにも

似合わねえ、他人ひとの荷物を持つて其処そこへ置いて何だなん」

武「これ如何いかに其その方の荷物が紛ふんじつ失したとて濫みだりに他人たにんを賊と

いつては済まんぞ、苟いやしくも武士ぶしたる者が他人ひとの荷物を持つて己おのれの

物とし賊などを働はたらく様なる者と思おもうか、手前は拙者を賊に落すか、

他人ひとの荷物を盗んだといいうのか」

田「盗まねえものが此所こゝに有るものか、己おらが飯まんま喰まつて魂たまげ消ほて

めて居た傍そばに置いた荷物が無なえ、何より中の品物が証あかし拠ただ、麦藁

細工の香箱かばこが七つに御守ごまもりがある、そりやア村の多治郎たじろう、勘太郎かんとろう、

新藏しんぞう、文吉ぶんきち、藤治郎とうじろう、多藏たぞう、彌五右衛門やごえもんの七人ななにんに買かつて来

て呉くれてえ頼たのまれて、御守ごまもりが七つ御供物おくもつが七つある、それは宜ええ

が金が二十両脇わきから預あづかりかつて、小さい風呂敷ふろしきに包かんで金かねがある」

八

武「呆たわけた事をいうな、麦藁細工が七つ有ろうが、金が有ろうがそれが盗んだという証拠に成るものか、これ、番頭、これへ出る」
 番「私わたくしは分りませんが証拠のない詰らん事をいってお武家ぶけさま様に御立腹おさせ申して甚だ迷惑致します」

田「迷惑するたつて現げんぜえ在此こゝ処こゝに」

武「じゃア手前てまえ荷物をあらた検めさして遣やるまいものでもないが、若もし包つゝみほどを解いて中の荷物が相違致すと余儀なく手前の首を切らなければならん、武士の荷物を検め、賊ぞくみよう名を負わして間違つた恐れ入つたでは濟まんで、今までの失礼も勘弁し難い処だが、田舎者

で分らん奴だから此の儘行くなれば許して遣るが、強つて檢めるとなれば、若し荷物相違致せば首を切るぞ」

田「切られべえ、命より大事な他人に預つた物があるから、是えなく失なしちゃア私活きてる事が出来ねえ」

武「左様なれば檢めろ、相違致せば番頭も許さんぞ、さア檢めろ」

と広ひろさん棧の風呂敷木綿、真田なかゆいの中結ひきほどを引解いて広げると違つ

て居る。麦藁細工も入つてはあるが違つてある。玩具おもちゃが二つば

かりに本が二三冊、紙入なかいれの中入見たような物や何かゞ有るが皆

違つて居るから、

田「はアこれアはア飛んだ事を」

と百姓は真まっさお青あおになつて慄ふるえて居る。

武「さア何うだ、拙者を賊に落して申訳があるか、もう許さんぞ、併し此所は旅人宿で、当家には相客もあつて迷惑になろうから、此の近辺の田甫に参つて成敗致そう、淋しい処まで行け」

田「誠に、へい何時の間に大事な他人に預かつた金もある包を盗まれましたか、何うも風呂敷の縞柄といい木札が附いて似て居るもんまで、何卒御勘弁をはア願えます。

武「勘弁相成らん、それだから前に其の方のとは違ふと云うのだ、然るを強て強情を申し張り、殊に命より荷物が大切だ、切られても構わんというから撿めさせたのだ、さアもう許さんから行け武士に二言は無い、番頭手前も怪しからん奴だ」

番「だから、私も申すので」

武「これ米藏と一緒に参つたもの、逃にげ支度じたくをするな、これへ出ろ」

男「どうぞ御免なすつて」

と手を突いて詫わび入るを、武さむらい士は無理無体に引張ひっぱ出して廊下へ出る。田舎者は、

田「御免下さい、御免さないほーい、ほーい、ほーい、ほーい」

と泣く。茲こゝへ見兼ねて出ましたのが新井町の石井山三郎、

山「お武家様ぶけさままあ暫しばく」

武「なんだ」

山「私わたくしはお隣座敷に相宿に成りました者で、只今彼所あそこにて承われば重々貴方様の御尤もで、実に此の者共は怪けしからん奴で、先刻

より様々の不礼ぶれいを申し上げ何とも申し様もございませんが、何を申すも田舎者で、預り物が紛失ぶんじつ致して少々逆上とりのぼせて居る様にも見受けれますれば、お荷物に手を付けました段は重々恐れ入りませんが何うか何も心得ません者と思召おほしめし只管御勘弁を、此の儀当人に成り替りまして、私わたくしがお詫わびを致します、当家も迷惑致す事ですから何分とも御了簡を」

武「いや其の許もとは隣の座敷にお居でのか、そして此の者つれしゆの連衆うか」

山「いえ連つれではございません、手前は相州東浦賀で、高沢までは遠くも離れませんから其等それらの訳をもちまして願いますので、何うか幾重にも御勘弁を」

武「お前は分りそうな人だが、今も聞いたろうが、拙者は始め許して置いたので、根が百姓の分らん奴の云う事だから黙つて居たので、然るしかに段々附け上つて拙者が手荷物をあらた撿めさせて呉れと申すが、もし荷物を検めて違えば許さんぞと申した所が、其れは構わん、何でも二十両の金子きんすを拙者が盗んだに相違ないと疑われて見れば棄て置れおかんで、荷物を検めさしたから斯様かように成つたので、何卒どうぞ手を引いて下さい」

山「何うかそう仰しやらずに御勘弁を」

武「なりません」

山「これ程申しても御勘弁なりませんか」

武「罷まかり成らん」

山「これお百姓、高沢町の人、お聞きの通り種々いろくとお詫を申してもお聞入れがないから、お前ももう何うも詮方しかたがない手打に成りなさい」

田「それでも何うか御勘弁を願います、情ない訳で、何分にも」

武「相成らん、さア早く出ろ」

山「若しお聞きく済ずみがなければ止むを得ず申すが、此の荷物は貴方のお荷物ですか」

武「左様」

山「この荷物の中に蒨黄金欄の金入が有るが、これは貴方の所持の品でありますか」

武「左様、手前の所持で」

山「結構な品で、この金入は世にも稀まれなる切きれで、何いずれでお求めに
なりましたか」

武「これはなんで、芝しば口三丁目の紀国屋きのくにやと申すが何時も出入
あつちで眺ながめるのだが、其所そこへ眺ながえずに、本町ほんちようの、なにアノ照降てりふり
ちようの宮川みやがわで買おうと思つたら、彼店あすこは高いから止めて、浅あさく
さかやちよう草茅町まつやの松屋へ眺ながえて」

山「へゝえ、裏の切も大したもので」

武「なに好よくも無い、ほんの廉物やすもので」

山「へゝえ、これは太閤殿下が常に召された物を日光様が拝領に
なつて、神君しんくんが御帰依ごきえの摩利支尊天まりしそんてんの御影みえいをお仕立になる時、
此きれの切もつを以てお仕立になり、それを拝領した旗はたもと下もとが有つて、其

の切を私^{わたくし}方^{かた}で得て拵^{こしら}えた萌黄金欄の守袋で、此れを金入にしては濟まん訳だが、拙者親共より形見に貰った品物だが、何うして貴方これを所持なさる」

武「それは」

山「いやさ何を以て堤方村で失った金入を、何うして貴方が所持するかさア何ういう訳が承りたい」

と山三郎に問詰められて、むゝと武^{さむらい}士は押詰つて、急に顔色を変えます。これから掛合になりますお話、一寸^{ちよつと}一息つきまして申し上げます。

九

引続きまして、何処どこの国でも悪人という者はありますもので、
 今悪武士わるざむらいが形なりの拵こしらえなどは上品にして、誠まことに情なさけのありそうな、
 黒の羽織ろいろに蠟色ろういろの大小で、よもや此の人が悪事をするなどとは思
 いも寄らぬ体ていで、其の上最初の掛合かあひは極柔ごくよくかでございますから、
 田舎者たけは猛り立たつて荷物あたらを檢める様になりました。山三郎も始め
 はおとなしく掛合つみつたが聞ききません。元より隣座敷のぞで覗のぞいて居り
 ましたから包つみの中から出た物をよく視ると、親の形見に貰もらった蒔も
 黄金えぎきん欄らんの守袋まもり、それが出たから何どうしてこれが貴方あなたの手てに有る
 と云われ、よもやそれ程の金入かねいりとも存ぞんじませんから好い加減かげんに胡
 麻ま化かし掛かけたを問詰まめられ、流石さすがの悪人あくじんも顔がん色しよくが變かつて返答こたへ

に差詰りました。田舎者はこれを見ると喜びました。

田「誠に有難うございます、何てえ太え奴で、其の荷物が己が荷物でなくつても、此の人の金入其の中へ突込で置くからは己が泥棒と云つても過りは無え、それに己を斬るてえ嚇かしやアがつて何とも呆れ返つた野郎だ、さア出る処へ出て白え黒えを分けてやろう」

山「まア宜いわ：扱貴方は何ういう訳で私の金入を其の包の中へ入れて、是は他所で購求めたなどと、武士が人を欺き実以て怪しからん事だ、さア何ういう訳で貴方の物になすつたか、何処から買入れたか篤と調べなければ成りません、又此の事は此宿の名主か代官へでもお届をしなければ成りません」

武「誠に重々恐入った、実は池上へ参詣して帰り掛け、堤方村の往来中なかで拾ったので、見れば誠に結構な金入なり、其の遺失おとしぬし主へ知らせようと存じても、彼の通りあの混雑で何分分らん、遺失主の無い事故ゆえ只今其の返答に差詰ったので、実は拾ったので、何うか遺失主を調べて返したいと思つて居た処、お持主が其の許もとであれば速すみやかにお返し申すのみで、何も其の儘で壹錢かも中の金銭かねは遣い捨てません、それが慥たしかなる証拠で、何うか何分なにぶんにも此の事は御内分はからにお計いい下さるれば千せん万有難うございます、何分なにも内な済いさいに願ねがひます」

山「全く拾つたと仰しやるか、拾つたなら拾つたに為しましようが、それじゃア此の者が包を間違えても仮よしんば又お前さんの懐を捜し

ても、他人ひとの物は己おれの物と思つて他人たにんを欺くような人だから此の者を切るの突くのと仰しやる氣遣きづかいは有るまいが、猶念なおのため申す、愈々いよく此の者をお許しなさるか」

武「尤も左様で、其の許もとの仰しやる事に於おいては聊いさゝかも申もうし分ぶんはございませぬ」

田「それ御覽なせえ、何だつても此の野郎が申分ねえなんて先刻さつきの権幕けんまくはなんだ、今にも打斬ぶつきるべえとしやがつて、何うもはア私わしア勘弁たたくし度たぐつても連つれの鹿の八どんに濟まねえから、矢張やっぱり出る処へ出ますべえ」

山「それでも悪いから此処こゝは先まず此の儘にしなさい、此家こゝも旅人はた宿ごやで迷惑をするし、お前も向うの包と取違えたのは粗忽そごつで詮方しかたが

ないから、先ず此処は控えて居なさい、それを彼是荒立つて見ると事柄が面倒になるから、私も許すから、併しお前も預り物を紛失して嘸心配であろうが、幸い此の紙入に二十両遺つて有るから、お前にこれを進上するから、遺失さん積りで向へ持つて行きさえすれば事が済むから、此処は此の儘穩かにしないと、此の家も迷惑するから」

田「お前様にやア何うして、なに其の金ア此の野郎から貰えますわ」

山「まア私に何事も任して置きなせえ」

と山三郎は種々に和めて、此の場は漸く穩かに納まりましたが、彼の武士はこそつぱゆくなつたと見えまして、夜中にこそく

と立つて仕舞った。山三郎は惜気もなく二十両の金を井桁屋米藏に遣りましたが、人は助けて置きたいもので。山三郎、江戸屋半治は相州浦賀へ帰り、小兼馬作は芳町へ、彼の田舎者二人は共々連立って高沢町へ帰りました。

十

扱てお話は二岐に分れ、白金台町に間口は彼れ是れ二十間許りで、生垣に成つて居ります、門もちよつと屋根のある雅致な拵で、後の方へまわると格子造りで、此方は勝手口で、格子の方をガラ〜と開けて這入つて見ると、中見世の玩具屋にあり

そんな家作りやづくであります。此の日芸者小兼は早く起きて白金せの清

いしょうこうさままいり

正公様へお詣に行きました。一体芸者衆しゆは朝寝ですが、其の

日は心がけて早く起き、まだ下女が焚付けたきつて居て御飯ごぜんも出来ない

くらいの所へ、

兼「御免なさい〜」

下女「はい、入いらつしやいまし、何所どちらから」

兼「あの粥河様のお邸やしきは此方こちらさまで」

下女「はい、手前で、何方どちらから」

兼「芳町のかねが参つたと御新造様にそう仰しやつて、誠につまらん物でありますがお土産のしるしに是を何卒どうか上げて下さい」

下女「左様で」

と下女が案内して奥へ通し、八畳敷ばかりの茶の間で、片方かたぐに一間の床の間があつて脇の所が戸棚になつて、唐木の棚があります。長手の火鉢の向うに坐つて居るのが粥河の女房お蘭らん、年はとつて二十一、只今申す西洋元服で、丸髻に結つて金無垢の櫛かひっかんざしで黒縮緬の羽織を引掛けている様子は、自然と備わる愛敬、思みわず見惚とれるような好いい御新造で、

蘭「こちらへお這入り」

兼「誠にまア御無沙汰をいたしましたして、そして結構なお住居すまいでどうかして上りたいと思つて今こんにち日は一生懸命に早く起きて、白金の清正公様へお参りをして、序ついでと申しては済みませんがそれから上りました、本当に貴方が此方こちらに入らつしやることは今まで少し

も存じませんでして」

蘭「私も一寸ちよつと知らせたいと思つたけれども種々いろくそこ其所には訳があ

つて……よくまア訪ねて来てお呉れだ、何うかして私も訪ねたいと思つても勝手に出る事も出来ないで」

兼「まア元服なすつて、よくお似合で、そして本当によいお住居すまい

でまアお広くつて綺麗で、桜時分は嚙好やぎでようございましょう、そし

て高台で、のんびりとなさいましようねえ、私などの家うちは狭くつ

て隣も向むこうもくつついて居ります、其の替り便利には、お彼岸や何

かで珍らしい物が出来たり、おめでたい事で時々向う前で遣やつた

り貰つたりする時は坐つて居て手を出せば届きますが、斯こう云う

所に入らつしつては好ようございますねえ、これは貴方詰らん物で

すが些ちつとばかり取つて参りました、ほんに貴方お目に懸つたのは丁度三年後あとの池上様のお籠りこもの日で、彼の時あ私が彼所あすこを通り掛り麦藁細工の有つたのが目に付いて居ります、葎よしずつぱり簧張ばりでねえ、それも彼所にあゝ遣つて入らつしやる事も存じませんで：あの御新造がお亡なくなりで：それから此方こちらへ入らつしたので」

蘭「此方こちらへ来てから一年半許ばかりして旦那様ねんごろが懇ねんごろに御介抱して下さつて、葬式も立派に出て、何も云置く事もなく私の身の上も安心して母も亡なくなつたから誠に仕合しあわせだよ」

兼「あらまア些ちつとも存じません、其の後ご旦那様にお目に懸つても左様そとも何とも仰しやらずに、余あんまり憎らしいじやア有りませんか、そしてお寺は」

蘭「谷中のやなか瑞林寺で」

兼「知らない事としてお吊いにも出ませんで、嘸さぞまア御愁傷で、あなたが此方こちらへ入らっしつて御安心になつてお亡かくれで、本当にまア旦那様は毎度御鼻屣にして招よんで下すつても、貴方の事は今申す通り少しも仰しやらず、漸わく他きで聞いて参りましたが本当に余あんまりだと存じて居りました、もし彼あの時相州浦賀の石井山三郎様と仰しやるお方がお寄りになりましたらう」

蘭「あゝ」

十一

兼「彼あの方は浦賀で大した人で、きっぱりした気象キツブのよい男おとこ達てで、女などを誉ほめたことのない方ですが、あなたをまア親孝行のお嬢様だつて独りで誉めて居て、大概な者は氣に入りませんが、貴方なら貰もらいたいと云つて、江戸屋の半治さんという人を掛合にお遣やんなすつたら、もう此方こなたへ御縁組になつてお引越ひっこしになつたと聞き、仕方がないと云つてそれ限りになつて」

蘭「かねや本当に彼あの方は情なさけぶか深い方で、私も彼方あちらへ縁付かれるようなれば宜いいと思つて居たが、是には種々いろく義理があつて、彼の方が私に沢山心付を下すつて、其の時金入をお忘れで、それを私が持つて藤屋まで参る途中で災難あに遇つて、道で助けられた其のお方が私の旦那で、今では何不足なく何んでも彼かでも欲ほしいもの

は買つて遣るからと仰しやるから安心して居るわ」

兼「それはまあ結構で、本当にまあ旦那様はあなたを可愛がつて、
左様そうして御辛抱で、ちやんとお宅へお帰りでしょう」

蘭「それについて私も種々いろいろ心配して居る事があるので私の様な不
束者つかもので御意ぎよに入らぬか知れないけれども、去年の十一月からさ
つぱりお宅へお帰りが無いの」

兼「お宅へお帰りが無いと云つて何処どこへ入らつしやいました」

蘭「私には鎌倉道に竹ヶ崎と云う所があつて、山の半途なかごころで前が
入海いりうみで宜い所が有つたから、何うせ毎年まいねん湯治ゆぢに行く位なら、

景色も空気も宜よいから、其処そこへ普請をして遣ろうと云つて、其の
普請に掛つて入らつしやると云うけれども、去年の暮からさつぱ

り手紙も遣よこして下さらず、此方こちらから手紙を出し度たくも女ばかりで左様うもならず、何か外ほかに出来でもして私が嫌いやになつて万一見捨られ
た時は親類も身寄も何もないから行く所ゆもなく、兼や何うかお前
を力に思うよ、私はお前に逢あひたいと始終思つていたわ」

兼「呆れますよ、本当にまア貴方の様な美くしい結構な御新造様
がお一人いらつしやれば御辛抱なさりそうなものを、去年の十一
月からお歸りにならないでえのは何てえ事でございましょう……
其のお宅というのへ入らつしやいましたか」

蘭「まだ往つては悪い」

兼「入らつしやいました悪い事がありますものか」

蘭「だつて知れないものを」

兼「構わずに入らつしやいまし、屹度極りが付いて斯う云う者と斯うと云う訳じやありません、詰らん者を集めて浮れているのでしようから、出し抜けに往つて玩弄箱をひつくりかえしたような芸者を揚げている所へ、お娯みと云つて引ずり出してお遣なさい、貴方は人が好いからいけません」

蘭「大層遠いそうで」

兼「私はお祭の時往つて知つております、竹ヶ崎と云うのは法華寺のある所で、舟で行くと直です。入らつしやい」

蘭「そう、舟は恐かないかね」

兼「なに今時分は北風が吹くと船頭に聞いておりますから直に往かれます、そして追風で宜うございます、高輪から乗ると造

作はございませぬ、入らっしゃいましよ〜」

蘭「往ゆき度たいが道も知れないから」

兼「入らっしゃいよ私が御一緒にお付き申しますから」

蘭「かねが往つて呉れゝば」

兼「入らっしゃいまし」

と無理に勧めるのは、小兼は江戸屋半治に逢いたいからで、お蘭もそんなら往ゆこうと、下女へ話して急に着物を着替え小紋縮緬の変り裏に黒朱子くろじゆすに繻しゅ珍ちんの帯をしめて、丸鬘おくの後なでれ髪なでを撫なであげ、白金を出まして、高輪の湊みなとや屋と云う船宿から真帆まほを上げて参りますと、船は走りますから横須賀へ着きましたのは丁度只今の二時少々廻つた頃、それから多度村たどむらへ出てなだれを下りて往ゆ

くと鎌倉へ出る、此方こつちへ参れば倉くら富とみへ出る、鎌倉道の曲り角に井桁屋米藏と云う饅頭屋があつて蒸籠せいろうを積み上げて店へ邪魔になる程置き並べて、亭主は頻しきりに土竈へつついを焚たきつ付けて居る、女房はたすきがけ擲ち掛つで、粉だらけの手をして頻りに饅頭をこねて居る。

兼「一寸ちよつともし少々物をお聞き申します」

男「お掛けなさいまし、此方こつちへおかけなさい」

兼「あの竹ヶ崎へ参りますには」

男「竹ヶ崎は此方こつちイずいと往つて突当つて左へきれて、構わず南みなみにし

西へきれて這入ると宮がある、其の宮まいの前に新浄寺しんじようじと云う寺がある、其処そこを突切つつきつて往いくと信行寺しんぎようじと云うお寺様アある、それを横切つて往ゆくと地藏寺じぞうじの前へ出る、其処を右へ往ゆくと諏訪すわ

様の鎮守様がある、そこを突当つて登ると竹ヶ崎へ出ます」

兼「有難うございます、そうして其処に此の頃新規に立派な別荘の様な物が出来ましてすか」

男「其処の別当は諏訪様の御支配だ」

兼「いえ、なんです、新規にお屋敷見たいな家が出来ましたろうか」

男「お屋敷か、あゝ此の間兼吉が往つたつけのう、お直、それ

竹ヶ崎の南山でなア」

女房「此方へおかけなさい、おや小兼さんかえ」

兼「まあどうも不思議じゃアないか、お直さんかえ」

女房「お掛けよう、まあ懐かしかったよまあ、何時いつもお変りなく、まあ久振で丁度六年振で、何時でも同じ様だねえ、兼ちゃん此の通りで本当にお辞儀したくも手を突く事が出来ない、粉だらけで、何どうせ仕様が無いから何どんな者でも堅くさえあれば宜いいと思つて、こんないけ好かない男を持つて」

米「何だ、いけ好かねえなんて」

直「おや堪忍おしよ、本当に半ちゃんも疾とうつから銚子屋に居るつて、此の間来てお前に遇わして呉れつて頼むのだよ、私も江戸屋のお直とつて江戸あっちに居た時分から半ちゃんとは古い馴染だし、何

でも隠さずに話をするが、半ちゃんもお前にやア種々世話になつて済まないつて、そりやア真ほんに銚子屋に預けられて居ても女郎じようろう買かい一つしないで堅くして居るんだよ、真ほんに感心さ、それもお前に惚ほれてるのだから何うかして夫婦にしたいねえ」

兼あかし「私も御新造様を竹ヶ崎までお送り申して、帰りにやア是非半ちゃんに逢い度たいから私あかしの来た事を知らしてお呉れな」

直「あゝ、帰りにお寄りよ、屹度きつと半ちゃんを呼んで置くから、あらお茶代は入らないに、あゝそれじゃアお気の毒だねえ、そんなら此所こゝをこうずいと往つて構わず突当つて聞くと直じき知れるよ」

兼「あゝ有難う、分りました、左様ならば」

と小兼はお蘭を連れて路みちを聞きく竹ヶ崎の山へ来て見ると、

芝を積んで枳殻きこくを植え、大きな丸太を二本立て、表門があり、梅う

めばやし

林こちらが有りまして、此方こちらには葡萄棚もあり其の他いろく種々くだものな菓物

も作つてありまして、彼は一町許ばかり入ると、屋根は瓦かわらぶき葺ふきだが

至つて風流な家作りやづくがあります。ずいとい入ろうとは思つたが、ま

た彼是手間取れると半治に逢うのが遅くなるから、

兼「あの恐入りますが私はこれから下おりますよ」

蘭「もう少し往つておくれ、何だか私ア間が悪いよ」

兼「なにお間の悪い事がありますものか、これア貴方あなたのお家うちです

ものを、私わたくしはまた上りますから御免なさい」

と気がせくからはらくと外へかけて出ました。

蘭「あれまア兼が」

と暫く其方を見送つて居ましたが、何時まで立つても居られま
せんから、徐々と門の中へ入りました。だが矢張り極りが悪く
若し間違やアしないか、誰か居るかを見ると、長治という下男
が掃除をして居る。

長「おや、御新造様」

蘭「長治お前まで来たつ切りで」

長「これはどうも思い掛けない、何うして、へゝえ何ですか芳町
の小兼が、そうで」

蘭「お前までが嫌つて歸つて呉れないから、家ア女ばかりで心細
くつていけないから、漸く来たのだよ、すこしも便りをしないの
は余りで」

長「私も此方へお供をして参りましたが、何分御普請が此の通りで埒が明きませんし、建前が済んで造作になつてから長くつて、折角片付いてもまた御意に入りませんで、又打毀して新規に仕直すなどという仕儀で、誠に私もじれツたくつて、漸くまア此の位出来ましたが、又材木などが差支えて：まア彼方へお出で遊ばせ、此処が這入り口で」

蘭「ほんに旦那様は材のお選みが六かしくつてお囂しいからねえ」

長「併しまア十分に出来ました、広くはございませんが、此処がお座敷で、此処が貴方のお居間になる様にとつて別段綺麗に出来ました」

蘭「どうも床柱でも天井でも立派なこと、何うも広い庭だねえ、

彼の大きな松は」

長「あれは植えたのではない元からあるので、灯籠だけは此方へお持ちなすつたので」

蘭「どうも広いお泉水で」

長「あれは海です、あんな大きな泉水が有るもんですか」

蘭「そうかえ、ほんに好い景色で誠に心持がせい／＼するよ」

長「もう少し早く入らつしやると牡丹が盛りでございました」

蘭「旦那様は今日はお家にかえ」

長「あの何んで、何とか申した変な名でございました其所へ材木を買出しながら行かつて、歸りに何で周玄さんというお医者か御一緒に、事に依ると金沢へ廻るかも知れんと被仰いました、併

し今晚はお帰りになりましたようか、それとも明日みょうにちに成るかも知れ
ません」

蘭「女中は幾いくたり人居るえ」

長「一人も居りません」

蘭「この広い家うちに女中が居ないなんて虚言うそをおつきよ」

長「いえ居たのですがいけません、此処らの女は相模女さがみおんなで尻ば

かり撫でて、実にどうも行儀も作法も知りません旦那様の前でも

何でも構わず大きな足を踏ふんばた跨またげて歩いたり、旦那様がお詔あつらえな

すつてお拵え遊ばした桐の胴丸の火鉢へ、寒いつて胼あかぎれ胝だだらけ

な足を上げて、立たつて居かて踵かかとをあぶるので、旦那はすっかり怒つて

仕舞つて早そう々くお暇いとまになりました、実に女だけは江戸に限りません」

蘭「おほゝゝ、そうかえ怪けしからない」

長「今御膳を上げますから、嘸さぞお草臥くたびれでしよう、まあ緩ゆるりと」

といつて烟草盆や茶菓子などを運びますに皆長治一人でする様

子、お蘭は縁側へ出て見て居りましたが、用場ようばへ参ろうと思つて

縁側をずいといつて突当ると、三尺許ばかりの喜連格子きつれごうしがあるから、

用場かと思はず一つと開けると、用場では有りませんで、其処そこは

書物棚になつて居ります、本箱などが幾つも積重なつて居ります

から、疎相そそうな事をした、用場かと思つて大切な書物のある処を無

闇に明けて済まない、徐そつと閉めようとする、昔の屋敷女やしきもので

足袋を穿きいて居るのに、縁側が出来立できたちで新らしい足袋ですからツ

ルすべとすべつて書物棚へ思わず倒れ掛つて手を突くと、其の棚が

ギーと芝居でする田楽道具の様に　　るかびつく惱りして後あとへ下つて覗くと、下に階梯はしごの降り口がありますから、はて此こん様な処ところに階梯のある訳はないが、穴蔵の様になつて居るが何だか知らん、兎に角こんな所を開けて見ては濟まないもとと前の様に書棚を直して出て来ると、長治は膳部を持つて出る。彼のあ辺は三月頃は初鯉の刺身が出来まして、それに海苔の付合せを沢山にして、其ほかの他キスだの鎌倉海老などと魚が出るが、どうも近所に料理屋はない様子、何処から魚を取寄せるか、自分料理で斯う早く出来る訳もないし、何うした事かと女の廻りいろく気で種々と考えて居りまする、其うちあの中灯火かりがつきますと、長治が屏風を立廻し、山風で寒いからと小搔こがいま卷きに夜着よぎを持運び、其そこ処へ置いて台所へ下りました。

十三

お蘭は自分で床とこを展のべて寝ましたが、寝ても寝られませんか、旦那様は今日もお帰りはないか、何時迄待ってもお帰りがなくつては、淋しい処いに居るのも嫌いやだし、何しに來たとお叱りを受けはしないかと種々いろくと心配して居ると、六枚折の屏風を開いて這入つて來たのが粥河圖書で、ずーっと前へ立つたから、お蘭は恟びっくりして起ると、

圖「お蘭か」

蘭「おやお帰りでござりましたか」

圖「能く来たな、今帰った、能く出て来た、一寸便りをし度い
 と思つたが誠に普請も長く掛るし、それに今日は浦賀へ行くの、
 金沢へ行くのと誘われて、暇を欠くので、つい〜便りも致さな
 んだが、能く来たのう」

蘭「貴方が来いとも被仰らないに参つてはお叱りを受けようか
 と思ひまして参りかねて居りましたが、兼が何んでも行けと勧め
 ますから参りまして、能く遅くもお帰りで」

圖「左様か、今夜は淋しかろうが、これから余儀なく一寸行か
 なければならんが、明日は正午前に帰つて来ようから、まアゆつ
 くり寝るが宜い」

蘭「それじゃアお帰り遊ばして直ぐに是から又夜お出遊ばします

か、このお淋しい道さみを：誠に悪い事を致しました、折角お帰り遊ばしても私が参わたくしつて居りますから又直すぐに外ほかへ入らつしやるのは私がお邪魔になつて：それでお腹立なれば、明朝帰りますから御勘弁遊ばして、何卒御寝どうぞなつて」

圖「決して左様そう云う訳ではない、余儀ない義理で誘われて居るので、一寸ちよつと大津辺まで行いかなければならん、銚子屋と云う料理屋に集會して居るから、一寸顔を出して、是非夜よが更けるだろうが、事によると浦賀へ誘われると帰られないが明日あしたの朝は屹度帰るよ」と慌て、煙管筒を仕舞つて出て行ゆきました。お蘭が送り出そうと思つて居る中うち、ぱったり襖を閉切たてきつて、出たかと思つて考えるに表の門の開いた様子もないし、夫の外そとへ出たのも怪しく、夜深よふか

に私の顔を見て直ぐに出てお仕舞い遊ばしたのは、何か他に増ますは
 花なでも出来て居て、他の座敷へ隠してあるのではないか、左様そう
 して見ると先刻さつき見た書棚の廻り階梯はしごの降り口のあつたも怪しいが、
 はてな」

と愠気と云う訳ではなけれど、自分が身寄頼りもなく、圖書に
 捨てられては行ゆきどころ 処ところのない心細い処から、手灯てとほしを点つけて窺そつ
 と拔足して縁側へ出て、昼うちの中見て置いた三尺の開きを明けて、
 書棚の両方に手をかけて押すと、ギーと廻る。下に階梯はしごの降おり口くち
 があるのを見ると、灯火あかりが障子へさして座敷がありそうに思いま
 したから、手灯てともしを吹消して階梯段を降りて参りまして、降り切
 と一間ばかりの廊下のようなものが透うつて付いてあります。彼のあ

辺は皆垣が石のような処で、其処そこを切穿きりほりまして穴蔵やう様な物が山の半腹はんぷくにありまして、宛まるで倉庫くらの様になつて居りますから、縁側を伝わつて段々手索てさぐりで行くと、六畳ばかりの座敷がありました。て、一間の床の間がありましたして巻物や手箱などが乗つてあります。杉戸が二重になつて居て両隅の障子へ灯火あかりがさしまして人声ひとこえがする様ですが、唯今なれば硝子障子で能く分りますが、其の頃は唯の障子でございますから尠すこしも分りません。傍かたわらにある机を持つて来て、其の上に乗つて、欄間の障子の穴から覗こうと思つたが、障子に破れた穴もないので覗けないから、挿さして居た銀脚ぎんあしの簪か挿んざしで、障子の建たて合せあわを音もせずそに窃つと簪挿をさしてねじると、障子が細く明きましたから、お蘭が内を差覗くと驚きました。

十四

穴の中に斯様な座敷をこしらえ、広間は彼是二十二三畳もあ
 ろうと思われ、棚には植木鉢その外種々結構な物が並べてあり、
 置物は青磁の香炉古代蒔絵の本台などが置並べて前に緞子の褥を
 置いて傍かたわらの刀かけに大小を置き、綿入羽織を着て、前の盃盤はいばんに
 は結構なる肴があつて、傍かたわらに居るのが千島禮三とて金森家の御小
 納戸なんどやく役を勤めた人物、這入口に居るのが眞葛周玄、黄八丈に黒
 縮緬の羽織を着て頻りに支配きりもりをして居り、それからずつと次に
 居並んで居ります者が彼是百五六十人許りばか、商人体ていの者も居れば、

あるいたびそうてい
 或は旅僧体の者や武士体の者、種々なる男がずっと居並んで居
 て、面部に斫疵きずなどのある怖こわらしい男が居る。其の次の間に、年
 齡十六七の娘が縛られ、猿さる轡ぐつわをかけられて声も出す事が出来
 ませんで、唯涙をはらく零こぼして、島田鬚を振りみだし、殊あわに憫
 れな姿であります。傍かたわらに居る千島禮三が、つか／＼粥河圖書の傍そば
 へ来て、

禮「大夫たいふ、何処へ行つてもどうも別にこれぞと云う大な仕事まぶもな
 く、東海道金谷かなやの寺で大妙寺だいまうじと申すは法華宗の大寺で、これへ
 這入つて金八百兩取つたが、彼あの寺にしては存外有りましたが、
 それから西浦賀の上成寺じょうせいじは平生へいせい有りそうに思つて其の夜忍び
 込み、此の寺で二百兩で、金は随分あるにもせよ肴がなくてはお

淋しかろうと存じて、これは西浦賀の江戸屋と云う家へ縁付く話
 が定きまつたと云う、名主吉崎惣右衛門よしざきそうえもんの娘おみわと云う評判もの、
 大夫の寝酒のお肴に連れて来たが、お蘭さんがお出いでになつたと申
 すことだが、お蘭さんがお出いでになれば何どんな者をお目にかけても
 迎むかへも往いかんから、この美人は禮三が□□□□るからお譲りを願
 います」

圖「それは勝手に致せ」

周「こうく千島氏貴公は誠にうまいことを考えるが、東浦賀の
 吉崎の娘は君が知つて居たのではなからう、此の眞葛周玄が知つ
 て居て、道程みちのりからして、斯々こうくいう所を通つて往ゆくと大寺があ
 つて、此処に斯ういう豪農がある、陣屋は斯ういう山を越さなけ

ればならんという事まで貴公に道を教えたからこそ、首尾よ能く連れて来られたのだというものだ、それを君が□□□□るてえ訳にはいかん、大夫是はどうか周玄へ此の娘を頂戴したい、自分年を取りまして斯様な若い美人を□□□□た事がないから、どうか」
 圖「何うでも勝手に致せ」

禮「これ〜何だ、汝われは旅稼はやぎの按摩で、枕探しで旅を稼いで居たのが、処を離れて頭髪つむりを生して黒の羽織はやを着て、藪医者然たる扮装なりして素人を嚇おどかし、大寺などへ入いりこ込んで勝手は少し心得て居るだろうが、八州にでも取構とりこまれ、さアと云う時は此の千島禮三と大夫が居らん時はぶる〜して先へ逃げ出す役に立たず、畢竟己が骨を折ったから己が抱いて寝るのだ」

周「それはいかんよ足下そつかなどは悪事に掛けてはまだ青いからね」

禮「黙れ、青いとは何なんだ、青かろうが若かろうが多寡わが汝われは旅かせぎの按摩上り、己は千島禮三と云う小納戸役を勤め、大夫とも同席する身分だ控え居れ」

周「これさ、仮令たとえ然るべき武士で何役を勤めたにもせよ、斯うやつて悪事を共にすれば、縛なわに就いて処刑しおきになる時は同じ事だ、今日きよう日に及んで無用の格式論、小納戸役がどう致した、馬鹿つらな面を」

禮「なに何がどうしたと」

長「待ちねえ〜騒々しいじゃねえか、今日はお蘭さんがお出いでなすつたを独りで寝かして、斯うやつて大夫が各々おの／＼と一所にうまい酒を呑もうと云うのに何の事だ、周玄さんお前なんざア是迄さ

んざ新造を瞞着して来たのだから、いゝや、斯う為よう、周玄さんが□□□□でも、禮三さんが□□□□でも議論の種だから中を採つて此の長治が今夜□□□□よう」

圖「何だ、千島は鯉口を切つて周玄を斬る積りか、よいゝ此の婦人は己が貰つた」

と傍かたわらにある刀の小柄を抜く手も見せず打つた手裏劍は、彼の女の乳の上へプツリと立ちましたから、女はひーと身を震わして倒れる。この有様を見ると、お蘭は「あゝなさけない」と机を下りにかゝると、踏み外すとたんに脾腹ひばらを打ちまして、お蘭は氣絶致しましたが、是から何うなりますか、次の条くだりに申し上げます。

十五

引続きまして、粥河圖書の女房お蘭の身の上は、予て申し上げます通り西洋の話でございまして、アレキサンドルという俠客おとこだがコウランという貞節なる婦人を助けるといふ、アレキサンドルに擬せました人が相州東浦賀新井町の石井山三郎という廻船問屋で、名主役を勤めました人で、此の人は旗はたもと下の落胤らくいんということを浦賀で聞きましたが、其の頃は浦賀に御番所がございまして、浦賀奉行を立ておかれまして。一体浦賀は漁獵場所じようろやで御承知の通り海浜の土地でありますが、町屋も多く、女郎屋じようろやなどもございまして誠に盛んな所で、それにつれては種々公事訴訟等も

ありまして、御奉行様も中々お骨の折れる事でございます。又御奉行に仰付けられます時は、お上から寒かろうと黒縮緬あおいに葵あおいの御紋付の羽織を拝領いたしますもので、此のお話のずっと前まえ方かた、
いつしきくない
 一色宮内と申す二千五百石のお旗下が奉行を仰付けられて参つて居るうち、石井の家の娘すみという者が小間使の奉公に往つておりました。するとこれにお手が付きまして、すみが懐妊致しました。海とか山とか話の解る迄すみを下げまして、十分に手当を致し其の後のちとうとう縁えんきり切との事になりましたが、
あた 当る十月にすみの産落しましたのが山三郎、それから致して此のおすみには、これも同じく浦賀の大ケ谷おおがやまち町で廻船問屋で名主役を勤めていた吉崎宗右衛門の弟惣そうのすけ之助が養子に来て、おすみの腹に次に出

来ましたのが女の子で、これをお藤と申しました。山三郎は十一
二の頃物心を知ってから己は二千五百石の一色宮内の胤たね、世が世
なれば鎗一筋の立派な武士、運悪くして町家ちようかに生立おいたつたが生涯
町家の家は継がん、此の家は父て、おや親の違う妹のお藤に譲つて、己
は後見になつて、弱きを助け強きを挫くじき、不当者のある時は仲へ
入つて弱い者を助けて遣り度たいと志を立てまして、幼い時から
剣術を習いました。お武家の胤だけに素性が宜しく忽ちに免許
を取りました。剣術は真影流の名人、力は十八人力あつたと申し
ます。嘘まことか真実かは解りませんが、此の事は私わたくしが彼あの土地へ参つ
たとき承りました。明和四年に山三郎は年三十歳でございまして、
品格の宜よい立派な男で、旦那様とと人が重んじまするのは、憫か

わいそう

然わいそうなものがあると惜気もなく金でも米でも恵みまするので、それにその頃は浦賀に陣屋がありました、組屋敷の役人が威張りまして町人百姓などを捉とらえて只今申す圧制とか何とか云うので、少し気に入らんことがあると無闇よこつらに横面を張飛ばしたり、動やもすれば柄に手を掛けてビンタ打切うちきるなどというがある、其の時山三郎は仲へ入つて武さむらい士なだを和め、それでも聞かんと直じき々々奉行に面談致すなどというので、上の者も恐れて山三郎には自然頭を下げる様になり、又弱い者は山三郎を見まして旦那様ななさまくと遠くから腰かぎを屈かめて尊敬いたします。殊はなしに落語家かなどを極く可愛がりました人だそうで、丁度四月十一日のこと、山三郎は釣つりが好きでございいますから徳田屋という船宿ふねしゆくへ一艘いっぱい言付けて置いて、遊んで居

るなら一所に行けと幫間の馬作を連れて鴨居沖へ釣に出ました。一体此辺らは四月時分には随分大きな魚もかゝります。

山「毎もお前は船は嫌えだというが、どうだい釣は、怖え事はあ
るめえ」

馬「恐れ入りましたな、私はね一体船は嫌いですがね、こうどうも畳を敷いたような平らな海に出たの、ア初めて、旦那私やア急に船が好きになりましたぜ、何うして馬作の家から見ると余程平らで、私の家なんざアね此方を踏むと彼方が上り、彼方を踏むと此方が上りね、どうして海の方が余程平らさ、あゝ宜い心持ちだ、どうも好い景色だ、もし向うに見える大山見たよなニユーツと此方へ出て居るのは何ですな」

山「あれは上総かずさの天神山で」

馬「へ、え彼れが、近く見えますねえ、旦那に此の間伺いました
が彼れがたしか鋸のこぎり山やまですね、成程鋸見たようで」

山「師匠どうだ釣は」

馬「私わたしは釣はどうもいけません」

山「なぜ」

馬「釣はどうも、凡そ私およわたしの釣れた例ためしが無いというんだからいけません、私わたし達たちのアただほんく放り込んで浮うきの動くのを見て居るだけですから面白くも何とも有りません、折節ね旦那のお供でね沖釣などに出来でける事もありますかね、馬作は竿も餌むこうまも魚いし任かせにして只御酒ごしゆを頂くばかりいえも何うせいけません」

山「そんな事をいわずに釣つて見な、此辺こくらの魚はまた違うから」

馬「それに蚯蚓みづずなどをいじるのが何うも厭で」

山「なに海の釣は餌が違うよ、蝦えびで鯛を釣るといふ事があるが其の通り海の餌は生た魚いきよ、此の小鰻こあじを切つて餌にするのだ」

馬「へゝえ鰻の餌で、それで何が釣れますか」

山「鰻で鰻が釣れるよ」

馬「へゝえ魚は不人情なもんで、共食ともぐいですな、へえ、鰻で鰻が

釣れますか」

山「何でもさ、目張めばるでも鯖さばでも、鯖などは造作もなく釣れるよ」

馬「へえ鯖なぞが釣れますか、私わたくしなんざア鯖ア読んだ事は毎度ありますけれど」

山「まあそんな事は宜いいにして其の糸へ此の餌を刺して放り込んで見ねえ」

十六

馬「へゝえ此の糸を斯うやるのですか、是はどうも余程よっほど深いな、何うも何処まで深いか知れませんが、且那貴方ア両方の手に糸を持つて、やはゝゝゝ両方に大きな魚を、それは何で」

山「是こりやア鯖さばさ」

長「恐入りましたな、私わたくしア只糸を斯うやって居れば宜いいので、何うも私わたくしのア魚いしの方で馬鹿にして居りますからねえ些ちつとも来ません、

旦那の方にやア矢張り魚も面白いと見えて貴方の方へばかり行き
 ますぜ、何でも馬作の方へは魚が　　状を廻し彼奴の所へは往く
 ななぞつて　　話　　合をつけて来ないとみえます……やは、
 釣れたく、旦那釣れましたぜ、これは不思議釣れましたからどう
 も妙で、是は大事にして置きたい、生れて始めて釣つたというの
 で跡で料理て、有難い、どうも面白い、どうも海は広いから魚
 の数があつて馬鹿な魚もあつて馬作の針に引掛るやつが有るから
 妙だな、どうも数が多いからおと、と、それは何で」

山「これは目張だ」

馬「有難い、めばる、どうも旨い魚で、何だつて旦那有難い、も
 し旦那私ア急に釣が好きになりました、や、は、又釣れた」

、旦那又釣れましたぜ」

山「これさ師匠のように騒いじやアいけねえ、これさ、びしやノ
はね澆るから活いけふね船へ早く放り込んで置きねえ」

馬「有難い、こりやア旦那何うぞ大事にして、あはゝゝゝ旦那ま
 ア両方の手に釣りあげて、あれまた獲とれました、これは不思議、
わけなし容易に釣れるので、あゝゝゝゝ」

山「どうした」

馬「魚が其処まで来て彼方あっちへ又ずうつと行きました」

山「釣り落したか」

馬「へえ釣り落しました、あゝ又来た、あれ来きは来たが私わたくしの顔を
 見て左様ならつて」

山「なに、左様ならと云うものか」

と山三郎も馬作も面白いから日の暮るくれのも知らずに釣つて居りますと、今朝から余り晴過ぎあんなて日並ひなみの好よすぎたせいひなみか、ぴらりつと南の方に小さな雲が出ました。すると見る間に忽ち広がつてぽつーりぽつりと雨が顔に当つて来ました。

山「あゝ悪いな、師匠早く釣を揚げて仕舞いねえ」

馬「旦那何だつて其様そんなに急ぐんで」

山「急ぐつて急がねえつて、あゝ悪い時に連れて来たな、余り日並よが好よすぎたから怪しいとは思つたが、何うも天気を見損みそくなつた、仕方がねえ、気を大丈夫に持つて呉れ、師匠颯風はやてだよ」

馬「はやて、えーそれは大変、旦那どうか早く上げてお呉んなさ

い」

山「馬鹿アいいねえ、此所は海の真中だ、何うして上る事が出来るものか」

馬「でもお願いだから上げて下さい、私は困りますから、それだから私は釣は嫌いだと云うのに貴方が大丈夫だくと仰しやるから来たので」

山「憫然に、己も颶風と知って居れば来やアしない、騒いではいかんよ、二里も沖へ出て居るから足搔てもいかんよ、騒いでも仕方がない、まア氣を確り船に攫まつて居な」

と山三郎は直に裾を端折つて、腕まくりをして、力があるから浦賀の方へ行こうとすると、雲足の早いこと、見る間に空一杯に

広がりましたして忽ち波足が高くなつて来ると思うと、ぎア〜〜ど
 うと雨は車軸を流すように降り出し、風は烈しく吹掛^{ふっか}けてどうノ
 〜〜と浪を打ち揚げます。山三郎の乗つて居るのは小鯨^{こあじおく}送り
 と云う小さな船だから耐^{たま}りません、船は打揚げ打^{うちおろ}下されまして、
 揚る時には二三間宛^{すつ}も空中へ飛揚るようで、又下^{おり}る時には今にも
 奈落の底へ墜^{おちい}入りますかと思ふ程の有様で、実に山三郎も逆^{とて}もも
 ういかんと心得^{こころえ}ましたから、只船^{ふなべり}舷^{つかま}に搦^{つか}つて、船の沈んではな
 らんと垢^{あか}を搔^{かいた}出すのみで、実に最^もう身体も疲れ果て、仕舞いまし
 たが、馬作が転がり出すといかんから、笹^{とまくら}枕^{まくら}の所へ帯を取つて
 くる〜と縛り附けて自分も共に笹枕^{とまくら}の柱に搦^{つか}つて、唯船の流れ
 着くのを待ちますばかり。馬作は尾籠^{びろう}なお話だがげろ〜吐きま

して、腹は終しまいには何もないので、物も出ませんで、皺しやがれ枯つつ声
になりましたして南無金比羅大権現、南無水天宮、南無不動様と三つ
を掛合どつにして三つの内何どつちか一つは験きくだろうと思つて無闇に神
を禱いのつて居ります。山三郎も身体は疲れてもうどうも致す事は出
来ませんで、只船がずしーんがらくどしーんと打揚げられ打落
されて居るが、実に危あやういことでありまして、其うちの中に幾百里吹流
されましたか、山三郎にもとんと分りません、稍やや暫やくたつて一つ
の大浪にどどどとどんと打揚げられまして、じゅじゅと波
の中へ船の舳先へさきを突込みまして動かなくなりました。山三郎はは
て船が流れ着いたなど、漸やっと起上つてよくよく見ますと、松の根
方の草のはえて居る砂原へ船は打上げられました。

十七

山「師匠、おい馬作、すっかりしねえよ、氣を確たしかに持ちなよ」

馬「へえ、あゝ旦那貴方助かつて居ますか」

山「うん、船は着いたが最もういゝと思うと落胆がっかりして死ぬものだ

から、何処の島へ着いても氣をしつかり持つていねえよ」

馬「へえ、確しつかり持ちたくも此の塩梅あんばいでは持てそうもございま

せん、旦那忘れても釣はお止よしなさいよ、生涯まごこ孫子の代まで釣ば

かりはさせるものじゃアありません、驚きましたねえ、あゝく、

此処は何処でしょう」

山「何処だかどうも分らん、何れ何処かの島へ着いたのだろう」
馬「家も何もなければ昔から話に聞いた無人島とか云つて人間が居なくつて、恐ろしいそれ虎だの獅子や何かが出て来て人間を頭からもりく喰つて仕舞うてえのじゃ有りませんか」

山「そんな話も聞いたが、そうかも知れねえ」

馬「これはどうも情ない、日本へ帰れそうもない、だから私わたくしやア

釣は嫌いだというに、無理に來いくと仰しやつて、何うかして日本へ帰れるようにして下さい」

山「今更そんな愚痴をいっても仕方がねえ、一体まア此の土地が何処の国だか分らんから、だがたと流されやアしめえと思うが、上総房州の内なれば宜いいが事によつたら伊豆の島あた辺りかも知れね

え、まだくそれなれば旨うめえが」

馬「旨くも何ともありません、流されたのも長い間で、実に私わたくしはどうも何とも彼かともいい様のない、生しょうたい体たいも何もございませぬ、残らず食つたものは吐いたから最もう腹の中は空からっぽうでひよろ抜けがして」

山「まア此処あがへ上んなよ」

馬「上あれませぬ、動うけません」

山「違ちがえねえ、縛くつてあるから」

と山三郎は馬作を縛り附けた帯を解きまして、

山「さア立ちねえ」

馬「足あしもなにも利きませぬ」

山「確しつかりしねえ、最もう波も風もありやアしねえ」

と山三郎はひらりつと陸地おかへ揚あがつたが、此の土地は何国どこかは知らず若もし人家もなくば、少し浪が静しずかになつたから帰ろうという時に船がなければならんから、命の綱は此の船だ、大切だいじと心付いたから、疲れて居るが十八人力もある山三郎、力に任して船みよしの舳みよしを取りまして、ずる／＼と砂原の処へ引揚げて、松の根形ねがたへすつぱりと繫綱もやいを取りまして、

山「さア是じやア宜いい、師匠最もう宜いい」

馬「何時まで船に居ても仕様がございませんねえ」

山「なに師匠もう陸地おかへ揚あがつていらアな」

馬「だが、どうだか私わたくしやア矢張船やっぱりに居るような心持で、ふらく

して、此処がもし外国だと、貴方と兩人ふたりで私わたくし共どもは日本人で助

けてと云つても向むこうにやア知れますまいねえ、こんな事と知つたら

通弁の一人も雇つて来れば好よかつたつけが、貴方お金があります

か」

山「金は釣に来たのだから沢山たんとは持つて来ない」

馬「それでも幾いくら干ばかりあります」

山「掛かけまもり守の中に十両ぐらいあるよ」

馬「えらいねえ何うも、私わたくしは西浦賀の大崎の旦那に貰つた御祝儀

を、後生大事に紙入へ入れて置きました、船から皆みんなな転がり出

てほんに仕様がねえ、併しかし何どんな国でも王様がございませうね

え」

山「そりやア有るだらうさ」

馬「有難い、王様がありやア其の王様に頼んで日本へ帰れる様に
して貰えましようねえ、それに食物くいものも何も喰いませんから腹の
減つた事を打明けて頼んでねえ、どうも斯う腹が減つては狼が来
ても逃げる事が出来ませんから、先まず其の前に握飯むすびでも何でも喰
いたいあゝ喰いたい」

山「これさ、まア待ちなよ、まア何しろ人家のある所へ出よう」

と山三郎は無理に馬作の手を引いてだんく行くと、山手へ出
ましたが、道もなく、松しょうはく 柏おいしげ 生おいかぶ 繁り、掩冠おいかぶ さつたる熊笹を
踏ふみわ 分けて参りますと、元より素足の儘ですから熊笹の根に足を引
掛けて爪を引っぱがし、向むこうずね 脛すね をもりく、摺すりこわ 破し血だらけに

なりながら七八町も登りますと、闇くらくつて分りませんが山の上は平らで、樹きに掴つかまって能よく見ると、こんもりとした森があるから、森を見当みあてに彼是れ二十町許ばかりも行き、又斜崖なだれを下くだると、森の林の内うちにちら／＼灯火あかりが見える。

山「師匠家うちがあると見えて灯火あかりが見えるよ」

馬「家うちでせえありやア化物屋敷でもなんでも宜いい、有難いい、何か喰たべられましようか、腹が減へつて居いるから何でも好いい早く喰たいたい」

と云いながら参ると、こう小さな流れがありました、丸木橋が掛かつている、これを漸おくくに渡ると卵塔場らんとうばがあつて、もと此処こゝには家うちでもありませんか只石礎いしずえばかり残のこつてあるが、其その後うしろは森

で、卵塔場について参ると喜連格子の庵室様のものがありました、今の灯火あかりは此の庵室の内からさすのでありました。

十八

山「師匠これは古寺だぜ」

馬「いやはやどうも心細うございますな、折角尋ねて来れば古寺とは情ない、何だか私わたくしは死んだような気になりました」

山「待ちなよ、此処に土台石のある処を見れば、元なんでも家うちがあつて、毀こわされて引いたのだろう：御庵主ごあんしゅさま様御庵主々々」

馬「何が御安心です、少しも安心しないじゃア有りませんか」

山「庵主を訪うのだよ…、手前どもは相州東浦賀の者でござい
 すが、今日こんにち日漂流致しまして、漸々よう／＼此所迄こゝまで参つたので、決して
 胡散うさんな者ではないから一泊願ねがいとうございしますが、えーもしお留
 守でございますか、おい／＼師匠少しも答こたえがねえから誰も居ねえ
 のだろう」

馬「心細うございますねえ、誰もいない処へ来て、上あがるとにゆー
 と何か出でもすると驚きますねえ」

山「御免」

と云いながら喜連きつれ格子ごうしへ手をかけて左右へ明けて見ると、正面
 に本尊が飾つてある。銅あか灯ね籠どうろうがあつて、雪洞ほんぼり様の物に灯あ
 火かりが点ついてあるけれども、誠に暗くつて分らん。

山「師匠まア板畳の処まで上んなよ」

馬「へえ上りましよう、船でぎぶく／＼やられるよりやアお寺でも家根があつて、まゝまア宜いい心持の様だ」

と持しづつ仏に向いまして、

馬「暗くつて分りませんが、如来様か観音様かどなた様かは存じませんが、手前は日にっぽん本の大坂町おおさかちょうの者で烏亭馬作うていと申す者で、釣に出まして此の国へ流された者で、御利益ごりやくを持ちまして日にっぽん本へお歸しを願います：おや旦那あすこ彼処たかつきに高坏たかつきのような物の上に今坂だか何だか乗つて居ります、なんでも宜しいお供物くもつを頂かして」

山「よしなよ、おもりものだよ」

馬「おもり物でもなんでも少しの間願います、返せば宜うござい

ましよう、今お供物を頂きます、其の替り日本へ帰れば一つを拾とおにしてお返し申しますから、頂戴」

山「よしなよ」

馬「おもり物をとつては済みませんが、日本にほんだか西洋くいのものだか食物の味で支那か印度かゞ分るような訳で」

とむしやく喰いまして、「腹が減ると甘い物うまで、旦那これは日本にっぽんに違ちがいない、日本にっぽんらしい味がする」

山「よしなよ、取る物じゃアない」

と馬作を諭さとして居りますと、其の内に足音がしますから、山三郎は格子の透すきから見ると、先へ麻あさごころも衣いを着た坊主が一人に、紺看板に真鍮卷の木刀を差した仲間ちゆうげんてい体の男が、四尺四方もある

大きな早桶はやおけを荷かついで、跡から龕灯がんどうを照しました武士さむらいが一人
 付きまして、頭巾面深まぶかにして眼ばかり出して、様子は分りません
 がごたくく這入つて来ました。山三郎は飛んだ事をしたと思つて、
 山「師匠此処へ下りな、いけねえことをしたな、何所どこかの葬式とむらい
 があつておもり物を整然ちゃんと備えてあつたに、お前めえが喰つて仕舞つ
 て咎められては申訳が無ねえ」
 馬「葬式とむらいが来たら旦那強飯こわめしか饅頭まんじゅうだろう、何ぞなんお手伝てんをしま
 しょうか」

山「意地の穢きたない事を云いなさんな、彼方あつちへ行つていよう」

と二人は片隅の所へ隠れていると、どかく上つて来て武士さむらい
 は被つた頭巾を取り龕灯提灯かざを翳して、

武士「大きに御苦労〜」

何か和尚と囁きながら烟草たばこを出してぱくり〜と呑んでいます

のを、山三郎が片蔭に隠れていて目を付けると、何所で見つけた様

な武士さむらいだと思ひ出すと、三年前あとの十月十二日の夜川崎の本藤の

二階で、此の武士さむらいが百姓を嚇おどして：殊おのれに己の金入を盗んだ武

士いで：彼の儘あ助けて返したが、彼奴あいつは此処等にうろ〜してい

るか、何処の者か知れんが甚だ妙だ、篤とくと様子を見ようと、尚お

姿を隠しておりますと、又仲間共とこそ〜囁きまして、ぽんと

畳を二畳揚げて、根太板ねだいたを剥はがして仲間体の者が飛下りて、石蓋

を払かつて其の中へ彼のか大いなる棺桶をずっと入れて、元の様に石

蓋まだらを斑まだらに置いて、根太を並べて畳を敷いて、さアこれで宜いいと坊

主もお経を上げずに、四人もずうつと出かけました。

十九

山三郎は暫く考えていましたが、

山「師匠」

馬「へい、なんですか」

山「お前が喋るかと思つて心配したが、宜い塩梅だった」

馬「だが、旦那坊主も付いていたが経も上げず、ひどい貧乏な葬と
むらい式で、何んな裏うらだな店でも小さい袋に煎餅ぐらいはあるに、何か
たべもの食物があるうと思つたにひどい事で」

山「怪しいな」

馬「へエなんです」

山「訝いぶかしいな」

馬「二分貸かして呉れ」

山「何でも此こいつ奴はあやしい、これから葬とむらひ式のあとを見えがくれに追ゆつて行くから、お前喋はなつちやアいかんよ、喋ると向うへ知れるから黙もつていな」

馬「へい、だが旦那黙もつて歩くぐらい草くたびれ臥ふるものは有りません」

と段々遠見とんけんに追ゆつて参まゐりますと、五六町も行くゆと山道やまみちで、これから七八町のなだれで、海かい辺へんへ接かしまして、風も大きになぎました様子ようす、併しかし海岸かいがんだからどうくざばくと浪なみを打うつ音ね絶たえず、

片方かたうは山手になつて右と左に切れる道があつて、こゝに石が建てゝある。

山「おい待ちな、此処に道知るべが書いてある」

馬「何が書いてありますか」

山「此処に何処の何村と書いてゞもあれば、何れいす国くにづく尽しにある国だろうから何とか分ろう、心配をしなさんな」

馬「日にっぽん本は広いけれども鹿児島熊本ならまだしも、支那朝鮮などと来ては困りますねえ」

山「黙つていなよ、多分日本にほんの内だから大丈夫だ、えー南みなみはしみ走清しゆせい水ず観かん音おん西北せいほく大津道横須賀道と、なんだ何処の国かと思つた」

馬「鹿児島ですか」

山「どうも師匠べらぼう箆棒べらぼうだな」

馬「箆棒と云われちや心持が悪いねえ」

山「風の吹　しで元の処へ歸つて来たのだ、始めは鴨居とりか西北とで一里半も沖へ出たろう、あの通り烈しい風であつたが風が東南いな風さに變つて元の所へ来たのだ、鴨居ちよりは些あすこと寄つているが、師匠こゝ此所まほりむらは真堀ちげ村ちげに違えねえ、左様そうして見れば彼所あすこは焼失やけうせた真堀じょうれんじの定蓮寺ちげに違えねえ、あゝ有ありがて難え」

馬「何所どこの国で」

山「ひとつ国さ、此のヤンツウ坂を越せば直己すぐの家うちまで六町しかない所ところだ、おいなにを泣くのだ」

馬「嬉し涙が出ました、私わたくしは百里も先かと心配したが宜いいい塩梅で、

家^{うち}まで六町の所まで来ていて気をもんだ馬鹿^{ばか}気さてえなございま
せんねえ、有難うございます、ありがてえ、大津の銚子屋は直^じき
だ、一町ばかりきやアねえから銚子屋へ行つてお飯^{まんま}をたべましょ
う」

山「飯^{めし}のことばかり云っているなア」

と段々跡を慕つて行くと彼等は竹ヶ崎の南山へ這入るから付い
て行くと、柱が二本建っている外門^{そともん}の処へ四人とも這入りまし
た。

山「師匠々々、此処へ這入ったが、こんな立派なうちから出る葬^と
式^{むらい}に差^{さし}担^{ない}とはへんだなア」

馬「へんは宜うございますから銚子屋へ行きましよう」

山「今行くよ」

ともとの道へ帰ろうとする山の際きわの、信行寺しんぎようじと云う寺から出て来る百姓てい体の男が、鋤すきくわ鋤くわを持って泥だらけの手で、一人は草鞋一人は素足さきで前へ立つて、「誠に貴方あなたどうも思おも掛いけねえ所でお目にかゝりました、貴方あなたは石井の旦那様、東浦賀の新井町の旦那様で、とんだ所で誠に、三年跡に川崎の本藤で侍に切られる所を助けて頂きました私わしは高沢町の米藏で：これはどうも誠に思いがけなくお目にかゝって」

山「その後は私の所へ来られて種しゆ々々頂戴しゆもので：私も会所へばかり出ていてお目にかゝらんが何時いつも御無事で」

米「こう遣つてはア命を助かりまして達者で居りますも旦那様の

お蔭で、一日でも旦那様のお噂ばかりして：鹿かの八はちおい、彼の時あ
お目にかゝった旦那様」

鹿「どうも彼の時あは有難うございました」

山「まあ、大層早くから稼ぐの、農業か」

米「なアに葬とむらい式がありましてねえ、何う云う訳か此の山へ立派
な家うちが建ちましたが、何だか元お大名の御家老様でえらい高をと
った人だそうで、それが田地でんじや山林やまを買って何不足はねえが、欠
けと云うのは奥様がおツ死ちんだそうで、急だから内葬ないそうにしよう
と云うので、家うちを建たつた許ばかりで葬とむらい式を出したくねえてえ、早く
穴を掘ほれつて云い付つかつたで急に寺へ手伝いに参りますので、鹿の
八と二人で今穴を漸く明けたので、是から葬とむらい式があるの」

山「彼^{あすこ}処の山の上の柱が二本ある枳^{きこく}殻の植^{うわ}つてある彼^あれか」

米「はい」

山「馬作お前は此の人を知っているか」

馬「いゝえ」

山「そら三年前^{あと}池上のお籠りの日で、彼^あの人だ」

馬「おゝこれは妙だ、誠に暫くどうも、お前さんも此の近^あ処で」

米「彼^あの時よく冗談口をきいて：誠に久し振りで：お前さんも此の近^あ所で」

馬「旦那お願いで：飯が食^たい度いからおつけでも宜^いいから早く行つて食^たべたい」

山「騒々しいよ」

米「どうぞまア此方こちらへ」

山「ありがとうございます」

二十

井桁屋米藏いへの家の門かどへ来ると、ぷツくと饅頭屋で煙が出て居ります。

米「お直なおやお目にかゝったよ、ソラいつぞや私わしを助けて下すった

旦那様にお目にかゝったよ」

直「おやまア馬作さん暫く」

山「師匠あれは何だ」

馬「あれは西の江戸屋に勤めをしていたお直というので、祭の時分から知って居ります」

馬「直ちゃん、どうも誠に暫く」

直「馬作さん本当に暫く、何うも内の人にはねお前さん旦那に助かつて、お礼に上つても半間な時分行くもんですからお目にも懸りませんでねえ、どうも」

馬「直ちゃんの家とは知らなんだ、饅頭屋の女房かみさんになつているとは、人間は了簡の付けようですねえ」

直「馬作さん、お前さんも知つておいでのあの粥河圖書と云う人が、田地や山を買つて鎌倉道へ別荘とかを拵える話をお聞きかえ、それに奥様が死んだてえが其の奥様てえな、それ三年前堤方あちゝみかたむ

村らの葭よし簀ず張っぱりに茶の給仕していた岩瀬と云う元は立派な侍の娘が、粥河様と一緒になつたと云う事だが、その奥様が死んだと云うと、あのおらんさんと云う嬢こが死んだのだねえ」

馬「成程可哀そうな事をしましたねえ、二十歳はたちぐらいでしようかもう些ちつと出ましたか、彼あのくれえな別嬪べっぴんは沢山たんはありませんよ、彼あれが死ぬような事じゃア馬作などは船で死んだつても宜いいのですが、惜しいことをしましたねえ」

山「おい〜お前は是から其の穴を掘った処へ棺うめを埋うめる手伝てんいをするのか」

米「へい私わしが埋うめるので」

山「湯灌ゆかんは誰がするのか知らねえが、お前めえの働めきで仏の顔を見ら

れようか」

米「湯灌は大体たいてい家柄うちの邸うちでは家うちですが、殊ことによるとお香こう剃ぞりの時ふた蓋たを取ると剃かみそり刀はさきを当てる時何うかすると顔を見ます事がござります」

山「有難い、それじゃア己に鹿の八なりの扮装なりを貸して呉れないか、穴掘に成つてお香剃の時仏様の顔みを見度みいのだが、馬鹿気ては居るが、友達の積りで連れて行つては呉れまいか」

鹿「勿体ねえ訳で、旦那様が穴掘になつて」

馬「お止よしなさいな、貴方はあの嬢こに未練があるので：旦那は一度半治さんを掛合にお遣やんなすつたら縁付よいたと聞いて、諦めても矢やっぱり張はり惚ぼれて居るので：：：貴方が穴掘の形は團十郎が狸の角兵衛

をやるようで、余りあんま旨くは出来ませんぜ」

山「黙つていねえ、お前はまア家うちへ帰りなよ」

馬「だつて腹が減つてどうも」

山「飯は喫たべてよ…お母様つかさんには釣つに出て颯風はやてをくつたなどと云う

とお母つかさんが案じるから云うなよ、西浦賀の江戸屋で御馳走にな

つて泊たつているが、明日あしたは早く帰ります、他に用がある積りでお

前ま先へ帰んな、帰つてもお母さんに詰つらんことを云いなさんな」

馬「宜しゅうございます、それじゃアお先へ帰ります」

これから着物を借りて山三郎は穴掘の扮装なりになりました、手拭

はスツトコ被りにして、井桁屋と二人で埋うめるときの手伝うとなつて

行つて様子を見ていると、向うも急ぐとみえて、夜よの明けうちん中と

云うので、漸く人は五人ばかり付いて来て、仰願こうがん寺じよう様な蠟燭を
 点けて和尚は一人でお経をあげて、棺桶を取つて蓋を開け和尚が
 髪をすりかけて居るを、山三郎は米藏うしろの後からそうつと蓋を押え
 ながら差さし覗のぞくと、少々夜よがしらんで明るくなりましたから、見
 ると仏は十七八の娘で、合掌は組んで居るが、変死と見えて上齒うわば
 で下唇を噛みまして、上眼うわめをつかつて仰あおのけになつて居るから、
 はてなこれは変死だなど能よく見ると、自分の縁類なる東浦賀の大
 ケおおがやまち谷やまち町の吉崎宗右衛門と云う名主役の娘おみわで、浦賀で評
 判の美人だから、はてな奥様が死んだと云つて吉崎の娘を葬るは、
 はて訳の分らん事だが是は怪しいと思ひまして、山三郎は米藏よ
 りは先きへ逃げ出して来まして、お直の処へ来て着物を着換え、

是から急いで真堀の定蓮寺へ参りましたが、夜はシラ／＼明けま
 して、定蓮寺の彼の^か本堂へ来まして、喜連格子^{きつれごうし}を明けて這入りま
 して、和尚に見咎められてはならんから、彼方^{あちこち}此方と^{ぬきあし}拔足をし
 て様子を見ると、人も居らん様子で、是から上つて畳二畳を明け
 て根^ね太板^{だいた}を払つて、窃^そつと拔足をして蓋を取つて内を覗くと、穴
 の下は薄暗く、ちら／＼^{あかり}灯火が差しますから山三郎は訝^{いぶか}しく思い、
 棺の中から灯^{あかり}のさす道理はなし、何んでも怪しいと考え、棺桶の
 蓋^{ふた}を力にまかせて取りますと、此の棺の中に何物がありますか、
 次席に申し上げます。

新井町の山三郎は真堀の定蓮寺の本堂の床下に埋めてある棺桶うづの蓋を取ると、この中に灯火あかりが点いておりました、手燭てしよくに蠟燭が点いて、ぼうつと燃えております。中に居ります婦人は年が二十一二で、色白の品の好いい世にも稀なる美人でございます。扮装なりは黒縮緬にvari裏の附きましたのに帯はございませんで、薄紅ときいろ色のしごきを幾重にも巻附けまして、丸鬚は根が抜けてがつくりと横びんになつて、鬢びんの髪も乱れて櫛簪かんざし挿も抜けて居てありませんで、何う云う訳か女のふみ前に文売ふみのような物があつて、山三郎が覗くくと件くだんの女は驚きまして山三郎の顔を見ると直すぐに傍そばにありました合あいぐち口を取つて今咽喉のどぶえ笛を突きに掛りますから、山三郎は驚き飛掛

つてもぎ取ると、見られてはならんと思ひまして前の文ふみ売がらを取り、急いで懐ふところ中へ入れて隠します様子故、まア此方こちへお出いでなさいと云うので彼かの女を本堂の上へ抱上げまして、彼かの手燭に点いております蠟燭の灯火あかりを女の前へ置きまして、婦人が顔を上げまするを山三郎が見ますると、三年前あと池上のお籠こもりの日堤方村の茶見世に出て居りました岩瀬主水の娘のお蘭で、見覚えがあるから、

山「まア思い掛けない事で、お前さんは三年前あとに池上の田甫たんぼへ出口の石橋の処の茶見世に出ておいでのお蘭さんとか云う娘さんだ
ねえ」

蘭「はい」

山「何う云う訳でお前まア此こ様な棺桶へ入れられて埋うめられたのか
 知らんけれども死んだ人なれば穴を掘つて墓場へ埋めなければな
 らんが、本堂の石室せきしつの中へ入れて、殊に棺桶の中に灯火あかりの点い
 て居るのが誠に私には何うも実に怪しく思わるゝが、一体何う云
 う訳でお前さんにや合口を持つて死のうとするのか、是には何か
 深い訳のある事だろうが、何卒どうぞ私に聴かして下さい、早まつた事
 をしてはなりません、何うぞ訳を聞かして下さい」
 蘭「はい、誠に御親切に有難うございます、私わたくしが活いきておりまし
 ては夫に済みませんことで、操みさおが立たちません、どうぞお見遁みのがし遊
 ばして、この儘死なして下さるのが却かえつてお情なさけでござります、思
 いがけなく貴方様にお目に懸り、面目次第もないことで、深くお

聴き遊ばすと私は辛うございますから、此の儘どうぞお殺し遊ばして、何卒合口をお返し下さい」

と云いかけまして、わア—つと其処へ泣倒れますから、

山「まあ〜死ぬのは何時でも死なれるから、私も斯うやってお前を助けるからはいざお死なさいと刃物を渡す訳には人情として出来ん、何うでも死なんければならん死なんければ操が立たんと云う訳なら強つて止める訳にもいかんが、私が一通り聴いて成程と思えば決して止めはしません、何しろ此処で話をして居ると死人を掘返したとでも云われては飛んだ罪を被せられ、人の眼に懸ると面倒だから私が連れて往く処へ厭でも往つて下さい、何卒私の云うことを聞いて下さいよ」

とこれから元の如く棺桶の蓋をして、石室も元のようにして蠟燭の火を消して其処等をも片付けて、厭がるお蘭の手をとつて、連れ立ち、鴨居の横を西に切れて東浦賀へ出まして、徳田屋と申す舟宿がありました、これは旧来馴染の一番舟のである家でござりませんが、其処へ参ると、

舟宿「これは旦那お早く何方へ、昨日つりにお出なすつたてえ」

山「あい、釣に往つたが訳があつて脇へ廻つたのだが、大急ぎで舟を一艘仕立て、天神山まで行つて呉んな」

舟宿「へい直ぐに、貴方が一人で」

山「急の用で一人連れがある：もし其処に立つて居ては人の目に懸るから此方へ這入つて」

蘭「はい、御免なさい」

と眼も何も泣き腫はらして、無類むるいの別嬪べっぴんがしごきの扮装なりで家うちへ這入りました。

二十二

平常ふだん堅い山三郎が、別嬪べっぴんを引張ひっぱつて来たから、徳田屋の亭主は早呑込みに思い違えて、

亭主「旦那久しいお馴染様じゃアございませんか、何も天神山迄入らつしやらないでも、お母つかさんに知れて悪くば知れないように何うでも出来ませ、奥の六畳は狭いけれども、間まが隔へだつて宜うご

ざいます、彼所あそこなれば知れませんか、お泊りなすつても宜うございます」

山「そう云う訳じゃアない、少し仔細があつて此処にやアいられないから、舟を早く仕立つて、親方達者そうなのを遣つて呉んな」
 亭「へいかしこま畏りました、貴方こちら此方へお這入りなさい、そうして旦那、あの御婦人は御番所の前は手形が入りませぬ」

山「手形はない」

亭「じゃア斯うしましょう、知れないように頭巾でも被かぶらせ、扮装なりを変え、浜町の灯台のところへあの御婦人は待たして置いて、貴方はお一人で御番所を通つて、それから岩の処で御婦人をお連れになつたら宜うございましょう」

山「其そん様なことをしてはいられない、罪は己が負うから宜いい、人の命に係かわる事だから、急いで、布団を三つも入れて板子の下へ隠いして行けば宜いい、食物たべものは何も入らん、彼方あっちへ行いつて食くうから、早くしろ」

亭「かしこまりました」

と山三郎の云うことだから大丈夫だと、亭主も急がせまして、前まえ艫えろが二人、脇艫が二人、船頭一人都合五人飛乗ひのりりまして、板子の下したに四布よのぶ布ふ団とんを敷敷いておらんを入れ、

山「窮屈きうくつでも少しの間まの我慢ごまんで：陸おかへ着きけば何でも有ありますから：おい早くしな」

と是こゝから舟ふねを漕こ出だしまして番所ばんじよの前まへへ出でますと、其こゝの頃ころ番所ばんじよの

見張は正しいが、会所へ日々出まして役人衆とは心易いから山三郎は一人出まして、

山「山三郎私用あつて上総かずさの天神山まで参ります」

と云うと板子の下に別嬪べっぴんがおります事は存じませんから、役人衆も宜しいと許します。それからこう行くゆくと丁度朔風なつらいと申して四月時分も北風が吹く事がありました、舟は益々早く、忽ち只今なれば四時間ばかりで天神山の松屋と云う馴染なじみの所へ参りました。

松「これは旦那、さア此方こちらへ」

山三郎は離れた所が宜いいと云うので奥の離れ座敷の二階へ連れて参りましたが、お蘭は心配のせいかきやくしやく癩しやくが起つて来る様子、薬を取寄せなまじい医者よを聘よんで顔を見られてはならんと、

眼の悪い針医を呼んで種々介抱致して、徐々にお蘭に聞いたが、何うあつても訳を申しません、操が立ちませんからどうぞ私を殺して自害をさして下さいと云うのみ。或る朝二番船も出まして、もう一人も客はおりませんで寂然としております。

山「お蘭さん、少しは今日はお気分は宜うございますか」

蘭「はい」

山「なる程少しはおちついた御様子だ：改つて云うまでもないが、お前さんを彼処あそこから連れて参つて、今日は十四日かで丁度四日かになります、私は無沙汰に家を明けたことは、未だいまにございませんから、定めし母が老体ではあり嘸案やいぞじていませう、お前さんが自害をしようと云うのを強たつて助け、斯うやって連れて来ても、矢やっば

張海へ飛込むの咽喉のどを突くのと云つて見れば、それを見捨て、
 歸る訳にもいきません、お前様まえさんが仔細を話して下さらん中は私は
 何時いつまでも宅うちへは歸りません生涯でもお前さんの傍そばにいなければ
 なりません、左様そうじゃアありませんか、お前さんが何時いつまでも云
 つて下さらんと私に不孝をさせるようなもの、私は賤いやしい船頭を
 扱扱う　船問屋の詰らん身の上だから、蓮つ葉にべらく喋るだろ
 うとお思いだろが、私も男で、人に云つて害になることは決し
 て私は云わん、言つて呉れるなどお云いなら、口が腐つても骨が
 くだけても云わん」

その時山三郎は、お蘭に向つて「武士に二言なしと云うが、私わたしも少し武士の方に縁のある身の上で、緩ゆるくり話をしましうが、お前さんも、元は本多長門守の御家来で立派な武士の嬢さんが、あの堤方村へ茶見世を出し、失礼だが僅かな商いを能よくまアなさる、感心な、母親おやの為に彼あんな真似をなすつた、私わたしも通りかゝつて見世へ休んだとき、お母つかさんの看病には恟びつくりした、孝心なことで、彼あア云う娘をと陰かげでお前さんを実に賞ほめていたので一層の心配をします、それを恩に被きせる訳でもなんでもないが、何うぞお前さんの力になつて上げたいと江戸屋の半治という者を頼んで、お前さんがお独ひとり身みでお在いでならお母つかさんぐるみ引取つて女房に貰

いたいと話をしにあげた所が、もう粥河圖書と云う人へ縁組が出来たと聞きましたから、それは結構な事だ、何処でも好い身柄の処へ縁付けば結構だと私もお前様の事は陰ながら噂をしていたので、処が計らず釣に出て真堀の岸へ吹き上げられ、定蓮寺の床の下へ棺桶を埋めるのを見て、怪しいと思つて跡を付けて出て往つて見ると、道でまた葬式に遇つて、それを段々調べて見ると私の縁類の吉崎のおみわと云う娘で、其の娘を奥様の積りで蛇ヶ沼の信行寺へ葬むるといふのは訳が分らず、奥様と云えばお蘭さんに違いないと、私は取つて歸して定蓮寺へ来て見ると、棺桶の中に灯火が点いてありますから訝しいと思つて私が出したので、実に訳の分らん始末、それに今お前様がどうしても操を立てなければ

ばならん圖書に濟まんと云うばかりでは、何故死なゝければならんか理由わけが分らん、私も斯うして何所どこまでもお助け申したからは訳を聞かん中うちは、私も男だ、一生涯でもお前さんの傍にいなければなりません、私わたしにそれ程不孝をさせて呉れては困るじゃないか、くどくもいう通り決して口外はしないから訳を話して下さいらんか、頼むから何卒どうぞお蘭さん」

と山三郎は手を突いて頼む様にして、柔やさしゆう云われますから、お蘭は親切なお方と顔を上げて山三郎の顔をじいつと見詰めておりました、眼に一杯涙を浮うかめまして、

蘭「誠に三年跡にお恵みを頂き、蔭ながら貴方のお噂をしております、おとしぎ 俠氣の御気性でよもや世間へ云つては下さりませぬ

から、段々との御親切ゆえ申しますが、私が活いきていては夫に濟まないと申す訳を一通りお話を致した上からは、何うでも活いきてはおられませんから、お聞きの上は合口をお返しなすつて、直すぐに此の場で自害をさして下さるならば身の上をお話し致しましよ
う」

山「それは困ります、併しかし何う云う訳か話の様子に依つて死なずとも宜よい事なら殺して詮せんがない、まア兎も角もお話しなさい」
蘭「はい、実は私わたくしは三年跡粥河圖書方へ余儀えんあいない縁えんあ合あいで嫁付かたづきまして何不足ない身の上で、昨年九月頃あたりから、夫は鎌倉道の竹ヶ崎の南山と申す所へ田地と山を買い、其所そこへ別荘を建たてると申して出ました切り手紙を一通送つて遣よこさず、まるで音信おとづれがございま

せんから、愒気ではございませぬが、ひよつとほか万ますはな一外はなに増花はながあつて
わたくし私に倦うが来て見捨てられやしないかと、心細い身の上から種々いろく心
 配いしております所へ、小兼と申す御存知の芳町の芸者が来て、勝
 手を知っているから船に乗つて一緒いっしょに行けと、小兼に連れられて
 南山と申す別荘へ参りました所が、圖書は出ておりませぬで、長
 治と申す下男ばかりで、どうして此の山の中で、さけさかな酒肴さけさかなを拵え
 ますにも大抵の事ではございませぬのに、長治一人で早く出来ま
 す訳もなし、どうもそんな事も不思議に存じまして、用場へ参ろ
 うと思つて、三尺ばかりの開戸ひらきどがありますから其処そこを開あけます
 と、用場ではなく、其処は書物棚になつておりまして本箱や何かゞ
 数々ありましたから、粗忽わたくしをしましたと私わたくしが締めようとして其処

でつい足が^{すべ}にりまして、書棚の書台へ肘^{ひじ}が当りますと、劇場^{しばい}でい
 たす廻り舞台のようにぎゅーと開^{ひら}きまして、不思議のこと、後^{あと}へ
 下りますと書棚の下に階梯^{はしご}の降^{おり}口^{くち}がありまして、あゝこんな所
 に階梯の降口はない筈だが、事に依つたら此処から他の座敷へ抜
 ける道でも附いて在^あつて、其所^{そこ}に婦人でも隠してありはしないか
 と、まア愷気ではございませぬが私^{わたくし}は案じられますから、その階
 梯を降りまして漸^{よう}々^く手さぐりで参りますと、暫くの間廊下^{りやう}のよ
 うになつて、先に広い斯う座敷の様な所で、廻りが杉戸のような
 物が二重に建つて居りまして、中に人は居りますが、申すことは
 些^{ちつ}とも分りませんから、欄間から灯火^{あかり}のさすのを見て、はてなど
 欄間から覗いたら少しは事も分ろうと、机を台にして欄間から覗

きまして、実に驚きましたが、どうか世間へは何卒どうぞ此の事ばかりは貴方だから申しますが、お話しは御無用に願います」

二十四

山「へーえ、其の縁の下へ階梯はしごが掛つて、床の下が通れるようになって、成程、で其処そこを覗くとどうなつて居りました」

蘭「その床下へどうして彼様あんな広い座敷を建てましたか、二間程ふたまの大広間がございました、夫圖書もおりますし、千島禮三と申す以前下役の者もおりまして、宅へも参りまする周玄と申す医者も傍そばにおりまして、其の外百人余りも其所そこにおりましたが、其の者

どもは皆夫の同類で、主人は其の百人余りの盗賊の頭かしらぶん分ぶんになつておりますから、それを見まして私は実に驚きました」

山「成程、浦賀辺へ此の頃は大分盗賊が徘徊して、寺や何かへも強盗おしこみに這入ると聞きました、直じき鼻の先の竹ヶ崎へ百人から盗賊が隠れていようとは、ふうんーそれから何うしました」

蘭「はい、その傍の柱の所に年の頃十六七になります器量の好よい娘が縛られておりました、あゝ荒々しい情なさけない事をする、何処か

ら勾かどわか引ひして来たか、憫かわいそう然さにと存ぞんじまして、其の娘を見ている

と多勢おおぜい寄よつて其の娘を今晚は□□の□□のかしめるのといい、

終しまいに仲間同志の争まじいになりましたが、夫が見兼わて此の娘は私わしが貰もらつたと傍そばに有ありました刀掛やぶの脇差わきざしの小柄こがらを取りまして投げ附つけ

ますと、其の娘の乳の辺へ刺さりました、きやつと云いましたから
悔びりして机から落ちたとまでは覚えておりましたが、其の折何処
か脾腹ひばらでも打ちましたか、それから先は夢のようでとんと解りま
せん、暫く経わたくしつて私が気が附きまして眼を開ひらいて見ますと、四辺あたり
が暗くろうございますから、出ようと存しても出る事も立つことも出
来ませんで、私は死わたくしんで埋められたのではないかと手を撫なでて見る
と、私わたくしの手に火打袋が掛かつております、これは圖書が野掛に出ま
す時常に持ちます火打袋で、中には火道具や懐中附木もあります
から火道具を出して火を移しますと、傍わたくしに燭台も蠟燭もあります
から、取敢あかりえず灯を附けて見ますと、私わたくしは白木の箱に這入つて
居りますから、前を見ますと夫圖書わたくしが私へ贈りました手紙が一通

と傍に懐劍が添えてあります、はて不思議な事と直ぐにその手紙を開きまして、読んで見まして、実に私は棺桶の中に泣倒れて居ります処へ貴方がお出で遊ばして私をお救い下すつて、斯ういう処までお伴れ遊ばして、お母さんまでに御苦勞を掛けますのも私故で、何とも御親切のお礼の申し様もございませんが、何分私が活き存命ながらえておりますと、他から夫の悪事が露見しても私が申したとしか思われません、左様そうなりますと私わたくしはどうも、仮令たとえ悪人でも一旦連添ぞいました圖書に操が立ちませんから何卒どうぞ自害をさして下さい、左様そうすれば女の道も立ちます事で、お情なさけにどうぞ懐劍を返して下さい」

と涙ながらに申しました。山三郎はお蘭の話つく／＼を熟々聞いて

おりましたが、

山「成程妙に巧たくんだもので……お蘭さん其のまアお前の亭主から贈ったという手紙をお見せなさい、まあサ見なくては解らんから」と強いて云うゆえおらんも此の場になつてはもう是非がない、蘭「はい、皺だらけに成つてはいますが」

と圖書より贈った手紙を出しましたから山三郎は開けて見ますと、文章は至つて巧みに、亭主が女房に手を突あやまいて詫あやまるように書いて有ります。

手紙の文意「我等儀主家しゆか滅亡の後八ヶ年の間同類を集め、豪家又は大寺へ強盗に押入り、数多あまたの金銀を奪い、実に悪いという悪い事は総すべて我等が指揮さしずして是迄悪行を累かさねしが、三年跡其そのもと許を妻

女に持つてから後は其許の孝行と貞節に愧はじて、何卒なにとぞ悪事を止やめ
 度たくと心掛おけ居るものゝ、同類も追々に殖え何分にも足を洗う事
 叶わず、然るに此の度たび其許に我等の悪事を見み顯あらわされ誠に慚愧の
 至り、さりながら同類の手前何分捨て置きがたく、是非なく真堀
 の定蓮寺へ氣絶の儘埋葬いたすなり、されども氣絶の事なれば棺
 桶の中にて蘇生するようなる事あるも測り難し、されど此の事が
 其許の口より露顯致せば大勢の難儀になる事なれば誠に非道の夫
 とも思わんが、何卒なにとぞ此の懷あいくち劍にて是非も無き事と諦め得心の上
 自害して呉れられよ、尤も我等も遠からず官かみのお手に遇あひ死刑に
 臨む時、冥途にて其許に遇い詫言を申すべし、呉れ／＼も因果
 の縁合と諦め自害おんを御急おんぎ下され度そろく候云々」

と云う様な塩梅に旨く書続けてあります。悪人でも連添う夫婦の情じょうで死しのうという心になるお蘭の志を考えると、山三郎は憫あわれさに堪えられず、暫くの間文ふみ殻がらを繰返し〜読んで考えて居りました。

二十五

山「お蘭さん、誠にどうも御尤ごもつともで、お前さんは感心な方で、お前さんの御亭主を私わたしが悪くいつては濟まんが、此の文面の様子では、三年あとお前さんを女房に持つてから、志を見抜いて、其の孝行と貞節に感じて今迄の悪事を止めようと思ひ込んだと書いてある

が、其の位見抜いて、頼もしく思つて居る可愛い女房が、悪事を
 見たからと云つて氣絶した儘埋るとは情ない、死んだか活きたか
 分らんなら何故薬を飲まして手当をして、氣が付いての上、偕斯
 う云う訳だからどうかお前を助けたいが助ける訳に往かんから自
 害して呉れと云えば、それお前さん、はいといつて自害もする人
 だ、其の心底を圖書が知つていながらお前さんを生埋にしたの
 で、お前さんだから蘇生いきかえした後も自害をしようとしなすつたの
 で殊に私が此程わたし これほどまでに様々云つても事実を明さないで、是は勿
 論死を極めておいでなさるから云わないので、これが普通の女で
 あつたらわア〜騒いで屹度人きつとを呼びましよう、それでも助ける
 人がなければ可愛や食物くいものはなし棺の中で飢死うえじにに死んで仕舞う

だけ、実にどうも非道の致し方で、お前さんはまア其の非道をも
思わず、圖書を思う志こころざしし、誠に夫を思う貞節、お前さんの志に免
じて何うか圖書が改心するようにして遣りたい、私わしが是から浦賀
へ歸つて役所へ訴えれば直ぐ番所の手を以て竹ヶ崎南山へ手当に
なる訳だが、なれども左様そうすればお前さんの志を空むなしくすると云
う誠に其れも気の毒な訳だから、圖書に人知れず会つて、篤とくと異
見をして、圖書が改心の上は元通りお前さんと添わしたく思いま
す、其れゆえ私わたしは是から歸つて圖書に逢つて、当人に熟つく／＼々々意
見をしますから、圖書が改心の実証を見抜くまでお前さんは死を
止とどまつて、私わしに命を預けて：いやさそんな事を云つては困るお前
さんを殺す訳にはいかん、尤も云うまでもないが、愈いよく々改心せ

ぬといえは仕方がない其の時はお前さんの望に任かして自害をさせましよう、先まず其れまでは」

と事を分けて諭しましたので、お蘭は唯はいくくと泣きながら返辞をして居りました。山三郎は又お蘭の心を想いやり頻りに宥なだめて居りますと、後うしろをがらりと開けまして、

男「御免なさい」

山「おい、其所そこを無暗むやみに開けては困ります、飛んでも無ねえ」

男「御免なすつて、もしお宅からお手紙が届きました」

山「どうして家うちの奴が知つて居たか」

男「へい徳田屋の船頭がうっかり喋つてお母つかさんのお耳に這入つたと見えまして」

と持つて来た手紙を出すを、山三郎は訝かしげに受取つて開いて読よみ下すと、驚きました。其の母の手紙には「お前の留守中妹のお藤を強たつて貰いたいという其の人は、旧金森家の重役粥河圖書という人で、近頃竹ヶ崎へ田地や山を買い、有福ゆうふくの人で、奥様が此の間お死去かくれで、何卒跡どうかに嫁を欲しいと思うが、お前の妹お藤が相当な縁だということで真堀の定蓮寺の海禪かいぜん和尚おしょうが橋渡しをして媒妁なこうど人を立てて貰い度いという、向うは急ぐからお前に相談しようと思うが、何分留守で仕様がなし、先方さきからは急ぐ、何うも角こうも断りようが無いから、今日大津の銚子屋で見合をして、お藤が得心の上は粥河様方へ縁附けるから一寸ちよつと知らせる、なれども用がなければ帰つて来て、用があるなれば別段帰らんでも宜い

い、結納を取替^{とりかわ}せる、此の段松屋に居るとのことが知れたから知らせる」唯^{たつ}た一人の妹^{いもうと}お藤を盗賊の所へ縁附ける、結納を取替せるとあるから驚いた山三郎、思わず手紙をぱったり落して腕を組み、考えれば考える程可哀想にも、眼の前に居る此のお蘭を女房に持ち、悪事を見たといつて生理^{いきうめ}にして、間もなく己が妹を貰おうと云うは如何にも人情にはずれた悪人、併^{しか}し此の事はお蘭には云えず、心一つに憤^{いきどお}つて居る。其^そんな事とは夢にも知らぬおらん「誠に何から何まで御心配下さいまして、貴方のお志は死んでも忘れません、何うぞ此の上何分宜^よい様に」

山「あの、大急ぎで船を一艘^{ぱい}仕立って呉れんか、一寸浦賀へ帰るから大急ぎで、風が悪いから其の積りで、食物^{くいもの}や何かはどう

でも宜いから：時にお蘭さん、あの母から手紙が来まして、黙つて四日も明けたもんだから大分心配して居る様子、一寸行つて来なければ成りませんが、今晚は何うせ来られませんが明朝来られなければ明日遅くも夕景までには屹度来ます、それまでの間は何卒自害するの海へ飛込むのなどという事は予々申す通り止まつて、こりやア私がお願いです、若し左もないと私が是まで尽した事は皆な水の泡になるから、決して悪くは計らわんから、同じ人間だから悪い心にもなり又善い心にもなるものだから、貴方の思う圖書の心が直る様に何処までも他人を払つて異見するから其の積りで、御亭主が善人になれば貴方の思つた心も貫き、其の上何卒もとくにしたいたい心底、其れゆえどうか行つて来るま

で待つて居て」

蘭「はい、実に有難うございます、お母さまは嘸お案じで、どうか早くお帰り遊ばして下さい、明日夕方までにお出になるをお待ち申します」

山「お蘭さん、貴方小遣が入りますから沢山は無いが少しばかり手許へ置いて行きますから、何ぞ好きなものを買つて遠慮なしにお上んなさい、気の酷く鬱ぐ時は、此の頃は旅稼の芸人が居るから其れを呼んで気晴しでもして」

男「船が出来ました、直ぐに」

山「船が出来た、じゃ行くよ」

二十六

山三郎は階梯段はしごだんを降ります、残り惜しいから、お蘭は山三郎を船の処まで見送ります。山三郎も船に這入って気の毒な女だとお蘭の顔を見る、これが思えば思わるゝと申すのでござりましよう。船頭は山三郎が大急ぎと申すので腕一杯に漕ぎますが、何分風が向い風で船足は埒明らちきません。山三郎はじり／＼して居りますが、何うも仕方がない、朝の内は西風ならいが吹き、昼少々前から東風ちから南風みなみかぜに交つて、彼是れ今の四時頃に漸く浦賀へ這入りました。山三郎は早くも船より上あがりまして新井町へ駈けつけて、家うちへ馳かけ上あがつて見るとお母ふくろも妹も居りません、其処そこに留守居をし

て居るのが馬作一人。

山「おい師匠」

馬「へい、お帰りなさい、どうも実に驚きましたぜ、何処へ入ら
っしやいました」

山「わきへ廻つて遠方へ行つた」

馬「どうもお母さんふくろがお前と一緒に往つたのだから何処かへ行つ
て捜して来いと仰しやつて、それから私は江戸屋に入らつしやつ

たが、はて何うなすつたかと云う様な事をいつてお家を出ました
が、何処へ往つたつてお出なさいでらぬのは知つて居るから、ぶら／
＼大　りや何かして、釋たつて帰つて見ても未だお帰りなさらな

い、はてなと又出掛けて、今度は徳田屋さんで聞いて見ると、貴

方は舟の中へ女の子を入れて松屋へお出な^{いで}さつたと云うが、あな
た酷^{ひど}いじやアありませんか、私^{わたくし}を捲^くなんざア感心^{あは}しましたぜ」

山「なにそう云う訳じやアねえ」

馬「旦那まア板子の下へ女の子を入れて行く^いなんざア凄^あい寸法で、
併^{しか}し旦那よくまア彼の^あ八釜^あしい御番所の前をねえ」

山「それ処じやアねえ、お母^{つか}さんは何処へ」

馬「お母^{ふくろさん}様はね、いや実に妙不思議な事で、それ例の彼^かの粥河様
のおらん様が死んだので、不自由だから、他から貰うよりは貴方
の妹御をと云うので、寺の坊さんか何か頼んで其れが橋渡で漸く
話が極つて、それからお嬢さんに話をすると、何かそれ貴方が後
見になつて妹に髻を取つて此の家^{いえ}を相続させると仰しやつたのだ

が、其れじやア私が済まない、矢張り兄にいさんを此うちの家の旦那にし

て私は他わきへ縁付きたいと云うので、処ところがね嬢さんが粥河様を見る

と一寸ちよつと好いい男だもんだから岡惚おぼをして、藤ちゃんはずうつと行

きたいという念があるので、お母ふくろさんも遣つかりたいたと云うので、詰

り極こつて、今日大津の銚子屋で結納を取とり換かわせ」

山「もうお出掛けになつたか、あゝ残念だ」

馬「旦那何も残念な事はありません、お蔭わたくしで私も一軒旦那場が殖

えたので」

山「のべつに喋るなよ、着物を着替えるから早く出せ」

馬「着物おめしをお着替かなさい、だが箆笥は錠かぎが下りて居ゐます、鍵かぎはお

母ふくろさんの巾きんちやく着かの中へ入れてありましたあが彼の儘まま帯おびへ挿さんで一

緒にずうとお出かけで」

山「困つたな、じゃア出刃庖丁を出せ」

馬「なんです」

山「なんでも、喋らずに出せ」

馬「だって疵きずだらけになりますぜ」

山「構わんから出せ」

と山三郎は癩癩紛れにガチ／＼とやって着物や羽織を引出して、さつ／＼と着換えて脇差さしを挿たが、見相けんそうが變つて居りますから馬作は何だか解らん。

馬「旦那わたくし私は今日お結納のお取替とりかわせ、お目出度いので御祝儀頂戴と内々悦んで居たので」

山「家へ帰えれ」

馬「へい、女郎買からお帰りで昨夜から持越しの癩癩などは恐れ入りますな」

山「斯う云うとき師匠洒落などというと聞かんど、何も云うな、黙つて供をしろ」

と山三郎は急ぎますから、家を駈出してどん／＼谷通坂を下りまして、突然大津の銚子屋へ飛込んだが、丁度今結納を取替せを為しようとする所、是れを山三郎が反古にしようと、是から掛合になります所、一と息つきまして次を申し上げます。

引続きまして、山三郎は母と妹いもうとが先に大津の銚子屋に参つて居て、此これから見合に相成るといふ事を聞いて、驚きまして、宅たくを出て大津の銚子屋へ参つたが、もう間に合いません広間の方には粥河圖書を始めとして居並んで居ります者は、前に金森家の同藩のように見せかけましたが、此れは皆同類で、圖書の傍そばに居りまするのが眞葛周玄といふ医者、立派な扮装いでたちで短みじかいの刀かたわらをば側に引附けて、尤もらしい顔附をして居ります。其の側面かたわらには真堀の定蓮寺の留守居坊主海禪といふ、此れは破戒僧でございりますが、是も外よそゆき出こころもの袈裟法衣ころもでございりますが、何か有難ありがたそうな顔附をして控えて居ります。此方こちらの方には母と妹いもとの前に膳部を据えて大勢で

何か頻りに勧めるのを兩人は返答に困つて居ります。

母「どうも御尤も様でございますが、生憎山三郎も居りません

ことで、もう程無く帰りましようかと存じて居りますが、参つて

居ります処も漸くに分つたような訳で、もう是も得心致しまして

私わたくしもまア有難い事と存じて居る処ではございますが、何を申すも

山三郎は留守の事で、あれも名前人なまえにんの事でございますから一

寸と一言申し聞かせまして、得心の上でございせんければ、そ

れはなんで如何様いかようとお話も致ししようが、今が今どうも御挨

拶も出来かねますことで」

海「いやお母さんつか、それは至極御尤もじゃが、此処にまア眞葛周

玄先生という斯ういう立派な先生の媒なこうど灼があつて事をなさるし、

私わしも坊主の身の上だから余よの事は知らんが、不思議の事で、斯う
 いう御縁合になれば、私わしも誠にお馴染甲斐もあるような訳、どう
 かお帰りがあつて、それは成らंनीやそれは斯うしてと仰しやれ
 ば、それは何うでも内うち々々お話合もつく事で、貴方が御得心にな
 りさえすれば山三郎殿は孝心の方で、お母つかさんの云う事を背そむくよ
 うなことはない、それは私わしも心得て居おるが、どうか善は急げで、
 結納の所だけは一ちよつと寸此処で取替とりかわせをなすつて、左も無いと私わしも
 また仲に這入った甲斐もないと云うもので」
 母「実に海禪さんの仰しやる通り御尤もでございませう、もう程ほ
どの無う帰りましょうと存じて居りますから、どうかもう少々お待遊
 ばして」

という所へ、

男「へい只今旦那が入らっしゃいました」

母「はい、直ぐに何うか此の席へ参るように仰しやつて」

と云ううち案内をも待たずつかくと山三郎は母の傍に参りまして、

山「誠に恐れ入りました、大きに御心配を掛けまして相済みませ
ん」

母「本当にまア私はどんなに案じたか知れないよ、何所に何うし
て居るかと思つたうちようよう天神山に居ることが知れてねえ、手紙
を出したが知れましたらう」

山「拝見致して取敢とりあえず立帰りましたが、未だ結納は取替とりかわせませ

まいな」

母「はい結納の事はお前を待つて居たので」

山「どうか直ぐにお帰り遊ばして」

母「直ぐにと云つたつてそう帰る訳には往きませんよ、先お前そ

れにお出でなさるお方は粥河様と仰しやる、元はお大名の御家老

役をもお勤めなすつた立派なお方で、此の頃竹ヶ崎へお出になつ

て結構な御普請を遊ばして、田地やお山をもお購求で、何不足な

くお暮しで、処が先頃奥様が卒おかくれ去になつて、早くどうか嫁をと

云うので、処が浄善寺へ私がお藤を連れて御法談を聞きに参つた

其の折に御覧なすつて、強たつて貰いたいと仰しやるので、他の者で

は厭だがお前の妹だからと云うので尚お彼方あなたで欲しいと仰しやる

ので」

山「左様でもございましょうが、まだ結納の取替せを致さんのは
幸いどうか直ぐにお帰りなすつて、実に私は驚きました」

母「直ぐに帰れといつても、お前の来るのを待つて居て、お前の
坐る所へ整然とお膳もお兄いさんのと仰しやつて心配をなすつて」

山「いゝえ見ず知らずの者に馳走になるべきものでは有りません
から、お母様と私と藤の料理代だけは当家へ別に払いをして参れ
ばそれで宜しい」

母「そんな事は出来ませんよ、そんな失礼な事をお云いでない、
それよりはお近附になつて」

山「いゝえお近附どころではありません、直ぐにお帰りを願いま

す」

と何かごたく／＼致して居りますから、海禪坊主が見兼て山三郎の側へ参りまして、

海「誠に暫く、番場の地藏堂に居りました海禪で、お見忘れでしょうが今は真堀の定蓮寺の留守居で、雁田がんだに居りました時分は毎度お目に懸りました事もありましたが、あれに御座るは粥河様でござりまして、此の頃近辺に御寮が出来まして、浦賀へお出いでのときお藤さんを御覧で、どうか貰い度いということ、それに土地に名高いお家柄なり、かた／＼旁々山三郎殿の御妹御おいもとごなれば是非申し受けたいといって私わたくしへお頼みで、坊主の身の上でなんだけれども実はお母つかさんも御得心又お妹御も納得のことで、結納の取替せま

でに至りまして、間際になつて肝心の貴方がお出いでがないので大きに心配致しておりました、早速お帰宅で、どうかこれへお席を取つて置きましたから、何うかこれへお坐り遊ばして、実にお目出度いことで恐悦な訳で」

山「いやお目出度いこともなんにもない、久しくお目に懸らんでしたが、海禪さん、折角の思おほしめ召しではございますが、妹藤は差上げる訳には参りませんと先方へお断りを願います」

海「へえーそれは又何ういう訳ですな、今貴方が御不承知では先方へ私わたくしが何とも云いようがございません」

山「云いようが有ろうが無かろうが手前は上げる事は出来ません、母や妹が得心でございませうが、何と申したか知りませんが、

未だ結納の取替せも致さんのは幸いでありますから、此の事はどうか先方へどうも妹は上げられないと云つてお断りを願います、母と妹を連れて直ぐに帰ります、おまえさんも御出家の身で縁談の事などには口をお出しなさらんでも宜しかろうと私も失礼ながら存じます」

海「それは左様そじゃけれども、今になつて其んなに仰しやつて下さつては言訳がない、何うかもし折角の御縁でこれまでに成りましたから」

山「折角でも何でもいけませんと先方へお断りを願います」

と此の問答を見兼ねて眞葛周玄が側へ来て、

周「へい、初めまして、愚老は眞葛周玄と申す至つて不骨物ぶこつもので、

此の後ごとも幾久しゆう御別懇に願います此の度たびは不思議な御縁で
 粥河氏よりの頼みで、届かなながら僕が媒妁なこうどやく役を仰せ付けられ
 て、予かねてこの浦賀に於ても雷名轟く処の石井氏の妹いもとご御、願つて
 も是れは出来ん処をお母つかさまもお妹御も御得心で誠に有難いこと
 で、大夫も殊こと無うお喜びでございます、どうか結納の取交とりかわせを致
 そうとして、既に只今これへ墨を添え紙をも用意致して、是から
 書こうという処で、御得心の上は速すみかに認しためます心得で「
 山「いや何うか此の事は先方へお断りを願います、母が得心でも
 妹が参りたいと申しましても、此の山三郎一人にん不服でございます
 から、左様さよう粥河様とやらへ何うか仰しやって下さるように願いま
 す、貴老あなたも媒妁なこうどやく役で御迷惑でございましょうが、直ぐに引取り

ますから左様思おぼしめ召して下さい」

二十八

周「これは当惑致しますな、折角此れまでになって、何うも親御も妹御も御得心であるのに、遅うお出いでになつて今になつて私わたくしは不服じやなどとおっしゃつては媒なこうど妁たちばの立端たちばがござらんからねえ、斯うやつて皆朋友の方も目出度いといつて祝いに來て下さつて、事がきまろうと申す所で、今になつて厭と仰しやつては誠に困りますねえ」

山「困つても何でも上げられんから上げられんと申すので」

周「それじゃア何処迄も是れを破縁なさる思おぼしめ召しかえ」

山「いや破縁と申すが結んだ縁なら知らん事まだ結ばんに破縁という事はありません」

周「貴方がお出いでというので斯う遣つて詰らん魚でも多分に取寄せ
て、先まずお膳まで据えてお待受け申すのでござるからねえ、何う
か媒なこうど灼やくの届かん所は幾重にもお指函を受けまして致しますから
是は何うか先まず御承引を願いたい」

山「いゝや御馳走にはなりません、知らん方に仮たとえ令酒一杯でも戴
いては濟みませんから、当家へは三人分だけの料理代を別に払つ
て参りますから左様思おぼしめ召して下さい」

周「これは怪けしからん事を仰しやる、貴方は此の浦賀中おとこだで男

達とか侠客とか人がお前様を尊敬する所の現在名主役をも勤めて立派なお方、物の束をもなさる方で礼儀作法もお心得であろうのに、何とも何うも怪しからん事で、此の方の馳走の代を払うなどゝは以ての外な事、よし其れは兎も角も今になり妹御を遣るの遣らんのとの事を仰しやっては僕は退かれん、君も名高いお方に似合ん事で」

圖「これく控えておれ」

と粥河圖書は横着者でございますから末席ぼつせきに下つて手をつかえ、

圖「初めてお目に懸ります、自分は粥河圖書でございます、此の度は又不思議な御縁で、以来は幾久しく何分にも御別懇に願いま

す、此の者は眞葛周玄と申すが、只今喰^{たべ}酔^よつておりまして失礼の
 事のみ申上げ甚だ相濟まんが、何卒お氣に障^さえられぬよう、当人
 に成り代り圖書がお詫を申上げます、殊に自分も尊兄のお出^{いで}をお
 待受け申すうち大きに酪酊致して失敬の事ばかり、其の辺は幾重
 にもお詫を申上げますが、何うか只今申し上^{あぐ}る通りゆえ、届かぬ
 所は何^どのようにもお指図に従い、斯うしろと仰せがあれば其の仰
 せに従いまするので、手前も親も兄弟もなし、殊には貴方のお妹
 御を申し受ければ、貴方のような兄^{にいさま}様を設けるので、此の上の
 事はありませんし、誠に当地へ参つても心丈夫なり且^{かつ}何事もお兄^あ
 様^{にいさま}のお言葉は背かん心底でござるから、何うか御不^ご服^{ふく}でもご
 ざいませうが、何が斯うすれば御意に入るとか、あゝすれば宜^よ

いとか御腹藏なく仰せ聞けられて、何うか結納取交せの所を何分にも御承引下されたい訳で」

山「何うも御丁寧なる御挨拶で痛み入ります、何卒お手を上げられて、折角の御所望ではございますが、仔細あつて妹を差上げる訳にはゆきません、と申すは妹には別に婿を取つて私が後見になつて石井の家を相続させまするので、是には種々深い訳のある事で、何うも此の妹は上げる訳には参りません、直ぐこれで引取りますから左様思召して下さい」

圖「それでは何うも当惑致します、是までに相成つて今不承知じやと仰しやつては圖書は立端がございません、此処に参つておる朋友の者は皆前々同屋敷におりました同役の者ばかりで、これ

にお聞き遊ばせば知れますが、浪人しても聊か田地や山を購かひも

求めて、お妹御に不自由をさせるような事は致さん積りで、事

によれば母公ぼこうまで共々お引取り申し度い心得でおる程でござるか

ら、左様仰せられずに何卒どうか此の事はお聞濟相成るように願います」

山「いや上げられません、妹いもとが参りたいと申しても母が遣りたい

と申しても、此の山三郎だけは差上げることは出来ません」

圖「何うあつても御承引はございませんか」

山「はい、何うあつても差上げる事は出来ません」

圖「何が御意に入りませんか、是までになつて遣られないと仰し

やる其の思おぼしめ召しを承わりたい」

山「山三郎は男でございますから情なさけと云うことを存じておりまし

て、斯様な満座の中で申すことは出来ませんが、貴方がお宅へお
 帰りになつて篤とくとお考え下さい」

圖「どう考えますか、どのように考えまするのか」

山「貴方は御浪人なすつても以前は立派なお武士様さむらいさまで、私わたくしのよ
 うな船頭を相手にする廻船問屋如き者の妹娘を貰いたいと仰しや
 れば、唯はいと二ツ返辞で差上げんければ成らん処だが、それが上げ
 られんと云うのは何ういう訳だか貴方の心に篤とくとお聞きなすつた
 ら解りましょう」

圖「心に問えと仰しやるのか」

山「はい貴方のお心に聞けば直じきに分るで有りましたよう」

圖「心に問いましたも分りませんが、何うか仰せ聞けを願います」

山「いゝえ此所では申されません、今は分りませんが後あとで分りま
す：さア行きゆましよう」

と山三郎は母の手を取つて表へ引出すと、母も妹いもとも何だか訳が
分りませんから、うろくして居るうちに、山三郎は帳場に参つ
て三人ぶりの酒料理代を払つて外へ出ました。妹いもとなんぞはちと腹
を立ちまして、粥河さまは男も好よし人柄もよし、金はあるし、立
派な人だから、此家こゝに縁附かたづけば仕合せと思つて腹うちの中に喜んで居
たのに、兄にいさんはそれだのに遣つて呉れないのだよ、余あんまりだ、と
腹なかの中では思つて居るが、まさかに口には出し得ないで唯ただしお／
＼として後あとに附いて家うちへ歸つて参りました。

二十九

家へ帰ると、供に立ちました馬作はそこへ飛出して「私もあの
前お座敷へ出ようと思いましたが一向様子が分りませんで、旦那
今日のはまア一体何うしたんです」

藤「本当に馬作さん私は冷汗が出たよ」

馬「旦那はついでしか荒い事を仰しやつた事は無いが、それも宜い
が三人前の料理代を払うなどは本当に愛敬のない仕方、彼れ
はどうも苛い、何でも理由があるに違いない、理由がなくつて彼
様になさる氣遣はねえ、何うも理由がありそうだ」

山「あゝ家へ帰つてまア安心した、さアくお母さん此方へ、妹

も此方へ来な、お前が折角行きたいという処を兄さんが止めて定めておつに思つたらうが、そこには種々深い理由のある事で、又兄さんが粥河よりもそつと立派な優つた者を見立て、遣る、心配しなさんな大きに何うも癩癩に障つて手荒い事を云つて心配させたが、勘忍して呉んな」

馬「何ういう訳でございますか苛くお怒りで、今いう通り何か是にやア訳があるのでしようが、是は何うも藤ちゃん仕方がありません、御縁のないのです、その代り今度お兄いさんのお見立になるお聳さんはね、是は大した者がありましたよう、彼よりは好いと云うんだから何んなに好いか知れませんが、粥河さんはね、あれで好い様に見えても一寸いけすかない処がありますからねえ、い

やにこう色は白いようだが何だか煉瓦の裏通りと云うような処がありますからねえ」

山「まあ宜い、何ぞで一盃遣りましょう」

と酒を取寄せ話をして居る中に灯火うちあかりを点けます時分になると、
大津の銚子屋から手紙で、小さな文箱ふばこの中に石井山三郎様粥河圖
書という手紙が届きました。

馬「旦那お手紙で」

山「何処から」

馬「銚子屋からで、粥河様でしょう」

山「使つかいの者は待つて居るのか」

馬「へい待つて居ります」

山「なんだ」

馬「何だつて粥河さんは余程よつほど藤ちゃんに惚れてるんで、先刻さつきあ彼の位に云われて見れば、大概の者は腹ア立つて、なに彼あればかりが女じやアねえ、他から貰うと云うのだが、それを又謝り口状を云つて遣よこすなんざア惚れてるてえものは妙なもんでねえ」

こなた此方の山三郎は封押切つて手紙を読みかけると、

馬「旦那、なんと書いてありますか心配で、どうか一寸ちよつと」

山「なんでも宜いいよ」

馬「何ういう訳か一寸ちよつとお見せなさい」

山「さア」

馬「此奴こいつア些ちつとも分りませんねえ、残らず字ばかりで書いてあり

ますから」

山三郎は読みかけた後あとをだん／＼見ますと、其の文面に

てがみをもつてもうしあげ

以手紙申上候然れば先刻大津銚子屋に於て御面会の折お

りから

柄何等の遺恨候てか満座の中にて存外の御過言ごかごん其の儘には

これによつて

捨置難く依之明晩戌の中刻小原山に於て再さい応承わ

たくよ

り度候間能く／＼御覚悟候て右時刻無遅滞御出で有之度これありたく

もうししん

此段申進じ候御返答可有之候也これあるべく

四月十四日

粥河圖書

石井山三郎様

という書面ではそれが決闘状はたしじょうで、山三郎はにつこりと笑つて直ぐす

に返事を認めました、その文面には

先刻大津の銚子屋にて御面談の儀に付御書状の趣き逐一承知
つかまつり
 仕候御申越の時刻無相違そういなく御出合申可おであいもうすべく 貴殿にも御覚悟にて
 御出張可有之此段これあるべく 及御答候也こたえにおよび

四月十四日

石井山三郎

粥河圖書様

という是れが決闘状はたしじょうの取遣りとりやでございしますが、向は盗賊むこうの同類
 が多人数居りますから、其等それらが取巻いて飛道具でも向けられ、ば
 其れ切りぎ、左もない所が相手も粥河圖書だからおめくとも討た
 れまい、必ず此の方も切死きりじにをしなければならんが、其の時は松

屋に残したお蘭が斯うと聞かば必らず自害して相果るに相違ない、如何にもそれが不便なふびんこと、何うかお蘭を助けたいものだがと、母や妹を寝かした後で、細々こま／＼と認めました遺書かきおき二通、一本はお蘭の許へ、一本は母へ宛て、封目ふうじめを固く致した山三郎、其の翌晩小原山と申す山の原中に出まして粥河圖書と決闘はたしあいを致しまするお話、一寸ちよつと一息吐きまして申上げます。

三十

山三郎が認めました遺書かきおき二通、その一通は母に贈りますので、其の文には粥河圖書は大賊に致して、手下の二百人からある強盜、

其の女房お蘭なる者が我身の大事を知つたと云い、同類が許さんからとて生理いききうめにしたるを山三郎が掘出したるが、今は上総の天神山の松屋に隠かくま匿つてある、此の事に就つて過日より自分も心配致して、粥河圖書が改心の後のちは如何にも貞節なるお蘭の心を察し、故もと々との通り添わして遣りたいと思つて居る処、大胆にもお藤を嫁に呉れという故に銚子屋に於て彼あの如く耻はじしめました、それを遺恨に思つて決闘はたしじよう状を附けたから、己むを得ず明晩小原山に於て同人と果し合を致す、また山三郎の申す事を聞入れて改心致せば宜しいが、左もなければ刺違えて死ぬ、吾が亡ない時はお蘭が自害致すに相違ないから、不便ふびんの者と思おぼしめ召おぼしめしてお蘭に意見を加えてお引取り遊ばして、お藤の姉とも思召しお手元にお置き下さら

ば、わたくしはるか私より遙に優る孝行を致すに相違なし、先立つ不孝は重々相
 濟まんが此の場に及んでは致いたしかた方がない、圖書と刺違えて死しには
 果る覚悟、と細々と書きまして、又一通はお蘭の方へも右の如
 く細々と認めて、封じ目を固くして店の硯箱の上の引ひきだし出に半
 切れや状袋を入れる間へ挿はさんで、母が時々半切や状袋を出すから、
 此処へ入れて置けば屹度目に入ろうと斯様に致し、其の夜は休よん
 で翌日朝船に乗りまして上総の天神山へ参りました。お蘭は山三
 郎の参るを待つて居る所へ、
 山「存外早く帰りました」
 蘭「おやお帰り遊ばしましたか」
 山「はい、暫く自宅うちを明けましたので、母も心配致して手紙をよ

こし、それ故一ちよつと寸立歸つて参りましたが、お前さんの事が氣になつて、何うも私は宅にも居られないひよつとして私が遅く来まわたくしうちして、お前さんに万もしも一の事があつた日には、私が丹誠した事は水の泡になるから取急いで参りましたが、就ては又直ぐ私は歸りまわたくしす、歸るが明日の夕景までには又私が来られ、ば好よし、来られん時は此の中に細かに書いた物がありますが、此れは私の親から讓わたくしられた大事の、今は金入れにしたが、先祖から伝わつて居る守まもり袋ぶくろで、此の中に封じた物が入つて居るから、明夕景までに私がわたくし来なかつたら此の封を切つて読んで下さい、左様すれば細かに事柄が分ります、其の中又お前さんを迎いに参る者が有るまいものでもない、多分夕景迄には屹度来ますが、それ迄は此の書いた物

の封を切つて読んで下さつては困ります、其処そこをどうか確しかとお蘭さん承知して下さつて、必みらず明日みょうにちの晩まで確たしかに待つて、何卒どうかお前さんお自害の処とこは止とまつて下さらんければならん、それだけは山三郎手を突いて頼む、何卒どうぞきつず聞濟んで下さい、お聞濟みかえ、え、お聞濟みかえ」

蘭「はい、有難う存じます、まあ何ういう御縁か存じませんが厚おほしめく思おも召めして下さいますお志は決して反故ほごには致いたしません、明みようにち日ひ お出いでまでは慥たしかに其の品はお預り申して居ります、何うか成なりるたけ明日みょうにちはお早いくお出いでになりますよう」

山「はい、直ぐに来まする心得、此これに少々許ばかり金子があります、是これに添そえて置おきますから何うかお前さん是これで万事宜いいように為なす

つて」

と立ちますから、

蘭「はい、もうお帰りでございますか、左様なれば」

と階子はしごの段まで見送ります。下へ下りる事は出来ない隠れて居る身の上。此方こちらは船へ乗り移ります、虫が知らせるか互たがいに振り返る、其の内に船は岸を離れて帆を揚げる、風は悪いけれども忽ちに船は走りまして浦賀ちやくへ着致しまして、自宅うちへ帰つて引出ひきだしを開けて見ると、まだ遺書かきおきは母の手に入はいらんようだから宜よいと心得、また元のように手紙を引出の間へ入れて、一寸ちよいとそこ其処まで行く振りをして宅うちを出て、西浦賀の陣屋へと急ぎました。其の頃西浦賀の陣屋には山三郎の実の兄が居ります。お高たかは二千五百石で一色宮

内様と仰しやる、血筋でございますけれども、此方は町家に育ちましたから、船問屋で名主役も勤めて居り、目通りは出来ませんが、お兄様という事も出来ず、向でも弟と声を掛ける事も出来んなれども血筋と云うものは仕方が無いもので、今晚もし死すれば兄の顔はこれが見納め、余所ながら暇乞いと心得、西浦賀の蛇畠町の先浜町の処を行くと陣屋のある処、頓て案内を以て目通りを願いたいと云うと、其の頃のお奉行は容易に目通りは出来んが、向も血筋だからして、「苦しゅうないこれへと申せ」と云う。取次は心得まして山三郎をそれへ連れて参ると、今お役済で袴は着けて居りますが座蒲団の上に寛いで居て、其の頃の遠国の奉行は、黒縮緬に葵の紋の羽織を上から二枚ずつ下すつた

もので、今宮内様は御紋附の羽織こいおなんどいろに濃御納戸色の面取めんとりの袴をつけて、前には煙草盆や何かを置き、此方こつちには煎茶の道具があり、側に家来が二人ばかり居ります。山三郎は遙か末席に控えて頭かしらを下げまして、

山「今日こんにちはお目通りを仰せ付けられましたして有難い事でございます」

宮「はい、さア此方こつちへ這入るが宜い、あゝ遠慮なしに此方こつちへ許すから這入れ、何時いつもまア無事で、母も変りはないか、なにか妹いもとも大分だいぶん成人して美しくなつたという噂うわさは聞くが妹いもとはまだ見んが、好よく今日きょうは来たな、丁度用もなし徒然とぜんで居るから幸いで、酒は少しは飲むか、一盞さん取らせよう、これ由次よしじ、奥へ行つてあの菓子

有つたから、あれを多分に母と妹いもとに土産になる様にして遣れ、それから酒の支度をしろ、さア最もつと近く、たばこ、莩も許す、さアく」

山「へいく有難うござります、今日こんにちは山三郎折入つてお目通りを願いたいことがござりましてまか罷り出いでまして、お聞き濟ずみがあれば千万有難く存じます」

三十一

宮「何か頼みたい事が、そうか、何うも其方そちは予々かね／＼人の噂に聞きくに、山三郎という男はあれは妙な男で、幼年の頃から劍術を遣つかつて大分だいぶん武芸を学んで、殊に力が十八人力あるなどという事が

己の耳にもちら／＼入るが、何うだえ本当かえ、ふゝーそれで学問が出来るか不思議だな、併しかし予かねて心得ても居おろうが、力に任せ荒い事を為しないように、此の間組屋敷の若わかざむらい武士源七の腕を折つたというが、あんな事は為しないがよい」

山「相済みませんが、彼あれは三浦三崎の百姓を斬ると申すので、私わたくしも仲へ這入つて事柄を聞きますると、斬る程のことでもないゆえ、猶なお色々と扱あいますると、終しまには私わたくしをも斬ると申すので、致し方なく手を取つて捻ねじりますると、ついがつくり抜けまして」

宮「そんな事を為してはいかんよ、身の為にならんから、妙に強いな、不思議だな、さア此の菓子を食べるが宜よい」

山「有難うございます」

宮「何か頼みか」

山「少々他聞を憚りますから、御近習ごきんじゆの衆をお遠ざけ下さいますれば有難う存じます」

宮「左様か、金吾、由次、少々山三郎が内々頼む事があつて他聞を憚ると云うから、其方そちらへ出て往つて居れ、用があれば手ならを鳴すから、そして酒の支度をしろ」

金「へい」

と兩人ふたりは立ちまする。

宮「さア何ういう密談か」

山「山三郎仔細あつて遠方へ参りますが、三日でも旅と申しますから、人間は老ろうし少しょう不ふ定じようの例ためし、明日あすにも知れんが人の身の上、

殿様のお顔もこれが見納みおさめになるかと、今日こんにちは御暇乞まかに罷り出
ましてござります」

宮「大分だいぶん何か弱い事を云うのう、常の気性にも似合わんようだが、

して其の遠くと云うのは何処ゆへ行くのか、余程遠いかえ」

山「些ちと遠方へ参りますることぞ」

宮「は、ア先は何処だえ、上方かえ」

山「もそつと遠方へ」

宮「ハア何か、九州筋長崎へでも参るか」

山「もそつと遠方へ」

宮「はてね、それでは何処へ、じゃが余り遠方へ行かんが宜よい、

母も老体ではあるし、何処ゆへ行くか」

山「併しかし是非参らなければならん用で、尤も直じきに帰ります心得で、事に依たれば明日みょうにち帰ります」

宮「なにを云うのだ、そんな事を云つては分らん、気になつて成らんが、何ぞはなむけ餞はなむけ別はなむけを遣ろうかの」

山「お餞はなむけ別はなむけを実は頂戴に出ましたので、その餞はなむけ別はなむけは申すも恐入りますが、誰たれも居りませんが、私わたくしは運よが好ければ殿様のお側に居りまして、他たへ養子に参りましても鞍置馬くらおきうまに跨がり、槍を立て歩いて歩ける身の上、不幸にして腹にあるうち、母が石井の家へ帰りまして、私わたくしは町家ちやうかで生立ちまして、それゆえ貴方がお役で御出張になりましたしても、つい向う前に居りながら、お兄あ様にいさまと日々御機嫌を伺うことも出来ず、弟とお言葉を戴くこと

も出来んくらいになつて居る、これも縁切になつて居りますから致し方もございませんが、此の度遠方へ赴きますゆえ、お餞別に「弟、無事で行つてまいれ」という御一言を承われば、山三郎心遺さず勇ましく出立致します、どうか此の儀恐れ入りますがお聞済み下されますよう」

宮「成る程、それはよいが、それは其の方が云わんからつても此方で存じて居る、彼の時はお母様が嫉妬深くつて、其の方の母が家へ帰らんでも宜かつたのを、縁切で帰るといふ訳に成つたのだが、此の方も外に兄弟というものも無いからかう、誠に貴様の行いの正しいのを聞くに附けても頼もしく、蔭ながら喜んで居るので、仮令身分は違おうとも血筋は知れて居るから宜い」

山「有難い事で、それで弟無事で行つて来いと云うお言葉を頂戴致しますれば私は勇んで往つて参ります」

宮「それを云うのかえ」

山「どうか大きな声で一言頂戴致しとうございます」

宮「そんな事を改まって云わんでも宜いが」

山「でございますが、どうか」

宮「困りますねえ何うも、じゃア判然と云うよ、えへん、弟無

事で行つて参れ」

山「は、ア有難う存じます」

と席を下りまして、日頃は猛き山三郎暫くの間頭を上げません。

宮「落涙するか、何か気になる事だな、そう云う事を云われると

何だか遣りとうもないが、止さんか、何う云う事柄を頼まれたか知らんが、かね予て其の方は頼まれては退ひかんとは聞いたが、大抵の事柄は：そ然うくく人の為ばかりしても身でも痛めると宜よくない、母の居る中うちは慎めよ」

山「左様な訳ではございません、就つきましては何うか今一つお餞はなむ別けを」

宮「あゝ何なりとも遣りましょう、まア品物で持つて参つてもいいが、金子を遣ろう」

山「いえ金子は入りません、願ねがくはお乗替のりかの馬を一頭頂戴致したい」

宮「妙なものをねだりますねえ、馬をねえ、えゝ、なにを存じて

居おろうが、お父とつさま様がお逝かくれ去前かからある大白月毛おおしろつぎげの馬、彼あれは歳とを老とつては居るが、癖よのない好よい馬で、あれを遣はらう、荒あく騎のらずに歳とをとつて居るからいたわつて乗のるよう」

宮「はい、道が遠とうござりますから騎のり潰つぶすかも知しれませぬ」

宮「騎のり潰つぶしてはいかんよ、別べになにも云いう事ことはないか…これ／＼金吾」

金「へい」

宮「別当べつたうに申し付けて月毛つきげに蒔ま絵えの鞍くらを置いて、支度しどして陣小屋ちんこゝへ繋つぐよう、山三郎やまざぶろうが乗のつて参まゐるからな、それから酒さけを早く出でせ」

其そののうちお膳ぜんが出まして種いろく々の御馳走ごちそうがある。山三郎やまざぶろうは心こゝろが急せいて居いりますから、言葉寡すくないに暇いとまを告つげて立出たちいでますと、其そのの頃とき

の御奉行様が玄関まで出て町人を送ると云うことはないが、何か
気になると見えまして、

宮「万端気を付けて参れ、早く帰れよ」

山「御機嫌宜しゆう」

と出ますると真まっしろ白な馬が繋いで有ります。

三十二

山三郎は此の馬を見ますると好いい白馬だ、白馬と申しても濁にごり
酒ざけとは違ちがいます、実じつに十寸とさきもある大馬で、これに金梨地きんなしじの蒔
絵の鞍を置き、白と浅黄あさぎの段々の手綱たづなで、講釈などですますと大

してほめ誉る白馬で、同じ白馬でも浅草の寺内しなにある白馬は、彼あれは鯨
 と申して不具かたわだから神仏へ納めものになつたので、本当の白馬は
 青爪でなければならんと申します、鬘しむら肉厚く、頸うなじは鶏とりに似て鬣た
てがみ髪膝を過ぎ、宛さながら竜に異ならず、四十二の旋毛つむじは巻いて脊に
 連なり、毛の色は白藤の白きが如しと講釈の修羅場では読むとい
 う結構な馬に、乗人のりてが乗人ですから、一いっかく角入れてスタくスタ
 くスタく、よく云いますが嘘だそうです、聞きまする
 に馬は乗りたてから駈かけを逐おうと、馬が苛じれていかんそうで、山三
 郎は馬も上手でございますから鞍へひらりと跨またりまして、最初は
 心静かにポカくとだくを乗りまして、陣屋前おおがやから大ヶ谷町を過
 ぎて、鴨居の浦のつきを乗切りまして、此処なんじよらは難所ですが、馬は良

し乗人は上手でほん／＼乗切つて頓て小原山の中央へ参ります
のりて のつき やが なかほど
 と、湯殿山と深彫のした供養塔が有ります、大先達喜樂
ゆどのさん ふかぼり だいせんだつきらくい
 院の建てました物で、風が強く吹く折には倒れそうな見上げる
ん
 様な石塔でございまして、此処は一里四方平原で人家もなければ
へいげん
 ば樹木もない処でございまして。見下すとずうつと上総房州も一ト
みおろ
 眼に見える。尤も四月十五日で青空は一点の雲もなく、月は皎
こう
 々と冴渡り、月の光が波に映る景色というものは実に凄いも
さえわた
 ので、幽に猿島烏帽子島金沢なども見えます。此方は小松の並
かすか こちら
 木で一本も外の樹はありません。真堀の岩上の方から粥河圖書
き いわがみ
 は来るに相違ないと、山三郎は馬を乗り据え、向に眼を注げて居
むこう つ
 ると、遙かに蹄の音がいたします。来たなと思つと粥河は其方へ
ひづめ そちら

現われ出ました。元來圖書は山三郎を嚇おどす気だから、栗毛の馬に鞍を置き、脊割羽織せわりばおりに紺緞子こんどんすに天鷲絨びろうどの深縁ふかべりを取った野袴のばかまに、旧金森の殿様から拝領の備前盛景びぜんもりかげに国俊くにとしの短刀を指添さしぞえにしてとつくと駈けて来る。山三郎は石塔の際へ馬を止めとゞて居る。圖書は山三郎はまだ来きたらんと心得てぱつくと土煙を立て参りますと、傍わきから声を掛けまして、

山「粥河氏かお早うござる」

と云うと、圖書ははつと驚きました。例の曲者くせもの落着き済して、

圖「大分だいぶんお早いな」

山「先程よりお待ち申して、大分お遅うございますな」

圖「はい、宜^よく御出張あつた」

山「はい、あなたも宜^よくお出^{いで}になりました、覚悟を致して来いとの仰せですが、私^{わたくし}は別に覚悟の仕様はありません、唯御出張を待つて貴方のお話を承わろうと存じて居りました」

圖「うん、お前を呼んで問おうと思ふは別の事ではない、銚子屋に於て満座の中で存分の事を云われたが、私^{わし}も粥河圖書で、金森家の大祿を取つた身の上、今は浪人しても町人のお前に板の間へ手を突いて、何うかお前の妹だから呉れろと、私^{わし}が彼^あれ程まで頼むに、心に問え、やることは出来んとお前が云つたが、心に問えとは一向分らん、何ういう訳で呉れられんか其の事を聞かん中^{うち}は粥河圖書此の場は去らん、刀の手前捨置き難いから、さア訳を聞

かして下さい、次第によれば其の儘には捨置かれん」

とぷつりツと母おやゆび指で備前盛景の鯉口を切つて馬足ばそくを詰めまし

た。山三郎は驚く気色もなく、

山「山三郎も男で情なさけを知っているから銚子屋では云いませんが、

強たつて聞かせると仰しやれば云います、お前さんに妹藤いもとをやられん

と云う訳は、只たつた一人の妹いもとだからお前さんの女房にあげて、又生い

埋きうめにされるが憫かわいそう然そうだから」

圖「むう」

と驚きました粥河圖書、思うに此奴こやつは我が悪事を知るばかりで

なく、女房お蘭を生埋にした事まで知っている上は助けて置かれ

んと柄つかに手を掛け、すらりと抜きました。元より覚悟の山三郎は

同じくせきかねもと關兼元無銘の一尺七寸の長脇差を引抜いて双方馬足を進
 めました。山三郎は前ぜん申す劍術の名人で、身構えに少しも隙があ
 りませんから圖書はこれはとて逆も敵かなわんと心得て、卑怯にも鞍の前ま
えわ輪に付けて参つた種が島の短筒に火繩を附けたのを取出して指向さしむ
 けました。山三郎も斯かく有らんと存じて予かねて用意したる種が島の
 筒を同じく取出し、「どつこい此方こつちにも」と鉄砲を附けました、
 すると粥河は面めん色しよくを変えまして、これから果し合しいを為します
 るお話、一寸ちよつと一息吐きまして申し上げます。

三十三

引続きまして、山三郎が圖書と小原山に於て^{であい}出會のお話で、彼^か方^{なた}には同類が沢山ありますから大勢に取^{とり}囲^りれるかと思つて行く^ゆと、案外粥河圖書一人^{にん}で参つて掛合になりましたが山三郎はお前^{まへ}が盜賊だから遣らんとは申しませんが、私^{わし}が妹^{いも}をお前の女房にやつて又^い生^き埋^めにされると憫^{かわい}然^{そう}だからと申しました。その一言で、山三郎は何も彼^かも知り抜いて居ると心得たから、圖書は備前盛景を引抜いて斬ろうと思つたが、相手の身^み構^{がま}に驚きまして、鉄砲を取つて直ぐに山三郎を打殺そうと致したが、山三郎も予^{かね}て用意に鉄砲を鞍の前輪^{まえわ}に着けて来ましたから、互に鉄砲同士となつて^{かな}ぴつたり身構をしましたが、此の時に粥河圖書はとても敵^{かな}わんと心得たと見え、鉄砲をからりつと投げ出し、馬より飛下りて^{くさは}草

原の中へは、アと平伏してしまった。山三郎は氣拔のしたよう
で、

山「さア馬にお乗んなさい、それでは果し合う事が出来ん、併し
此の決はたしあい闘は私の方で望んだわけではござらんから、其方そちらで退
くなら退きも為しようが、早く否いやおう応の返答を承わりたい」

圖「いや実に何とも申そう様ようも無い事で、私わたくしが身の上を残らず御
存じでありながら、銚子屋に於て男じやから情なさけを知つて居るから

云わん、心に問えと仰しやつたは誠に厚おほしめき思召しとも一向存ぜ

ず、此の小原山へお招き申して掛合い、実に圖書の為には、貴公
様は神とも仏とも申そう様もない有難いお方であるを、全く私わたくしの
心得違から、刃物を扱あまつい、剩あまつさえ飛道具を向けましたる段は、重

々恐入った次第で何分にもお許ゆるしを願います、主家改易しゆかの後、心得
 違いを致して賊かしらの頭となり、二百人からの同類を集めて豪家大ごうかおおで
 寺ちらへ押入り、数多あまたの金を奪い、或あるいは追剥おいはぎを致し、又は人の娘
 を勾引かどわかし、実に此の上もない悪事を致したが、最早圖書も天命
のが遁れ難く、貴公様に於て残らず御存じの上からは、遠からずお繩
 にかゝつて家名を穢けがします所の大罪人願わくは貴公様のような
 るお方の手に掛つて相果つれば、手前がこれまでの罪も消え、成
 仏得脱致すでござろう、お手に掛けて只今此の所に於て切つて下
 さるか、又は手前の様な者は切るはお腰の物の穢おほしめれと思召して、
 繩に掛けて御陣屋へお引き下さるか、それは貴公様御所存に任せ
 る、唯たゞ々くこれまでの無礼の段は幾重にもお詫わびを致しまする、御ご

高免こうめん下さるよう」

山「ふん、それじゃアお前さんが重々悪いと云う事をば、それは人間たる以上は御存じであろう、だが、粥河氏、何ともどうもお心得違いの事ではありませんか、元は金森家の重役として大祿をも取った御身分でありながら、昨今此の辺にだいぶ大分押込が這入ったり追剥が出たりして、土地ところの者が一方ならぬ迷惑致すを、貴殿等の御所業とは知らんで有ったが実に驚いた大悪無道だいあくぶどう、私は素わたくしすちよ町人うにんの身の上、馬の上に乗って斯う応対致すに、立派なお身柄でも草原くさはらへ下りて、大地へ頭を摺附けて其の如くお詫なさるが、そこが善と悪との隔へだてで、貴方が今にも御改心なされば山三郎土下座を致して、重々無礼を致したとお詫を申さなければならん身の

上、是よりぶツつり悪事を廃めて、お前さん元の粥河様になつて
 下さい、左様なさる時は不束の妹どころでは無い立派な嫁を届
 かなながら山三郎が媒灼して差上げたく、末永う御懇意に致し
 ますから、何うかすつぱり魂を洗い清めて其の証拠を私に見せて
 下さい、私は貴方を斬る役でもなければ縛つて連れて行く役でも
 無い、唯山三郎の云う事を聞いて改心して下さいれば私に於ても此
 の上なく忝けないことで、俱に喜ばしい訳で、何うか改心して下
 さい」

圖「はゝア、我ながら斯かる悪人を憎いとも思召さず、改心の
 上は媒人になつて、良い嫁を世話して遣らうとまで仰しやるは、
 何ともどうもお情の深いお方、東浦賀で侠客の聞えを取つた山三

郎殿のお妹御いもごとを女房に申受けたいなどと大それたことを申される手前身の上で無いを御存じは無かろうと、実は欺いて貴兄を兄弟に致せば竹ヶ崎に居つても力になると思い、悪事にお引入れ申そうと云う手前の存念でござった、誠に恐入つた事でございます、然るに貴公の親切な仰せを聞いて、我ながら魂を洗い清めたように、只今は手前夢の覚めたようなる心持で、此の上は頭髪あたまを剃そり毀ぼち、墨こもの法衣ころもに身をやつし、他たへ立退たちのきます、手前はこれから立帰り、同類の者へも貴公の思おぼしめ召しを申し聞け、親ある者は親許しゆうへ、主しゆうある者は主しゆう方かたへ立退かせて、盗み取つた金銀其の他の諸道具は、近村の貧乏なる百姓へ遣つかわし、速すみかに竹ヶ崎やを立去ります、これが手前の改心の証拠、何うか恐入りまするが、

みようにち
 明 日 夕 景、手前かくれが隠家まで御尊来下さりますれば有難いこと
 で、申すまでもなくあたま頭髪をそり剃こぼち、墨ころもの法衣を着て、みすぼら
 しい姿で隠家を出ます所をどうか御覧遊ばして下さい、また其の
 折貴公様にお盃を戴いて、心を洗いかえて立退きとうござります
 から、くれ／＼も右の時刻に御尊来下されたし、此の儀をひと偏へ
 に願ひ上げます」

三十四

山「成程、来いと仰しやれば行きゆもしまししょうが、あたま頭髪をあたま剃らん
 でも改心さえすれば宜しい頭ばかりまる円くつても心を改めんでは何なん

にもなりません、お前さんがそうしなければ気が済まんとなれば
 出家にでも何にでもお成りなさい、折角のお頼みだから明日夕景
 までに、お前さんの隠かくれが家は知りませんが、尋ねて行きましよう、
 同類の者は速すみやかに立去らして下さるようにな

圖「お出いで下さるか、承知致しました、実に有難い事で、呉れ／＼もお間違いはありますまいな」

山「いや行くゆと云つたら屹度行きゆます、さア馬にお乗りなさい」
 圖「恐入ります御免を蒙り仰せに随い…然らば明日夕景みょうにちにお目通
 りを致しましょう、必ずお待ち申す」

と馬の口を取りまして、悄しおく々として粥河圖書は真堀口を降り
 まして立去りました。山三郎は何事か知らんが頼まれたからまア

く行つてやろうと、直ぐ馬の首を立直して鴨居山を下りまして
 宅へ帰ろうと思つたが、ふと胸に何か浮んで急に西浦賀の方へ馬
 の首を向けました。頓て参りましたは前々から申し上げました
 西浦賀の女郎屋の弟息子、芸者小兼の情夫 江戸屋半治が兄の
 半五郎という、同所では親分筋、至つて侠氣のある男ですから、
 山三郎も平生から何事も打明けて談合をする男、此の家の門口で
 馬よりひらりと下り、門の脇へ繋ぎました。女郎屋から馬を引
 張つて参る者はありませんが、馬を繋ぐのは珍しい事で、頓て案内
 を云い入れますと主人の半五郎は直ぐ様それへ出て参り、
 半「宜うこそ入らつしやいました、先ずこちらへ、此の程は誠に
 御無沙汰を致しました：よう今日はお野掛かね、遠乗で、大層

白い馬に乗ってお出いでなすつたな」

山「はい、少し内々ないくの話があつて参つたが、此処で話しも出来んが、何処か離はな座敷なれはないか」

半五「へい、これく婆ばあやア、彼あの六畳へ火鉢を持って、茶は好いいのを点いれて、菓子は羊羹があつた、あれを切つて持つて来い、さア此方こちらへ、此処から行ゆかれます」

と庭下駄を穿はいて飛石伝いに庭の離はな座敷なれへ行つて 差さしむ向かいにな
りました。

半五「何か御用でございますか」

山「外の用でもないが、少しお前に内々話したい事があるが、此
処たれは誰きも聞き人は居めえのう」

半五「誰たれも聞人きよては居りません、さて段々貴方にも御心配を掛けました宅うちの半治も、一体女郎屋の弟で廻船問屋のお嬢じょうさん様を女房にするなどは出来ない事で、あなたのお口入であつたればこそ見合までさして下すつたので、有難い事と実むかひに私わたくしも喜んで居たのに、六年前あとの浦賀の祭に小兼と内約が出来たつてとう／＼彼方あちらをお断り、それに小兼も半治もあゝいう負けない氣の奴だから、何と勧めても一つになると騒ぐので、私わたくしも吉崎様へ済まねえから彼の野郎あは懲こらしましたが、外に悪い事もなし、又小兼も足掛二年彼の野郎あを立たてすごしにしたというは、芸者に似合わねえ感心な親切者と思つて居ると、とう／＼女は江戸の家うちを打棄うっちゃつて、態わざ々斯こんな田舎まで尋ねて来て、是非半治の女房にさして呉れろとまでも

云い、其の中吉崎様のお嬢さんは何所へ行つたか行方が知れず、多分死んだらうと云う事になつて、本当の葬式をなさらぬばかり、出た日を命日としておいでなさるくらいだから、済まん事とは知つてるが、奥に二人を隠して置くので、半治も小兼も嬉しがつてなかよ仲好くして居りますが、貴方には済まねえけれども、こりやアちよつと寸御内談だけをして置きます、それに附けても吉崎様のお嬢さんは何うなすつたか分りませんかね」

山「いや、それに就いても種々話があるが、此の浦賀中で私の相談相手というはお前ばかりで、おとこぎ侠氣を見込んでお頼み申してえ事があるが、尤も決して他たに漏れんように、口外してくれちやア困るが、又それを聞いて旦那どうも其れは好よくねえ、斯うしたら

宜よかろう、それは止すが宜いいと云つて止めても困るが、何うだえ止めやアしめえのう」

半五「どんな事だか旦那まア仰しやつて、止めるも止めねえもない、何ですか」

山「その返辞を聞かねえ中うちは話されねえ、何うだ決して止めやアしめえな」

半五「止とめるつて止とめねえとつて私わたくしも男だから云うなといえは口が腐つても云やアしねえ」

山「それは有難い、実は半五郎、斯ういう訳さ」

とこれから山三郎が圖書が悪事の一条から、其の女房お蘭を助けて上総の天神山の松屋に匿かくまって置く事から、外見みえの場所でご

れくはじ耻しめた事から、掛合いに参つて果し状を附けて、今晚粥

河と出合であいをして、それから圖書が降参して、遂に改心して、隠かくれ

家がを退散するといふまでになり、また圖書が頼みに依つて明晩

竹ヶ崎の南山へ乗込んで同類を追おつぱら払つて、この土地を洗い清め

ようといふ我が了簡から一部始終を詳しく話して、

山「という次第で右の通り約束したから明晩は是非とも参るが、

何うも訝いぶかしいは粥河圖書、事に依つたら又己を欺いて多人数たにんずの同

類で取巻いて、飛道具で撃取うちとろうと企たくむかもしれんが、さある時

は止むを得ず圖書を一刀もとの下に斬つて捨て、同類の奴輩やつぱらを追おいは

払らう積りだが、そこは運命で又身に疵きずを受け切死きりじにをするやも

分らんが、そこで貴様に頼みといふは、若もし己が切死をした事を

聞いたら、早速上総の天神山へ駈付けてお蘭に遇い、篤と私の志を述べて、暫く命を存ながらえて、己になり代つて家のお母うちに孝行をして呉れるようにくれ／＼も後々あとくの事を頼む」と委細の訳を話しました。

三十五

半五郎は委細を聞いて驚きました。

半五「どうも飛んだ事で、旦那道理で近辺に盗賊が殖えたと思つたが、こりやア一通りの騒ぎじゃアない、そんな奴がこの近辺に居いられては叶わん、だが旦那こりやアどうも私わしの考えでは何うも

怪しいねえ、お前さん明日の晩竹ヶ崎へ行くのはそりやアお止しなさい、先方には何んな謀計があるかも知れねえ」

山「それく、それを云うのだ、止めるといかなよと云ったを、止めませんというから打明けて話したのだ、なぜ止める」

半五「へい成程、あゝ悪いことを云った、そんな事とは知らず迂^う潤^{つかり}といつたが、旦那お前さん行けば見すく、窀^{おとしあな}穴へ陥^おちるので」

山「陥^おちても宜^いい、止めるなど云つたら止めませんと云うから話したのだ」

半五「左様、悪い事を云ったねえ：何うも是^{こり}やア：あゝ悪い事を云った、悪い事を云いましたねえ、何うも飛んだ事を云った、こ

れ程じゃアねえと思つてうっかり云つたが、何卒旦那どうぞこれだけは
 私わたしの云う事を聞いて、今迄貴方のいう事は背そむかねえが、私わたしも最もう
 五十一になつて、貴方より外に力に思う者はないに、万もしも一の事が
 貴方の身にあつた日にやア此の浦賀に相談する者は一人も無ねえ、
 何事があつても旦那の処へ駈けつけて往ゆくのに、此の浦賀にお前まえ
 さんが居ないと闇だよ、毎日役所のものが威張り廻やつて、動やもす
 ると素破すっぱぬき抜ぬきをしてそりやア騒さわぎだよ、何うぞ此の事は思しい止とま
 っておくんなせえ、こりやア本ほん当とに人助けだから」
 山「それはいかんよ、向うから来てくれと云い、おう行ゆこうと男
 が口外したものを反故ほごには出来ん、一足も退ひく事は出来ん、仮令たとい
 謀はかりごと計ごとがあつても虎の穴へ這入へえらなければ虎の子は獲えられぬか

ら行くよ、貴様も男らしくも無え、決して止めませんと口外して今になつて止めるとは何だ、貴様も西浦賀の半五郎だ、男らしくも無え、止めませんと云つたからにやア止めるな、最う一度止れば絶交する、貴様の顔は再び見ないから然う思え」

半五「こりやアどうも飛んだ事を云つたが、何うも旦那、じやア止め無えから斯うして下さい、野郎共が今二百四五十人も遊んで居るから彼奴等を連れて供をさして遣つて下さい」

山「馬鹿ア云え、そんな尻腰しっこしの弱い事を云つて仕様があるもんか、己も石井山三郎だ、向に大勢居るを怖がつて、供を連れて来たなぞと云われちやア死んでも恥だ、殊にちゃんく切きりあい合あでも始めれば近村を騒がして、それこそお上へ対して恐れ多い事で、

左様^{そう}じゃア無^ねえか、是から行つて圖書と刺違えて多分死ぬが、然^そうすれば今云つたお蘭の身の上は何分頼むぜ、己はもう歸^{けえ}る」

半五「旦那々々まアお待ちなせえく、おやもうお歸りですか」

と云ううち山三郎は詞^{ことば}少なにずうと歸つて仕舞いました。半五郎は頻りに心配して、

半五「こりやア飛んだことが出来た、何うも弱つたな、何うしよう、縁切と云うと屹度縁切だからなア、子分に内^{ないしよ}証で行^ゆこうか知らん、何うしよう、困つた事だな、口外するなと云うから此んな事とは知らねえから」

と独^{ひとりごと}語を云つてる処へ、ばた／＼と廊下を駈けて来てがた

り障子を開けて入る者が有るから、見ると小兼ゆえ^{びつく}恟りして、

半五「なんだ」

小「親分、半治さんの胸を聞いてお呉んなさいよ、何うぞ善いとか悪いとか聞いて下さい、唯手前は厭になつたら帰れつて、何でも宜いから出て行けつて、亀屋のお龜という芸者揚句の、妙齡あげくの、今は娼妓つとめをして居るのを二三度買つて、それを近いうち請出して女房にするから帰れと云うから、何うしても帰る事は出来ません、何うも江戸の姉さん達やお内儀かみさん達にも沢山意見されて、田舎へ行つては半治さんに見捨られる、男と云うものは心の変るものだから其の時は何うすると云われたから、私はそんな事は無いと云い切つて来たのだから、私は今更帰られませんかと云うと、煙管でもつて打つたり叩いたりして辛くつて堪らないから、何卒どうぞ

親方半治さんの胸を聞いて、強^{たつ}て半治さんが嫌^{いや}と云うなら私は海へでも飛込んで死にますから」

半五「困るなアそんなことを云つて、己が今心^{しんぺえ}配^てして居る処へ泣込んで来て、ほんとに困るなア、なに半治が手^て込^こめ^めにすると、なに酔つて居るんだろう」

処へ半治が遣つて来ました。

半五「冗談にも止せよ、手^て前^めそんな事をいうな 憫^{かわい}然^{そう}にの」

半治「云つたつて宜^いい、厭だから厭と云うのだ、初^はめは好^いいと思つたから女房にしようと思つたが六年から経つて見ると好^よく無^くなつたねえ、どうも若^わえ女を女房に持ちたい、亀屋のお龜は真^{ほん}実^ま者^{もの}だからねえ」

半五「止せえ詰らん事を云うな、同じ土地の女郎屋じようろやへ遊びに往

つて、女郎じようろうにはまつて馬鹿くしい、詰らねえ、止せよ」

半治「止セツたつて気に入つたから女房にするのだ」

半五「気に入つたつて然そういくものか、見つともねえ、世間へ済まねえ、了簡しろ」

半治「だつて厭なものは仕方がねえ、厭なものを女房に持てとつて斯こんな無理な話はねえ、左様そうじゃアねえか」

半五「此の野郎大概てえげえにしろ、今更小兼を帰けえすなんぞという事が出来るものか、馬鹿ア云うな、間拔め」

半治「間拔たア何なんだ、ふざけた事を云うな、今江戸屋の半五郎と云われるのア誰のお蔭だ、父親ちやんや母親おつかアがこしらえて是だけの屋

台骨が出来たから、江戸屋の半五郎とも云われるのだ、同じ家へ
生れたからは己が所帯の半分を貰つても宜いんだ、兄貴だと立て、
へえ〜云つてりやア増長しやアがつて、生意気な事ばかりいう
な此の野郎」

半五「おや、此の野郎とはなんだ、呆れた奴だ」

小兼「どうも私は兄さんに濟まないから私が出て往きますよ、も
う兄弟喧嘩は止めて下さいよ」

半五「なに歸らなくつても宜い、何んな事があつても己が歸さね
え、氣でも違やアがつたか、馬鹿野郎、女郎でも何でも勝手な者
を女房にしろ、小兼には己がな立派な処へな、半治に勝つた亭主
を持たせらア、呆れた奴だ、兼公心配するな」

半治「何をぐずぐずして居やアがる、さつさと出て行きアがれ、何だ兄貴が厭に小兼の肩を持ちやアがる、はゝア分つた、こりやアなんだな、兄貴お前は女房めえが死んで六年にもなるから、内々ないく小兼とくつついて居るんだな」

半五「おや此の野郎、ふざけた事を、好いい加減にしやアがれ」と打ちぶました。

半治「おや打ぶつたな」

半五「打ぶつたが何うした、此の野郎、呆れた事を云う、これ外の事とは違ちがうぞ、己はな弟の女房に貰つた女に手を附けるような半五郎と思うか、これ大それたことを云やアがる、これ汝われはな三歳みつの時死んだお母ふくろが己を枕許へ呼んで、兄いやお前はもう立派な人

になつたが、半治はまだ歳がいかねえから、母が死んだ後に二度あと
ぞえ添でも這入つて憎まれ口をきいて虐められると憫かわいそう然そうだから、
 大事にして母に成り代つて丹誠して呉れと云うから、なにお母心つかあ
 配しなさんな、己が受合つたから、父ちやんだつて歳はとつてるし又女
 房を持ちもしめえと云つたら安心してお母は死んだが、汝てめえが独り
 歩きの出来るまでは己は女房も持たずに丹誠して、弟でも小さい
 うちから育つたから子を見たような心持がして、やれこれ云えば
 増長しやアがつて、世間へ顔向けの出来んような事を云やアがつ
 て、腹一杯喰べえくらい酔やアがつて」
 半治「なんだ、聞きたくも無ねえ世迷言よめえごとを、態ざまア見やアがれ」
 半五「おや、態ざまア見ろとはなんだ」

半治 「もう兄貴の顔を見るのも厭だ、兄弟の縁を切つて書附をよこせ」

半五 「なに此の野郎、書附をよこせと、書附も何も入るものか」
半治 「じゃア己が書いてやろう」

と硯箱を持って来て仮名まじりで縁切状を書いた。

半五 「此の野郎書きやアがったか、呆れた奴だ、其の気なら家^{うち}にやア置けねえ、出て行け」

半治 「出て行かなくツてよ」

畳を蹴^{けた}立て、挨拶もせず出て行き掛ると、見兼て其所^{そこ}へ出ましたのはお八重という女郎、其の時分だから検査と云うことがないから梅毒^{かさ}で鼻の障子^{なく}が失なつて、店へも出られないので流し元を

働いておりましたが子供の時分から此の楼うちにおりますので、馴染なじんでは居るし、人情ですから駈出して来て、

八重「半治はん誠めえには前は悪いはりよう、ほれじやア済ふまねえよ、私も此家ほへ来ひているに、ほ前めえがほんな事ほとをひてや親ほやぶん分に済ふまねえよ、小兼ほはねはんひまに今ひまになつて帰へえれつてえ、ほれじやア可愛ははひほうだアへえ」

半治「うるせえや、書附せえ遣りやア、兄きようでえ弟でえじやア無ねえ、さア行くゆのだ」

とずうと立つて行ゆきますから、

小兼「半治さん、お前それじやア」

と小兼は跣足はだしで駈出しながら、半治きあんくくく待まちつてお呉

れよう。と山坂を駈下りて追懸おっかけます。これから小兼が半治に追附おっついて一つのお話に相成りますが、一寸ちよつとと息つきまして又申し上げます。

三十六

引続きまして追々お話も末に相成りました。申し掛けました江戸屋の半治は兄に愛想づかしをいい掛けまして、無理に兄弟の縁を切つて西浦賀の江戸屋を立出たちいでますと、小兼が跣足はだしで谷通坂やんつうざかまで追懸おっかけて参つた処までお聞に入れましたが、茲こゝに真堀の定蓮寺と申す前ぜん申し上げた、お蘭を生埋いきうめに致した寺がございました、

此処の留守居坊主は元と雁田がんだの地藏堂に居りました破戒僧でござ
 います。只今此の寺が焼けて留守居の無いので、頼まれて此の
 寺に居って、尤もらしい顔がんしょく色しよくをして居りますが、夜よに入りま
 すと山寺で人が来ませんから、箱膳の引出から鱻さかなの塩焼や鰹いわしの刺
 身が皿に載って其処そこへ出掛けて、その傍そばの所に軍鶏しやもの切身があつ
 て、小鍋立こなべだてで手酌てしやくでくびりくくと酒を呑んで居ります。処へ台
 所口から、

半治「御免なせえ、え、真ま平つひら御免なせえ、海禪さんお宅うちですか
 え」

海「はい、何方どなたえ、何方でげす」

半「西浦賀の江戸屋の半治ですがちよつと明けておくんなさい」

海「困つたもんだな、何じやしらんが愚僧わしは今寝たがねえ、何うか用があるなら明日あす来て貰いたいものじやがねえ」

半「どうかそんな事を云わずに一寸ちよつと明けておくんなせえ、お願ねげえだが」

海「よう寝附いたがねえ」

半「寝附いた者が口をきく奴があるものか、起きて居るじやアねえか」

海「それは眠りに附いたじやないが床の中へ潜もぐり込んでるので、寒うて起きられんがねえ」

半「寒い時分でも無ねえじやアねえか、冗談じやアねえ胡坐あぐらア掻いて居るじやアねえか」

海「覗いて居やアがらア、困ったねえ、マア待ちなく、今明けるから」

と傍そばにある鱒の塩焼や軍鶏などを経機の引出の中へお仕舞と致しまして、香物鉢こうくぼちと茶碗を載せて前の膳を傍わきへ片寄せて、

海「さア其処そこが開くから土間の方から上りなさい」

半「はい御免なせえ」

と戸を開けて這入ると、上り口は広い板の間で、炉が切つてあつて、自在じざい鉤くすぶに燻つた葉罐はかんが懸つてある。

海「さア此方こちらへ這入んなさい」

半「誠にどうも御無沙汰をしました、何時いつもお達者で結構で」

海「あいお前も相変らずお達者じやが、尤も若いからねえ、時に

お兄あにさんが大分だいぶんお前の事では苦勞する様じやが辛抱さつしやるか」
半「へゝえどうも火の用心と違つてな、さつしやいますとは往いか
ねえので、些ちつとお前めえさんに折入つてお願ねげえがあつて来たのだが、
お前めえさんも知つて居るそれ六年前あとの祭の時、金棒引になつた芸者
の小兼ね」

海「あゝ、うん、あの小兼ねかえ、知つて居るとも、彼あれは慥たしかお
前のなんで、あゝ彼あれは好いい女だ」

半「彼奴あいつをお前めえさんが何うかして取持つて貰いてえと、いうよう
な事を、西浦賀わげの若わえ者に頼んだ事が有るだろう」

海「怪けしからん事を、出家の身の上で其の様な事を、誰たれがそんな
ことを云うたか愚僧わしは一向覚えはないで」

半「そんな事を云つてもいきません、実は彼あれは不思議な訳で私わっちの
 女房にするような訳になつた処が、兄貴は彼の通り物堅いので、
 吉崎様へ義理が立たねえの、新井町の石井様に済まねえのといつ
 て、私わっちはどうく勘当となつて、仕方が無ねえから江戸へ往つて小
 兼の処に足掛二年も燻くすぶつて居たが、彼奴あいつも私わっちにやア大分実をつ
 くして呉れたので、兄貴も余あんまり義理が悪いから女房にしろという
 事になつて、今小兼は出て来て家うちに居るのだがね、妙なもんで六
 年前あとは彼奴あいつも好いい女だつたが、此の頃はこう小皺しんぞが寄つてきて、
 年を老とつた新造しんぞの顔は怖おつかねえもので、何だか見るのも厭いとになつ
 たが、それとは違つて亀屋かめやの暖簾のれん附つきのお龜かめはね、此奴こいつは一寸ちよつと
 婀娜あだつぼい女で、此奴こいつと私わっちは約束やくそくして年ねんの明けるも近ちけえから此奴こいつを

女房にしようとした処が、それを嫉ねたみやアがつて小兼めがぎやア
 く云つて面倒臭くつて成らねえのに、兄貴も彼奴あいつを變おつに鼻はな頂うし
 て、あゝのこうのと云つて実に七面めんどくせ倒臭えから兄貴と二ツ三ツ
 云合つた所が、兄貴め腹ア立ちやアがつて、見てお呉わんなせえ私わち
 の月さかい代の処を撲ぶつ切りやアがつて此の通り疵きずがある、何なんほ兄き
 弟えでも余ありな事を為しやアがるから、最もう兄貴でも何でもねえ、
 縁切だつて書附を放りつけて出て来たら、小兼め、後あとから追掛おつか
 けて来やアがつて仕方がねえ、扨よんどころなく大津の銚子屋へ遁にげ込んで見
 ると、まだ二三人も客が居るに彼奴あいつがぎやアく、狂きちげ人のように
 なつて、私わちの胸倉ア取つて騒ぐから、何でも騙だますより外アねえと、
 此処じゃア話が出来ねえ、真堀の定蓮寺に海禪さんが留守居をし

て独りで居るから彼所あそこへ行つて炉はたの傍はたに己が寝て居るから知れねえように中へ這入れ、左様そうすれば篤とつくり寝物語いひごとにしてやろうと漸ようようだまうだまわつちわつち々欺うだまして私は一足先へ来たが、もう今に彼奴あいつめ来るに違ちがえねえ、処で頼みというのアお前めえさん何うぞ私わつちの積つりで手拭てぬぐいを被おつて頼冠たのむかりをして坊主頭ぼうしうを隠かくして、床をとつて寝て居て、来たらお前めえさんが床の中から一寸ちよつとこう手か何か握にぎつて、首くびつ玉たまへ手を掛かけておくんさせえ、処へがらりつと唐紙からしを明あけて私わつちが飛と出す、さア太ふてえ奴こだ、只置くものか、外そとに男おとこもあろうに法衣ころもを着きた出家しゆと斯こんな事ことを為しやアがつて太ふてえあま魔まだ、さア何うするか見ろ」

海「それは可愛あまそうだ」

半「可愛あまそうも糞くそもあるものか、さア友達ともだちに顔向かほむけが出来できねえ、

覚悟しろ、だが命は助ける、其の代り手前を横須賀へ女郎に陥め
 て、己もそれだけ友達に顔向けの出来るようにしなければならぬ
 え、覚悟しろ此の坊主太え奴と、まア斯ういう訳になるのだ」
 海「苛い事を云うなア、呆れて物が云われん、ようまア考えて見
 なされ愚僧を何じやと思つて、愚僧は袈裟法衣を着る出家ではな
 いか、仮令留守居でも真堀の定蓮寺で、今は破れても旧は大寺じ
 や、此の寺の留守居をする出家を捉まえてそれに邪淫の戒を犯せ
 と云う、そないな事があるうかい、頼むに事を欠いてまア呆れた、
 そして罪な事じゃないかい、其様に迄惚れて女房になりたいとい
 う、お前も得心の上で田舎の此の浦賀くんだりへ呼寄せながら、今
 更厭きた、家へ帰すに手がなにとつて、まア云わば相對間男

して罪を被せて、女郎に横須賀へ売るなぞと、其の様な事を云われた義理かい、呆れ返つてもう物が云われん、さアくさつさと歸つて下さい、愚僧は其様な事は聞くのも厭じゃ」

三十七

半治「そんな事は云わずと遣つてくんねえな」

海「出来んと云つたら、往んで下さい、阿呆な事を、人情じやから愚僧は許すが表おもてむき面おもてむきになれば只は許さんぜ、何処までも届け出ますじや、出家という者はな、お前なぞは分らんから云つて聞かすが、誰も知つて居る五戒たもを持つと云うじや、これは俗には出

来け悪いものじゃ、其のうちちゆうとうかい偷盗戒いといつて仮にも盗みをする
 事は許さん、塵一つでも盗めないじゃ、殊に又邪淫の一戒とい
 て此れを破れば魔界へ落るというくらいの大事なものじゃ、それ
 に酒を飲むことが出来でん、飲おんじゆ酒の戒は文珠経にも出てあるじゃ、
 宜ええか、それに妄語戒といつて嘘をつくことは出来でん、えゝか、
 それに虫けら一ツでも命を取ることは出来でん、殺生戒といつてな、
 それはくで出来けにくいには違ちがひない、喰たい度たいものも能よう喰くわず、
 飲み度い酒も能よう飲のまず、愛おなごすべき女子おなごも愛あいさんで慎しんんでいる
 からこそ、方丈様とかお出家様とか云いわれる身の上となるじゃ、
 それに向むかつてどうも馴な合間男せいなどゝ、なんぼう物の分わらんで
 も程ほどがありますわ、往いんで下ください」

半治「成程、こいつア何うも済まなかつたね、したがね、お前めえさんなんぞはそんな事は無ねえがね、中には道楽な坊主があるねえ、此こねえだ間も亀屋へ往つて浮かれています、彼楼あすこのおすみという二十四五の、一寸小意気な女があるが、大層粋な声ができるから、其の座敷そつを窃と覗いて見ると、客の坊主がおすみの部屋着を着て、坊主頭に鉢巻をして柱に倚よつ掛つて大胡坐おおあぐらをかいて、前にあるのア皆みんなな腥なまぐさ物、鯛の浜焼なぞを取寄せて、それに軍鶏しやんぞく杯はを喰つて、おすみに自墮じだら落らけやアがつて、爪つめ弾びきで端唄はうたか何かアお経声うなで呻うなつていたが、海禪さん其の坊主はお前めえによく似ていたぜ」

海「あゝ彼あれを見たか」

半「見たかも無ねえもんだ」

海「苛えらい事を知っているな、困ったな、好えいわ知られた上は是非がないが、あれは一寸ちよつとその只ほんの氣晴しに女子おなごを愛するので、楽しんで淫せずでな」

半「旨い事を云つてゐるぜ、飲酒戒なんぞといつても此所こゝに酒があるじやア無ねえか」

海「それは仕方がない、好きじやから」

半「おや／＼此処に魚の骨が、お前めえの前にある竹の皮かわづゝみ包は軍

鶏かい、それは旨いね、煮なせえな」

海「あゝ斯う目付めつかつてはもう仕方がねえ、他人ひとには云うなえ」

半「云やアしねえ、其の代り打明けていった今の話は聞いて呉んなせえ」

海「実はなア六年あとの祭のとき、小兼が若衆頭で裁附とやらいうものを穿はいて、金棒曳かなぼうひきになつて、肌を脱いで、襦袢の袖が幾つも重なつて、其の美しいこと何とも彼かんともいえなかつた、愚僧わしは其の時ぞつこん惚込んだが、何をいうにも坊主の身の上、又お前という色男があるから諦めて居たが、けれども実に彼あのような女ア無いなア、あんな好ええ女をお前何んで厭になつたのじや」

半「何だつて外わに若ええのが出来たからさ、お願ねえだ己がという事を聞いてくれ」

海「お前本当に女郎に売る気かえ」

半「そうよ」

海「女郎に売る気なら愚僧わしにくれんかい」

半「お前めえが貰もらつてくれ、ば実まことに有あがたい、それに一と晩だきねでも抱だ寝ねをした女めだから実まことは女郎ぢやうぢやうに売うりたくも無なえのよ、お前めえが彼あいつ奴やつを留とど守居まもりにしてくれりやア重ちやうじやう 畳たただ」

海「そりやア愚僧わしも願ねがつたり叶かなつたりじや、これから衣えの洗濯せんたくでもして貰もらつたり、綻ほころびでも縫ぬうてくれ、ば実まことに有あ難がたい、これまでは何をなにするにも皆みなな他ほかへ出ですものじやから銭ぜにが入いつてどうも叶かなわんが、左様そうなれば万ま事ごとにつけ都合あつが好ええじや、お前めえ、ほんまに世よ話わして呉くれれようか」

半「くれるよ、狂言きやうげんの筋すぢが私わちが殺ころして仕舞しうというのを、お前めえが仲なへ入いつてそんな事ことを云いわずと助たすけてくれ、愚僧おれが何なにの様ようにもししようから女めを愚僧わしにくれないかと、斯かうお前めえがいうのよ、其そのの代た

り多分のことは出来んが、金を出すからといって二十両金を出すのだ」

海「それは些ちと困るね、金はないが」

半「そりやア金は己が出すよ」

海「それじゃア宜いい、うん、それから」

半「それから其の代り初めは嚇おどして縛るよ」

海「縛るうー」

半「そうよ、縛らなけりやア成らねえ、お前めえを縛って」

海「小兼は」

半「彼奴あいつも縛るのよそれから台所に出刃庖丁か何か有るだろう、

其奴そいつを持ってさア八やつつにするぞと云って」

海「寺の出刃は光らん、真赤まっかに錆びてるぜ」

半「只振　すばかり宜いいや、驚くだろう畳へ突つ挿さすから」

海「畳へは通らんぜ」

半「じゃア畳の縁へりの間へでも挿すから宜いい」

海「危ない狂言じやな、うんそれから」

半「殺すといったら小兼が助けてくれというに違ちがえねえ、すると

お前めえが命ばかりは助けて、何どのようにも致して江戸へ帰す様にす

るからというのよ、そこで金を出す、私わっちが受取る、書附を書く、

それに縁切にして私わっちは出て行って仕舞うのよ、其あとの後で小兼がお

前めえに抱かれて、お前めえの大黒様になるのだよ」

海「はゝアそれは有難い、思い掛けない、何だかもうぞくぞくし

て来た」

半「じゃア筆だの墨だの宜いか、じゃア坊主頭に手拭を被つて斯うして居るのよ、宜いか」

海「宜えわ」

半「竹ヶ崎南山の粥河さんがお蘭さんを生埋いきうめにしたろう」

海「うんにや知らん」

半「いかんよ恍惚とぼちやアいかんよ、知っているよ」

海「知つて居るつたつて己おらア知らんよ」

半「知らねえで、じゃア、何ういう訳で石井の妹を粥河へ縁付ける橋渡しをしたか」

海「あれは西浦賀の浄善寺へ、粥河様が法談を聞きに行つて、お

藤さんを、見て貰い度たいというからで」

半「やつぱり世話ちゆうとうかいしたので、時々 偷盜戒ちゆうとうかいの提灯持をするね」

海「なんじや」

半「いけないよ、種が上つて居るからいけないよ、彼あれだけの山や田地を買い金を持って居るのも皆みんなな盗んだのに氣の附かねえ奴がある者か、手下が二百人も有るからね」

海「何じやか愚僧わしは知らんがなア」

半「そんな事を云つてもいかんよ、悪事を平氣な泥坊とはいいな
がら、目を眩まわした儘なりお蘭さんを此の本堂の下の石室いしむろの中へ生理いきうめ
にしたね」

海「これく馬鹿な事をいうな」

半「いふなつたつて種が上つて居るからね」
海「どうしてそれを知つて居る」

三十八

半治「どうしたつて蛇じやが沼へびで蛇とを捕るまで知つて居るのだ、すっかり種が上つているのだ私わっちも今ア兄貴かぶを被つて、長い浮世みじけに短みじえ命、うめえものを沢山喰つて、為してい放題しを為してえわさ、左様そうじやアねえか、お前めえさん後生ひきつだ手紙を一本書いて粥河様へ紹介ひきつけてお呉みんなせえ、西浦賀の江戸屋半治という女郎屋の弟だが、餓鬼みじようの時分から身みじよう性が悪くつて随分お役に立つものだと云つて手紙

をお前めえさんが書いてくれ、ば宜いい、その手紙を書いてお呉めえんなせ

え」

海「止よしなよ、好んで悪事の仲間へ這入る奴があるものか」

半「そんな事をいわねえで、お前めえさんが行くのじゃアなし宜いいじやアねえか、いう事を肯きかねえと種を破わるよ」

海「全くか」

半「全くとつて悪事に共に荷担すれば素そっくび首の飛ぶ仕事じゃアねえか」

海「うん、左様そう了簡うを極めたら後あとで書いて遣せろう」

半「先に書いてくんねえな」

海「後あとでも好よかろう」

半「そんな事をいわずに、気が変るといけねえから書いてくんねえ、その代り小兼を女房に持たせるのだ」

海「そんなら書いて」

と海禪は硯箱をとつて半治の身性みじょうを書いて、これくと紹ひきつ介けじょう状じょうを認め、表書うわがきをいたしまして、

海「さア」

半「有ありがて難え、成程これを持って行いけば大丈夫だ、時に彼あすこ処へ夜へえ這入るには何処から這入へえるか隠れて出這入でへえりする処は何処だえ」

海「彼あすこ処の諏訪様の鎮守の社の裏に一段高い土手がある、其の下に石で拵こぎえた水門口のような処がある、彼あすこ処の下へずうと手を入れてぐうーとこう当てると、人差指の当る程の石の凹くぼみがある、

其所へ中指と人差指で下へ押すとばちんと弾けて中へ這入る所があるわい」

半「違えねえ、そうく彼処は溝か何かで水でも流れる所と思つて居た、おや足音が聞えるぜ、さアく頬被をしねえ、頭が出るといけねえから」

と半治は懐中から手拭を出して被せる、其のうち床を出して其の上へごろりつと海禪坊主横になりました。半治は納戸へ這入つてぴったり襖を閉て切りますと真闇になりました。暫く経つとばた／＼と草履でも穿いて来ましたか足音が致します。土間口の戸に手を掛けて、

小兼「半治さん此所を開けても宜いのかえ」

と漸々よう／＼上総戸かずさどを明けて忍び足で中へ這入りまして、板の間から小兼は上りまして、手探りで探り寄ると、敷布団に手が障りましたから、ぴったり枕元へ坐りまして、

小兼「一寸半治さんちよつと、お前は本当に愛想もこそも尽きた人だよ、お前のような不人情な人と知らず私は欺だまされて斯んな知らない土地へ来て耻ツかきな、今更江戸へも歸られず、お前に見捨られるよりは海へでも飛込んで死ぬ覚悟で居ますから、私が命を捨る代りにおめ／＼と彼あのお龜という女と夫婦にして置かないよ」

海禪は小さい声で「宜えいから此方こつちへ這入へれよ」

小兼「何をぐず／＼いうのだえ、すっぱりお前の性根すわの据すわつた挨拶しておくれな、挨拶次第で私は只は置かないよ」

と懐中からすうと取出しまするは剃刀かみそり二挺で、これを合して
手拭まいで巻まて手に持つて、

兼「さア挨拶をお聞かせよ」

海禪は又小さい声で「挨拶するから此方こつちへ這入へれよ」何どんな声
で云つても訛なまりが違いますから露顕ろけんしそうなものだが、そこは夢中
で小兼が問掛けると、半治は一間ひとまから飛出ひしまして、

半「さア此奴こいつらア太ふてえ奴だ」

兼「お前は其処そこに居たんだね」

半「斯ういう事も有ろうかと思つて居た、さア坊主太ふてえ奴だ、手て
前めえは衣えを着る身みで斯んな事をしやアがつて太ふてえ奴だ」

海「愚僧わしは何も覚えはない」

半「無^ねえも糞もあるものか、己の女房を引摺込んだは汝^{うぬ}了簡があ
ろう、さア小兼覚悟しろ」

兼「私はお前と思つて」

半「この畜生めら、太^{ふて}え奴だ」

と云いながら傍^{そば}にあつた丸^{まる}紘^{ぐけ}を取つて海禪坊主をぐるく巻
に縛るから、

海「痛^{いて}えな、本当に縛るのか、苛^{えら}いな、どうも」

半「じたばたしやアがるな、覚悟しろ」

海「縛^えらんでも宜^ええが」

半「なんでえ覚えて居やアがれ」

海「どうしても縛るか」

半「小兼、手前も縛るが些と了簡がある、さア蠟燭があるから手燭をとつて本堂へ灯を持って来い、やい坊主、さア来い」

海「これくゝ何をする」

半「何も鮓もあるものか、さア一緒に往け」

とずうと本堂の方へ引摺つて行きまして、居間から直ぐ傍の本堂の前の畳を二畳上げて、揚板を払つて明けるから海禪驚きまして、

海「其処を明けてはならん」

半「此の中へお蘭さんを生理にしやアがつて」

と固より一旦明けてありますから直き明きました。

海「其処を明けてはならんと云うに」

半「成らんも成るもあるものか、能くもお蘭さんを生埋にしやアがったな、此の坊主、太え奴だ、お蘭さんの代りに此の中へ這入れ、間拔めが」

とずるく引摺るが、海禪は縛られて居るから動くことも何も出来ない。

海「これく何を」

というばかり、小兼も手伝つて中へ入れる。

兼「此の海禪坊主め、太い奴だ、お嬢さんを生埋にして」

海「そんな事をいっても此処にはお蘭さんは居ねえ」

半「居るもんかい、天神山に居るわい、さア小兼来い」

と海禪を穴の中へ押込んで、上から石蓋を整然として、ずう

と出て行きゆました。海禪坊主は好いい面の皮だ、天罰とは云いいながらとう／＼穴の中へ封じ殺されるように相成りました。

三十九

此方こちらはお話ふたは二派になりました、竹ヶ崎南山の粥河が賊寨ぞくさいでは、かの夜よ（山三郎と果し合の夜）同類の者一同は寄集り、ずうっと居並んで居ります。前の方にも側わきの方にも一杯でございます。床の間の処へりとりに縁取袴へりとりばかまを穿き、打割羽織ぶつさきばおりを着て腕を組んで頻りに考そえて居るのが粥河圖書で、傍そばに居る千島禮三が、禮「大夫如何成たいふいかゞされました、お帰りになつた後のち、種々いろく御様子ごようしを伺

つても一言のお答えもなく、只考えてばかり入らつしやるが、今晚既に小原山へお出いでの折お供して参ろうと申したを、いや供は入らんと仰しやるから、心配しながら皆々ひか扣えて居ったが、お帰り有つてもとんとお話がないが、何ういう訳ですか、甚だ心配で、山三郎は我々の悪事でも存じて居りますかな」

圖「何も彼も彼かは残らず存じて居おる、女房お蘭を真堀の定蓮寺へ生いきうめ埋に致した事も彼は存じて居おる」

禮「へゝえ一体彼はなんではございませんか、浦賀奉行に縁故ちなみがあるどちらりつと聞きましたが、探索方でも致して居りますかな」
圖「いやゝ彼はなかく上へへつち誂つちつて名を売つて男になろうという卑劣な奴でない何うも彼奴あいつの魂には驚いた」

禮「彼は小原山へ参りましたか」

圖「参つたとも、先へ参つて居つた」

禮「ふーん度胸の好い奴で、一人、ふーん併ししか貴方が乗馬じょうばで彼は驚きましたらう」

圖「ところが先方も乗馬うまで」

禮「へえー、馬の乗り様を心得て居りましたかな」

圖「馬は私わしよりは余程上手に乗る、蒔絵の鞍に月毛のたくましい馬に跨またがって、馬足を止めてばそく小原山の中央に立つて居た時は、実際にどうも敵ながらも、天晴あつぱれの武者振で中々面おもての向け様も無かつた」

禮「ふーん、はてな、そこで貴方が銚子屋に於ての無礼の次第を

お問いなすつて」

圖「私わしも其の無礼を問掛けて、何故妹なにゆえをくれられんかと云うと、そこは彼奴きやつ男で、盜賊どろぼうだから遣らんとは云わず、可愛い、妹だから貴公の女房に遣つて又生埋いきうめにされるが不憫じゃからといって、悪事を云わず、実にどうも感服致した」

禮「それを知つた上からは助けては置かれませんか」

圖「尤も助けて置かれんから太刀の柄に手を掛けて馬を進めると、山三郎も柄つかに手をかけじりくと寄つたが中々隙はない」

禮「成る程、彼奴きやつは劍術も余程出来まするか」

圖「いや私わしよりは余程劍道は上だな」

禮「ふーん、残念ですな、なれども貴方は飛道具を持って入らつ

しやつたから」

圖「馬の鞍へ種が島を附けて行つたから、打落そうと思つたら、
先方むこうもどつこい此方こっちにもと小筒を出した時は実にどうも驚いたよ」
禮「成程々々、ふうーん」

圖「仕方がないから馬から飛下りて、これまでの悪事の段々何も
彼かも知られた上からは貴公の手に掛つて死ぬか、左もなくば繩打
つて八州に引渡せと云つたら、私わしは繩を取る役人でないから縛る
ことは出来ん、改心すれば私わしが妹よりは優まさつた女房を持たせよう、
私わしが媒人なこうどになつて生涯親しく交際つきあおうじやないかと、実に情なさけの
辞ことばで中々感心致したな、私わしもそこで眞実改心する氣になつて、こ
れより頭髪あたまを剃りこぼち、麻の衣を着て鼠色の頭陀ずだを掛け、行脚

の僧になつて飛驒の高山へ立越えると誓つたが、此処こゝに居る銘々
 も何卒なにとぞ心を改めて山三郎の其の厚い心を無にしない様に、主しゅうある
 ものは主しゅう方かたへ、親あるものは親の方ほうへ帰参して、これから正
 しい道を歩いて真人間になつてください、あゝどうも実に弱つた」
 禮「ふむーん、それじゃア貴方いよく愈々出家をなさるのか」
 圖「はい、明夕景みように何卒吾なにとぞが隠れ家へ御出ごしゅつで下さればお別れの酒さけ
かざき盃さきを頂かざきいて、臟腑くだを洗い清めて山を下くだりたい、坊主になつた姿
 を見て貴方喜んで下さい、我等もお顔を見て発たちたいと云つたら、
おとこ侠客おとこじゃなア、明日夕景あすから必ず参ると斯う云つた、明日夕景山
 三郎が参るから其れ迄こゝろに剃髪して法衣ころもを着る心底こゝろじゃ」
 禮「ふむー」

圖「さア皆みんなは何うかな、改心して堅気な者になるか」

禮「皆みんなも聞いたか、大夫たいふはお覚悟の御心底だが、どうだい」

手下「大夫が御改心なら仕方がねえ、山を下りようか」「いや己は今更ぬすつと盗人を廃やめるのは厭だ」

と大勢おほしごたく／＼相談して居りますと、千島は、

禮「大夫わたくし、私は此の山は動かねえ、私わたくしも千島禮三で、仮令たと相手が

強いと云つても多寡たかの知れた素町人すちようじん、此処へ来ると言うが幸い、

どうせ細つた私わしが首だ、山三郎と刺違えて死ぬ分の事、又首尾好よ

く山三郎を仕止めれば此の山は同類を集めて、毒を喰くらわば皿まで

舐ねれで、飽くまでも遣り通します、貴方それでは余り尻腰しっこしの無ね

えというもんだ、私わたしは否いやだ、貴方その御了簡なら何処ゆへ行くとも

勝手になさい」

圖「汝てめえは何うあつても改心は致さんか」

禮「改心しても最もう身動きも出来ん程悪事をして、何どの道お上かみの

手に掛つて素そつくび首はねを刎られる身の上、よしんば大夫が今坊主にな

つても、粥河圖書が在俗の時分是々の悪事があるといえ、法衣ころも

の上から繩に掛るは極つて居る、今改心しても駄目ですぜ、やい

皆みんなはどうだい、山三郎と刺違えて死ぬ心底か、皆みんなは何うだい」

同類「こりやア千島さんの云うのが尤もだ、私わしらもお前さまと同

意で、遣るなれば共々飽く迄も遣りましょう」

圖「ふん左様さようか、そう度胸すわが据つたら宜いい、そうなら話すが実は

己も衣を着て飛驒の高山へ行くと云つたは嘘だ、明日山三郎あすを欺

き遂おほせて此の山へ引摺込んで、鬪なぶり殺ころしにして遣ろうという謀計ぼうけいが
 胸むねに浮んだから、今夜空泣そらなきして改心の体ていを見せたのだが流石さすがは
 町人、智慧は足りねえ、そんなら行つて見届けてやろうと高慢振
 つて吐ぬかしたが、弥々いよいよ明日の夕来た時は寄つてたかつて腕足を踏ふ
んじば縛つて、素っ裸にして頭の毛を一本々々引抜いて、其の上で五
 分だめしにしなければ腹が癒えねえ」
 禮「そいつア面白れえ、大夫が其の了簡わしらなら私等は十分に働きま
 す」

と猶種々いろいろ明日の手筈しめを謀し合せて居りますと、忍び足で来た江
 戸屋半治が縁側から、

半治「御免なせえ」

禮「誰か」

半「へえ私わっちで西浦賀の半治という者で、粥河様のお宅は此方こちらで」

禮「肝きもを潰した、何処から這入った」

半「縁側の戸が開いて居たから其処そこから這入へえつて、大層大勢てえそう様

で、お賑にぎやかで」

禮「怪けしからん奴だ、何処から這入りやアがった、締しまりある場所

を這入りやアがつて、門でも乗越えて這入ったか、他に這入れる

訳はねえが、此奴こいつ、手前賊てめえだな、いや賊だ、手前盜賊てめえに違いある

めえ」

四十

半治「冗談いっちゃアいけねえ、賊はお前さんたちだ、私は西浦賀の女郎屋の半治という者で、孩児の時分から身性が悪くつて、たびく諸方に燻ぶつて居て、野天博奕を引攫い又ちよつくらもち見た様な事も度々遣つて、随分悪い事の方にやアお役に立つ人間だから真堀の海禪さんに此方へ紹介してくれといつて手紙を書いて貰つたから、是を読んで見ておくんなせえ」

禮「妙な奴だな、大夫これは海禪の書面で、むゝなにく」

と千島は海禪の手紙を読下して居りますと、圖書はじろりつと半治を睨め付けて、

圖「これ手前は江戸屋半治というか、手前は東浦賀の石井山三郎

には恩分おんぶんを受けて居る身の上だな、手前これへ山三郎の犬になつて来たな」

半「冗談いっちゃアいけねえ犬なんてえ」

圖「いや犬になつて来た此の書面は海禪坊主の書いた書面でも有ろうけれど、どうも手前は訝いぶかしい、これくこいつ此奴たゞを縛つてな糺して見ろ」

半「これくこいつ冗談いっちゃアいけねえ、糺しても何にもねえ、詰らねえ事をいっちゃアいけねえ、一体海禪さんが此の手紙を私わっちに書いてくれたにやア訳があるので、海禪さんが此の手紙を書いたのア、なんです、私わっちは一体小兼という旦那も御存じの江戸の芳町の芸者ね、彼れあと夫婦約束して女房にしようと思つたが、此の頃

変に厭になつて何うかして江戸へ帰けえそうと思つて手段てだてをしたが、
 小兼ねわっちおつめぎやア〜狂きちげえ人の様になつて私わっちを殺すつて追掛おっかけるのさ、
 私わっちおつも怖かねえから真堀の定蓮寺へ逃込んで漸ようよう々の事で助かつたが
うち家を出る時ア兄貴と喧嘩うちアして兄きようでえ弟の縁を切る、二年越も世
 話になつた女と一緒になるも厭になつて、まごつき出した日にや
 ア、何うせ此の世にやア望みは無ねえ、旨うめえものでも沢山たんとくら喰つて、
 面白い思しいをして太く短かく生しやうげえ涯しを楽をに暮して、縛縛られ、ば
 百年目、此の粗末そつくびな素首すくびを飛しばして帳ちやうけし消しをして貰つかうばかり、
 お役に立つか立たねえか知らねえが、まア遣つかつて見ておくんなせ
 え、お願ねげえだから」

圖「手前の申す事は採とりあ上げん、手前は山三郎の犬に相違ない」

半「縁側で聞けばお前さん方、山三郎をいけどり生擒にするなどという
 が、それは駄目ですぜ、何故なりやア彼奴あいつは滅法力がある、十八
 人力あると云いまさア、浦賀中で聞いて御覧なさい、劍術も随分
 上手で三十人位は一緒に掛つてもポン／＼遣られて、逆とても寄附く
 事は出来んが、そこは私わっちが孩児がきの時分から気性を知抜いて居るか
 ら、彼奴あいつを欺だまかす事ア訳はねえ、今迄も其の術てで無闇に金銭ぜにを遣
 わせたが、彼奴あいつには一寸ちよつとした呼吸のおいやり方があるので只で
 もいかん、妙においやり方がある、早く云やア多勢おおぜいで奉たてまつつて一
 杯飲ませる、酒の中へ麻酔薬しびれぐすりを入れて飲ませるので、これを飲
 ませれば身体が利かん、此処にはお医者もお出いででしようから毒酒
 を調合してお片附けなさえ、それも初めからでは何うして中々取と

ツツ
 付けねえ、ぽんく遣られる、彼奴あいつを瞞だます事は半治は上手で」

圖「左様なことを云つても己は用いん、成程小兼は存じて居るが
 手前とは一方ならぬ馴染の中で、それで今更捨てるなどとは何う
 してく真に受けられん」

半「いゝえ本當で、何なんのつけに嘘などを吐つきますものか、そりや
 ア海禪さんも証拠人で」

と云い争つて居る所へ、縁側から駈上つて来た小兼は、帯もず
 るく髪振り乱して片手には剃かみそり刀を持って、顔色を変え、

兼「さア半治さん此処へ出なさい、呆れ返つて物が云えない、お
 前のお蔭で海禪さんにまで瞞だまされて、さアもう許さない、お前を
 殺して私も死ぬから此方こつちへお出で」

半「やア〜来やアがったな、何処から這入へえった、此奴こいつめが」

兼「何処から来ても好いい、さア女の一念だ、誰れでも止めりやア叩たたツ切きつてしままう、さア悪あく性しょう男おとこ此方こつちへ来きい」

半「これさ好いい加減かへんにふざけろえ、まア危あねえ、そんな刃物やいばを持もつて、これ人様ひとさまの前まへだ、まア此方こつちへ来きねえ」

と半治は立廻たちまわりながら小兼の油断あせを見済みまして剃刀かみばさみを叩たたき落おし、手早てはやく搔取かいとりて、

半「さア、もう大丈夫だいじゆうだ、此この阿魔女あまつちよめが」

といきなり髻たぶさを手に引攪ひつつかんで二つ三つ撲なぐりつけ、それから其処そこらを引摺ひり廻まわして、ひい〜泣なく奴やつを打ぶつたり蹴けつたりして、帯おびを取とつてぐる〜巻まにし、繩なわを持もつて来きて、垣根かきねの傍わきの榎えのきの大木おおい

に縛り付けて、其処にある棒を拾ってぴし〜打ちますと、

兼「さア殺せ〜、殺せば汝幽霊おのれになつて喰殺すぞ」

と金切声を挙げて泣き叫ぶのを、

半「なアんの汝うぬ、殺せも何もあるものか、幽霊にでも何んでも勝手になれ」

とぴしやり〜と打ちますから、

圖「まあ〜静かにいたせ、どうも酷い奴だひど、手前ほんとうに殺す気か」

半「へい」

圖「成程手前は酷い奴だ、全く手前は同類になりたいか」

半「へい、なりてえから願うんです」

圖「本心か」

半「本心の何のとおつてお前さんも疑ぐり深え、私が本心の証拠には、山三郎が来たら手初めの奉公に、一番山三郎を瞞かして見せましよう」

圖「むゝ本当なら耳をかせ」

半「へい、うむ成程承知しやした、一番すつかりと遣つて見せましよう」

圖「その通りにしろ、山三郎を瞞すことは其の方に申し付ける、奉公初めに欺き遂せて毒酒を飲ませろ」

とおおぜい
と多勢寄集り、明日の手配をして居るうちに夜が明けると、

眞葛周玄の調合で毒酒を製え、これと良い酒とを用意して、粥河

を始め千島禮三、眞葛周玄までも、実に青菜に塩というような、皆我が折れて改心というような顔色をして、山三郎の来るのを待つて居りますと、此方の石井山三郎は実に強い男で、唯一人で南山の粥河の賊寨へ其の日の夕景に乗込んで参るといお話、一寸一息つきまして、又申上げます。

四十一

引続きましてお聞きに入れまする、竹ヶ崎の南山へ山三郎一人で乗込んで参るといお話、一体山三郎は釣の極好きな人でございいますから、此の日も宅を出まするとき、釣に行くような風を致

して、一寸ちよつとした結城あわせの袷あわせに献上博多の帯をしめて、弁当箱は籠かごに出来て居ります。竹の編物で極凝った弁当でございませう、これを携さげまして、關兼元の無銘摺上げ一尺七寸ばかりの脇差を挿さしまして、日和下駄を穿いて竹ヶ崎へ掛つて参ると、とつぷり日が暮れまして、月の出ようという前で、頓やがて粥河が屋敷の大門を這入つて、二重門の所へ立ちまして、

山「お頼み申すく」

というと奥では待構えて居た一同が、此の声を聞附けまして、

圖「これく千島、表に声がするが山三郎が参つたようで」

禮「宜しゆうございます」

圖「半治支度は好よいか」

半「へえ、すっかり出来て居ります鉄砲へも玉込をして置きました」

圖「それまでには及ばん、酒の中へ毒は這入つて居るか」

半「へえ、入れて置きました」

圖「これく千島、手前腰の物を差して往かん方が宜い、無刀の

方が却つて気を許すからなそれに一人では宜くない、長治と二人

で出ろ、重々しくな、粥河圖書がお出迎にまかり出ますのだが、

只今剃髮致しまする支度をして居りますからお出迎には出ません

が、速かにお通り下さい、手前どもは粥河が同類でござる、貴方

の思召を粥河から逐一承り、頓と改心致しましたと、好いか神妙

らしくいえ」

禮「心得ました」

とつかくくと二人で参つて門の開戸ひらきどをギイと左右へ開けまする。

禮「はゝア宜ようこそ御来駕で、東浦賀の石井氏で入いらせられますか」

山「はい、山三郎で、昨夜ゆうべ小原山に於てお約束致したから罷まり出ました、何うか粥河様へお取次を願います」

禮「はゝア、昨夜さくや粥河圖書御面会后立歸りまして承わりました、実に貴公さまのような義侠のお心掛のお方はない、実に何かたうも忝かたじけない御教訓であつたと粥河圖書感涙を流してな、今日こんにちは頭髪あたまを剃そりこぼち、麻あしの法衣ころもに鼠ねずの頭陀ずだで行脚あんぎゃの支度を取揃えまして、

唯今山を下りまする、その改心の様子を御覽に供えましたら石井氏は嘸かしお悦びであらうと其れのみ申して居りまする、手前は千島禮三と申し旧金森家に居りまして小納戸役をも勤めました者で、今日より貴公様の御教訓に依り、改心致して真人間に相成ろうと悦び居りまする仕儀、これ皆尊君様の御説諭に基きますこと、実に何ともはや恐れ入りましたことで、粥河が先刻よりお待兼申し居りまする、さア速かにお通りあらせらるゝ様に、おや何だ、何処かへ行つて居ねえわ、山三郎殿は来たのかと思つたら何の事だ」

長「居ねえつてお前が頭を土間へくツつけて、ぐずぐず云つてる中、頭を跨いでつうく先へ行つて仕舞つたのよ」

禮「なんだ、そんなら左様そうと早くいうが宜い、馬鹿ばかくしい」

と千島はぶつ／＼云つて居ります。此方こなたの山三郎は中々待つてなどは居りません、ずん／＼玄関口から案内もなくずうつと奥へ通り、粥河圖書の居ります二間けんの大床おおどこの檳榔樹びんろうじゆの大きな柱の前の処へびつたり坐つて、体たいを据えました。これは若もし乱暴でも仕掛けたときは柱を楯に取つて多勢おおぜいを相手に切捲きりまくろうという、そこで床柱きわの際きわへ坐りました。前へ釣つりの弁当箱べんどうばこを置きまして座を占ぎめました坐相ざそうの見事なことに実に山をゆり出した様な塩梅あんばいで、粥河は先まず驚おどろきましたして、

圖「これ／＼千島、これへお出いでになるに御案内ご案内もせんで何ういうものだ」

禮「御案内致そうと心得まして、彼れへ参つて挨拶をして居るうち、頭の上を跨いで奥へお出で、驚きましたので」

圖「怪しからん、届かん事ではないか、これはく宜うこそその御尊来で、粥河圖書身に取りまして実に大悦至極にござります、昨夜の御意見に附きまして、同類の者へもそれ／＼尊公様の思召めしの通りを申し聞けました処が、皆々感涙を流して有難がりま

して、実に賊を働きますは耻入つたる事である、必らず改心の上親ある者は親方へ、主ある者は主方へ歸つて元の職業を致すと、二百人も居ります中に一人も不服の者なく改心致しましたは、偏ひとえにあなた様の義侠の御親切なるお心が銘々に感通かんつう致しました訳でござりましょう、実に此の上もない有難い事で、現に

御覽の通り同類の者は昼程一時じに出ますると目立ちますから、皆それよ々夜の五つ時までに下山させまして、只今残り居ります者は千島禮三、眞葛周玄に、長治と申す旧来居ります者と、其の外十四五人居りますばかり、斯かくの通り畳建具なども皆積上げまして、皆近辺の貧なる百姓に分け与える心得で、金銀なども悉く遣ことごとくわしましたが、まだ々残り居ります訳で、御安心下すつて何卒どうかあなた様の御おさか盃かずきを頂戴致して、穢けがれたる臟腑を洗い清めまして速すみかに立退たちひきまする心底で」

山「いやそれは何うも辱かたじけのうございます、お前さんが改心して下されば、私も誠に申した甲斐あると申すもの、さア速かにお立退きなさい、下山げさんの処を山三郎これに於て篤とくと見ましよう、さアお

立退きなさい」

圖「は、ア畏かしこまりました、就きましては甚だ差上げる物もござらんが、聊いさゝしゆこうか酒肴を取寄せお待まちうけ受を致して居りましたから、何うぞ一盞さんお傾け下され、さ周玄これへ」

というと、眞葛周玄は恭しく足附の高たか膳ぜんを山三郎の前へ据えまして銚子を持つて参りました。其のうち一つは毒薬の仕込んである酒、一方かたくは他ほかの者が飲むように銚子を替えて持出しました。実に山三郎の命の危あやういこと、風前の灯火ともしびのようでござります。

四十二

粥河圖書は丁寧(とうぜい)に手を突きまして、

圖「そのお盃を何卒石井氏一つ召上(めいじやう)つて私へ頂戴(ちやうたい)いたしとう存じます、何うか御盃を頂きたいもので」

山「御盃などと大形おおぎやうなことを云つては困ります、私は一体酒は飲まん性たちで」

圖「でもございましょうが、切めて一杯召上(めいじやう)つて私へ頂戴致し度とう」

山「いや、私もまるつきり飲まんのではないが、お前さん処とこの酒は飲みません、お前さんが他ほかから盗んだ穢けがれた金銭で買った物を、正しょうじやう道どう潔白な山三郎の口へ入れては私の臟腑わたしを穢けがす様な訳で、

私は厭わしだ、盜賊の物を飲んだり食ったりするのは厭だ、渴かつしても

盗泉とうせんの水を飲まず、其のくらしいの事は山三郎存じて居ります、

其方そちらで勝手にお飲みなさい、私は釣わしに行きますとき、何時いつでも母おふくろ

親が旨いものを拵たくえてくれて、肴たんは沢山はないが、此方こちらはこちらで勝手に遣ります、其方そちらはそちらで勝手にお喫ありなさい」

と山三郎は持参の酒を盃に出してぐびりぐびり飲んで居る。

圖「いやこれはくどうも、それではどうも折角の心こころ入いれも無

になります、御意には入りますまいが、元より尊君の様なる正道

潔白なるお方に差上げまするには、盗取ぬすみりました穢れた金銀を

もって求めました酒肴さけさかなではございません、是は主家しゆか金森家改

易の折、皆々一家中の者が引取ります節に分配しました金子で、

それを持ちまして手前共が求めました酒肴でございませす」

山「矢張それが穢れて居ります、主家改易で皆々主家を引取ると
 き金子を分けるなぞというは、最^もうそれが穢れて居るので、主家
 改易に際し金なぞを持つて出る心が一体穢れて居るのだ、其の分
 けた金をもつて買った物は私^{わし}はどうも食いにくいから、私^{わし}は矢張
 持参の物を此方^{こちら}で勝手に用います」

圖「ではござましようが、せめて麴酒^{そしゆ}を一盞^{さん}だけでも召上つて」

山「いや、私^{わし}は勝手に、どれ私^{わし}がお前さんに酌をしましよ
 うと毒酒の方の銚子をさしますから、

圖「それでは恐れ入ります、いえこれは」

山「でも折角だから私^{わし}がお酌を」

というから粥河はこれを飲んでは大変と顔^{がんしよく}色^{しよく}が変ります。

其の間海うちの方に月は追々昇つて来ますると、庭の榎えのきに縛られて居る小兼が、

兼「旦那アーその酒を飲むと毒が這入つて居ますよー、お前さんを殺そうといつて皆みんなが企たくんで居ますよー、旦那アー油断してはいけませんよー」

という声が泣き噎しやがれまして、実に声は立ちませんが、ひツくと喚わめきまする声が山三郎の耳に這入るから、と向うを見ると垣根わきの傍にある榎の大木に縛り附けられている女が有るから、

山「あの女は何なんです」

圖「へえあれは何なんでござるか頓とんと心得ません」

山「お黙んなさい、お前は何なんだ、此の家の主人いえで此の庭はお前の

庭じやアないか、自分の庭てい内ないに、婦人が彼の通り縛付けられて、ひい／＼泣いて居るのに、主人あるじが知らんで済みますか」

圖「いや彼あれは江戸屋半治と申す者と約束のあるとか申す芸者で、何か半治が不実を致したと申し、刃物を持って追おっかけて参つたを、半治が立腹して刃物をもぎ取り、彼あれが縛りまして彼のあ様に致して置くので、手前に於ては聊いさか心得ません」

山「黙れ、貴公は何と申した」

圖「へえ」

山「いやさ改心して頭髪あたまを剃こぼち、麻こもの法衣ころもに身をやつ削し、仏ぶつ心んになると云つたではござらぬか、その仏に仕える者がかよわ纖弱いい婦人を彼のあ如く縛つて置くをなぜ止めん、なぜ助けん、其もとの許との

心底の訝いぶかしき事は疾とくより存じて居る」

と云いながら、側に置いた関の兼元を取つてひらりと抜いて、

山「さア一緒に往つて見なさい」

とぐつと抱上げましたから、圖書は手込になるまいと手足を働かして見たが逆とても敵かなわん。例の拾八人力あると云う山三郎の腕に

力を籠めて締附けられたのだから耐たまりません、うんと云つたばかりの有様を見て、

傍そばの者も驚きまして呆氣に取られて見て居りま

すと、山三郎は圖書を小脇に搔い込んだまゝ、大勝おおまたに歩いて庭に

下りようと致します。千島禮三は此の体ていに驚いて立上るのを山三

郎は振返りながら関の兼元を突附けて、

山「さア、じたばたすると片かたッぱし端から踏殺すから左様心得ろ、

手前らは己を此処へ誘おびいて、俘虜とりこにして命を取ろうとした企たくみの罠へ、故意わざと知しつて来たを気が附つかんか、大篋おおべらぼう棒ぼうめ、ぐずぐずすれば素首そつくびを打落うちすぞ」

という其のけんまくの怖おそろしいのに盗賊共は只最もう胆きもを挫ひがれましてきよとくして居ゐりましたが、其の中に千島禮三ささ流石りうせきに度胸すわも据すつて居ゐりますから、

禮「それ鉄砲を」

と云いつたけれども二拾一挺ある鉄砲へ玉込たまごをして置おいたを、江戸屋半治はんぢが残のこらず繩なわにからげて谷やへ投なり込こんで仕舞しまつて、鉄砲は一挺も無いからどたばたして居ゐりましたが、粥河かの手箱てのこばの蓋ふたを開あけると火繩かの附かいた予かねて用意よういの鉄砲があるから、これを取とつて千

島禮三が山三郎に狙ねらいを附けると、山三郎は振向いて身構えをする、
 所へ江戸屋半治は飛とび来きたつて、櫓かの三尺ばかりの棒をもつて、ず
 んと力に任して千島の腕を打ちましたから耐たまらない、千島はから
 りつと鉄砲を落す、其の途端に引ひ鉄きがねは下おりましたから弾はどん
 と発して庭石へ当りました。千島は同類と思つた江戸屋半治はひ
 つくり覆かえつたので猶更驚きまして、周玄長治ともうろ／＼た狙えまわ
 る、同類の奴らは取る物をも取らずばた／＼逃げ出して南山を下
 りると、予かねて江戸屋半五郎が八州へ御おと届つけに及び陣屋へ知れまし
 たから、それと云つて浜町に居ります組屋敷の与力同心衆が出張
 致して、山の下に整然ちやんと詰めて居るから、どか／＼下りる奴らは
 忽ちに御用／＼と造作もなく縛られました、多おお勢ぜいですから一

人宛ずつは縛づつられない、五六人ぐらいずつ首くつ玉まるを括くくして、宛まるで酒屋の御用あきどくりが空徳利あきどくりを縛づつるようで、ばたく同類からの者は搦からめられました。

四十三

所へ半治は山三郎の側へ駈かけ出して来て、

半「旦那お怪我がなくなつてお目出とう、実に先刻さつきからお怪我をなされはしまいかと心配しんぺいしました」

山「半治か、手前てめえは何故こゝ此所へ来た」

半「へい、誠に何うも、貴方のお言葉を背きますようですが、実

にお案じ申して参りました」

山「これ半治、聞けば手前はてめえ粥河の同類になつて小兼を縛付けた
というが、何うしたのだ」

半「へい、実は旦那をお助け申そうとして小兼と相談づくでした
事で、昨夜ゆうべ兄貴の処へあなたがお出で、明日竹ヶ崎の南山へ行く
が、一人でも子分や縁者の者をよこすな、よこすと向後きようご足踏あしづみ

はしない絶交だ、と斯う旦那が仰しやつて、兄貴も心配して、旦那
にお怪我があつてはならんと一通りならねえ苦勞して居る様子
を見ましたから、私はわっち猶驚いて、旦那に御恩になつた恩返しは此
の時だ、命を捨てても旦那にお怪我のねえようと考えましたが、
お前さんは云つた事を反故ほごにしない性たちだから、一人でも往いけば以

来江戸屋の土台は跨がねえと仰しやるに違えねえ、兄貴も五十一にもなつて旦那より他に力に思う者はねえ、私はやくざな人間だから、兄貴と縁切になつて出て仕舞つた所が兄貴も困りやアしめえ、こりやア一番縁を切つてお味方をしようという考えでしたが、そこが一人の兄きようでえ弟ででございますから、私の様な斯んな人間でも、容易に勘当するの縁切にするなどという事もあるめえと、小兼と言ひ合せて、濟まねえ事だが私わっちが縁切と云つたら、泣いた事のねえ兄貴も涙ぐんで兄きようでえ弟での縁を切り兼ねて居るのを、私わっちが縁切状を書いて飛出した訳ですから、私わっちとは生涯付合つて下さらねえでも仕方がねえ、唯兄貴の処へは何卒相変らず来て下さつて力になつて遣つて下さい、然そうすれば誠に有難い事でございます、

この山へ入込むいりこのも容易にやア出来ませんが、定蓮寺の海禪坊主が疾とうから小兼に惚とれて居ることを知つて居るから、小兼と馴合なれあひ、二人ですつかり欺だまかして彼奴あいつに紹介ひきつけの手紙を書かせ、それから踏ふ縛んじばつて、お蘭様さんを埋めた棺桶の中へ投ほうり込んで、石蓋をして畳を敷いて来ましたが、此所こゝへ来て見ると、粥河の畜生中々本当にする奴じやアねえ、何でも山三郎の間まわしもの 諜しだくと云つてたが、その中小兼うちが剃刀を持って暴れ込んで、切るの突くのと騒いだので真まに受けて、何うしてく其れまでにするにやア容易じやア有りません、憫然ふびんだが小兼を縛り附けて、加減して居ちやア露あらわれるから本当にびしゃくと思ひ切つて殴つたが、小兼は定めし苦しかつたらう、まア夫婦のものが斯う遣つて心配しんぱいして、旦那にお怪

我をさせめえとおもつてねえ、お腹立かは知らねえが、二人のものが言葉に背いて此処へ来たから、これからはもう構わねえと仰しやつても仕方はねえが、あなた何卒兄貴の処は何にも知らねえのだから何分にもお頼み申します」

山「左様かい、まア二人の者が己を助けようとそれ程に思つて此の山へ乗込んで、まア小兼、手前は昨夜から縛られたか」

兼「はい、旦那此の粥河は私の母親の勤めた岩瀬様のお嬢様の仇敵だから、私は死んでも宜いから、半治さんどうか旦那にお怪我のないようにお役に立って働いておくれと話し合いで来ましたから、縛られるもとくゝ覚悟だし、引撲かれて骨が挫けても宜いと思つて、蚊に螫れるも毒虫に喰われるも我慢しましたが、蛇

が出やアしないかと本当にそればかり心配しましたが、まア旦那にお怪我がなくって半治さんお前も嬉しかろう」

山「早く縄を解いて遣れ、まア手前等は己がどれ程のこともしねえに、恩人とか旦那とか云って命に掛けて能くまア斯うして庇つてくれて、それに付けても、これ粥河、此女ア芸者だ、一人はな

侠客肌いさみはだの女郎屋の弟で、斯ういう身分の者でさえも恩義を知つ

て命を捨てすてても己を救うというに、手前は何うだ、人を殺し金をぶつたくり、或は追剥ぎあるい或は他人の娘を誘かどわか拐わして又は辱しめると

云う、その悪行というものは、帯刀をする身の上で有りながら、

この半治や小兼に比ぶれば汝われは虫よりも悪い奴だ、殊には己が助けて上総の天神山の松屋かくまに匿かくまって置く手前の女房お蘭は、棺の中

で蘇生して手前の手紙を見て自害をさしてくれというを、私わしが種い
ろく々くに止めて彼女あれは生いきて居るが、夫の悪事が他たより露顕しても、
わたし私の口から漏れたとしか粥河は思いますまいから、何うも生きて
 居ては操が立たんから自害をさしてくれと云つた、な、これたとい仮令
 悪事を知つたとて人を生いきうめ埋めにするような人にんびにん非人の其の方でも、
 夫と思えばこそ命を捨て、も夫の悪事を隠そうとするお蘭の貞節
 に引替え、よくも己を欺たぐいて多おおぜい勢寄つてたかつて己を殺そうと
 企たくんで、空々しくも小原山において恥を捨て、草原の中へ土下座
さまをしたが、あの態さまは何うか、実に憎むべき所業である、さア手前
 のような奴を助け置かば衆人の害になる、なれども、己は盜賊を
 斬る役でもなし、又穢れたる者の素そつくび首はねを刎はるような腰の物は持

たん、繩にかけて役所へ引くから左様心得ろ、嗚呼立派な武士で
 ありながら、如何に慾に迷えばとて斯かる行いをいたして不届至
 極な奴である、お蘭に愧はじろよ、これで恥を知らんといえば実に
 犬畜生である、虫よりも劣る奴で憎むべき奴である」
 と山三郎力にまかして、前足にかけて二つ三つみ顔を蹴けつけまし
 た。

四十四

粥河圖書は山三郎に耻しめられて、顔を土足で蹴け附つけられた時、
 あゝ悪い事をしたと始めて夢の覚めたる如く心付きまして、段々

前々ぜんぜんの悪事を思えば思う程、吾身わがみながら如何なればこそ斯かかる
 非道の行いを致したか、かゝる非道の夫を仇あだとも心得ず、お蘭が
 自害致そうとまでに思いしか、あゝお蘭は蘇生して松屋に居おるか、
 お蘭に何とも面目次第もない事である。と鬼の眼に涙で潜はら然と
 草くさ原へ涙を落しますので、

山「何うだ、汝われが改心致せば好いい女房を世話して遣ろうと云つた
 は松屋に匿かくつてあるお蘭の事だ、手前全く改心致せば、彼あれ程ま
 でに思うお蘭の心を憫然ふびんに思い、山三郎媒なこうど介いたして連添わせ
 ようと申したのだ、なんと山三郎の申した事を忘れやアしまい」
 圖「はゝゝゝはア山三郎殿、拙者がこれまでの悪業、貴公が義侠
 の言葉に責められると何とも面目次第もござらん、唯今ふツつと

改心いたした、その証拠をお目に掛けん」

と圖書は切腹しようと思つたが、無刀で居りますから、突然いきなり山三郎の提げておりました所の關の兼元の刃はの方へ両手を掛けて自らぐつと首筋をさし附けて、咽喉元のどもとをがつくり、あつと云つて前へのめるから、

山「あゝ、粥河汝われは自害致すか」

圖「あゝ、何も申さん、とても死は遁のがれん所の粥河で、お蘭を助けて松屋にお匿かくまい下された事は只今始めて知りました、お蘭の心に耻入りました、自害致して相果てます、これ皆天命で、素もとより死刑は逃れぬ粥河、どうぞ縄に掛けて死にたいから、お蘭には能よく貴公様より詫わびをいって下され」

と血に染つた手を合して山三郎に向つて合掌して、真実のほとけ 仏ごころ 心になりましたから、山三郎も江戸屋半治も我がを折つて、粥河圖書の様子をみている所へ、ばたくと高張提灯を先に立てまして駈けて参つたのが江戸屋半五郎、お蘭の手を引いてつかつかと来まして、

半五「旦那にお怪我はございませんか」

山「半五郎、手前も来たのか」

半五「へい、お前さんに愛想をつかさされてもと存じ、私は参りました、今蔭で様子を聞くと半治が昨夜ゆうべの愛想づかしもお前さんの身の上にお怪我のないようにと思ひ詰めて、縁切に参つたのだと申すので、私は此の垣根の蔭で聞いて泣いておりました、これ半

治、手前はまア能く己に愛想づかしをいって、来てくれたなア、
 小兼のも本当と思つた、能くまア悪党の粥河を欺かして手前も且
 那にお怪我の無えようにして呉れた、有難てえ、今日上総の天神
 山の松屋へ行つて此のお嬢さんにお目に懸りお連れ申しました」
 山「お蘭さんかえ」

蘭「はい」

と云いながら粥河の自害の体を見て自分も直ぐ自害しようと、
 半五郎が差して居る刀に手をかけますから、

山「お蘭さん、早まっつてはいかん、今自害する場合でない、まア
 お待ちなさい」

と止めて居る。粥河圖書はお蘭を見ると両手を合して、

圖「お蘭か、許して呉れ」

と云つたのが此の世の別れ、前へかつぱとのめる。所へ八州の衆が来て死骸に縄をかけて引いて行きまゆした。お蘭が此の体ていを見まして、猶自害しようと思すを多おおぜい勢せいに押しめられ、詮方なくあたまて頭髪をふつつり切り棄てまして、其の身みは宮谷山くうこくざん信行寺しんぎようじ海かい念ん和尚おしょうの弟子となり、名を妙みょう貞ていと改めて、今に其の墓は西浦賀のこに遺のこつてあります。是にて悪人たいら平らぎまして、浦賀の町々が白浪の騒さわぎも無く栄さかえましたも、皆山三郎が稀なる義侠の致す処で、又半治小兼は目出度く夫婦に相成りまして、二代目江戸屋を相統致して、只今もつて江戸屋半五郎の家いえはございます。又石井家は妹お藤に養子をして石井三郎兵衛と云い、今に旧家として富

栄えて居ります。

(塙小相英太郎速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の五」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

1975（昭和50）年1月15日再版

底本の親本：「圓朝全集 卷の五」春陽堂

1926（大正15）年発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返しの記号は原則としてそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ

「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：仙酔ゑびす

2011年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松の操美人の生理

侠骨今に馨く賊胆猶お腥し

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 三遊亭圓朝
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>